APRIL

國民飛行

THE NATIONAL AVIATION MAGAZINE

大正五年一月十七日第三種郵便物認可（毎月一回發行）
大正五年三月二十三日印刷納本大正五年四月一日發行

毎號◉婦人欄◉少年欄◉摸型飛行機欄の設け有り

本誌は長岡中將の會長たる國民飛行會の機關なり

獨　日
民間飛行義捐金
比　較

お忙しくて全誌御通讀の御暇の無い御方でも前書だけは是非御一覽を願ひます

四月號

第四號　國民飛行會發行　第壹卷

VOL. 1 Published by the National Aviation Society No. 4

東京文化財研究所
2016.10.31

東京市深川
福岡縣枝光
安田製釘所

大飛行家

スミス物語

萬人向きの好讀物

世の中に飛行家と云ふ者が生れて以來未だ曾つてアート・スミス君位興味のある飛行家を見ない。單に十五歳の少年から飛行機乘りになつたのが面白いと言ふ許りでなく、其生涯に於てスミス君程華やかな情話を有つた飛行家は恐くは他に一人もあるまい。實にスミス君の過去は悉く小說であり、又た小說以上の實際的演劇である。而して又罕に觀るの孝子譚であるのだ。啻に過去のみならず君の將來は何時までも然うであらう。

スミス君の傳を讀んで泣かざる者は人でなく、聽いて發奮せざる者は國家に益無き動物である。

殊に吾々は世の少年諸君に對つて購讀を薦め、スミス君の如き價値ある少年成功者の其の健氣なる志と、不撓の努力とを諭へたいと思ふ。こは決して假想的の物語でもなければ、亦冒險小說でも何んでも無い。事は洵に一つ〳〵貴ぶべき諸君の敎訓であると信ずるからである。

目下特價提供中であるから此の好機を逸せない樣に至急御購讀あれ。

▲定價　金拾六錢　▲特價　金拾貳錢　▲郵送料　金貳錢

特價提供

◉發行所　東京市麴町區四番町十四番地
振替貯金口座東京三二〇四二番　國民飛行會出版部

國民飛行（第壹卷第四號）目次（大正五年四月一日發行）

表紙繪（民間飛行義捐金日獨比較繪）……樺島勝一畫伯

口繪說明
▲Well Come!　▲天才來!!!
▲耐寒飛行　▲世界最大の飛行艇

飛行機（作歌）……國民飛行會會長 陸軍中將 長岡外史（二頁）

英國の海軍大臣
飛行船の有効を認む（公論）……時事新報記者 知覽健彦（二）

輕快な飛行機と大飛行機の建造（國造の研究資料）……N生（七）
耐寒飛行……城東渡部一英（一〇）
英國議會に於ける倫敦市の防空問答……一記者（一四）
佛國軍用飛行機ヴオアザン式の變遷……佛國飛行大尉 滋野男爵助手 松岡陽一（二〇）
第七號飛行機譚……青鳥生（二五）
世界最大の飛行艇……某海軍飛行將校（二八）
ソアーリングホテル……蒼天生（三〇）
飛行機で選擧運動……（三三）
飛行界茶話……倉富砂邱（三三）
楯の半面（田中館博士の印象）……蒼天生（三六）

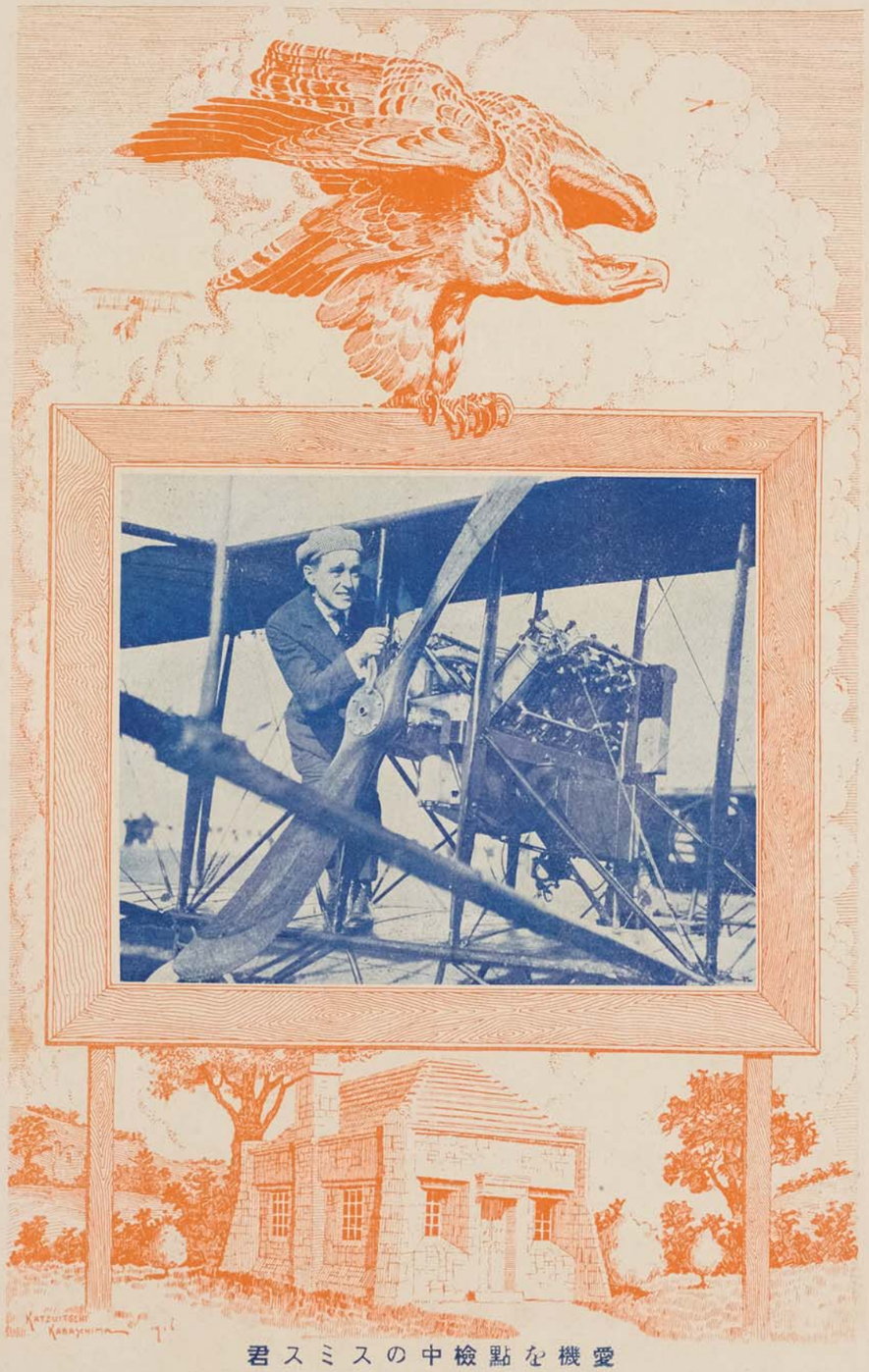
百六十五年前に
英佛海峽を渡つた飛行機……桃太郎（四〇）
俺は武藏野の鳶である……老鳶（四四）
冒險小說 秘密の飛行艇……仲木貞一（四八）
模型飛行機……（五四）

少年界

婦人界
スミスの母……（五六）
古い女と飛行機……丹いね子（六〇）
ノートのノート……國分邦彦（六二）
空中の悲劇（戲曲）……仲木貞一（六五）

雜錄……（六九）
外國電報……（七二）
飛行用語字彙……
英文欄……
國民飛行會入會者氏名……

WELL COME!

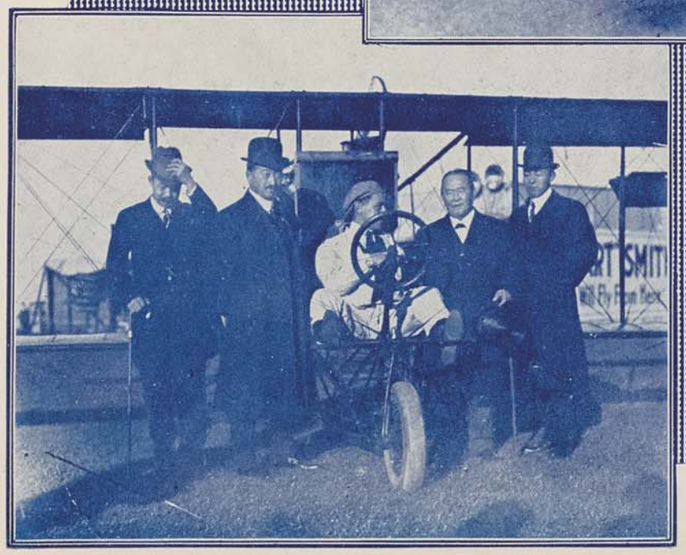


愛機を點檢中のスミス君

大阪市北區
上福島

三安田鐵工所

天才來！



《上圖》愛用機（カーチツス型複葉）とスミス君（中圖）スミス君と夫人エミーさん、自働車は競爭用に使ふのです。スミス君は自働車の操縱にかけても天晴れの名選手であります。《下圖》スミス君と益澤男爵、寫眞は桑港に於て撮影せるもの（脫帽せるは男）

飛行機

國民飛行會々長　陸軍中將　長岡外史作歌

一　新日本の國民は
空に力を注ぐべし
飛べよ飛べよ飛行機飛べよ

二　新日本の國民は
國を護るも空にあり
國を攻むるも空にあり
飛べよ飛べよ飛行機飛べよ

三　國に仇なす敵あらば
空に稜威を輝かせ
空を軍の庭として
飛べよ飛べよ飛行機飛べよ

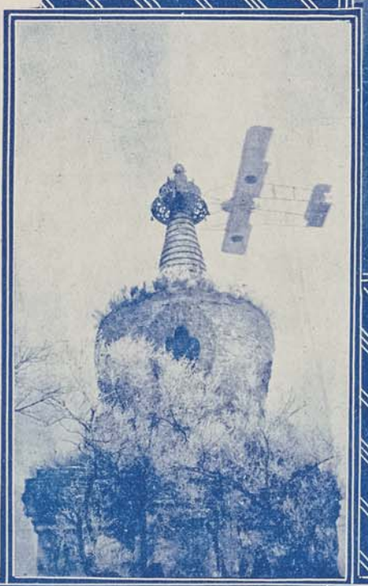
四　新日本の國民は
世界の空ををさむべし
空に思ひを致すべし
思ひの儘に空に飛び
飛べよ飛べよ飛行機飛べよ

（し宜もてに調ロ變）子拍二分四調ハ

5	5	3	4	5.	6	5	5	4.	4	2.	4	3			0
シン	ニー	ツ		ボン	ノー			コク	ミン			ハ			
レン	ニー	ツ		ボン	ノー			コク	ミン			ハ			
ク	ニ	ニ		アダ	ナス			テキ	アラ			バ			
シン	ニー	ツ		ボン	ノー			コク	ミン			ハ			
5.	5	5.	7	1.	2	1	6	5.	5	6	5	5.			0
ソー	ラ	ニ		オモ	ヒヅ			イタ	スベ			シ			
クー	ニヲ			セム	ルモ			ソラ	ニア			リ			
ソー	ラヲ			イク	サノ			ニハ	トシ			テ			
オモ	ヒノ			マー	マニ			ソラ	ニト			ピ			
5	5	5.	3	6	6	5.	5	1.	2	1.	7	1			0
ソー	ラニ			チカ	ラヲ			ソソ	グベ			シ			
クー	ニヲ			マモ	ルモ			ソラ	ニア			リ			
ソー	ラニ			ミイ	グヲ			カガ	ヤカ			セ			
セカ	イノ			ソラ	ヲー			ヲサ	ムベ			シ			
2	3	2	1	6.	6	5	0	6	6	5	1	3	2	1	
トー	ベヨ			トベ	ヨ			ヒコ	ウキ			トベ	ヨ		
トー	ベヨ			トベ	ヨ			ヒカ	ウキ			トベ	ヨ		
トー	ベヨ			トベ	ヨ			ヒカ	ウキ			トベ	ヨ		
トー	ベヨ			トベ	ヨ			ヒカ	ウキ			トベ	ヨ		

飛行

新市街の瞰制



喇嘛教會の塔（在奉天）

（塔を掠めるは王式二十一號なり）

試驗班の一行

（すまりあで長關兵通交上井は方いき大番一の列後）

野戰格納庫

（すまり有簡四のもる）

耐寒

撫順

鳥瞰せる奉天停車場

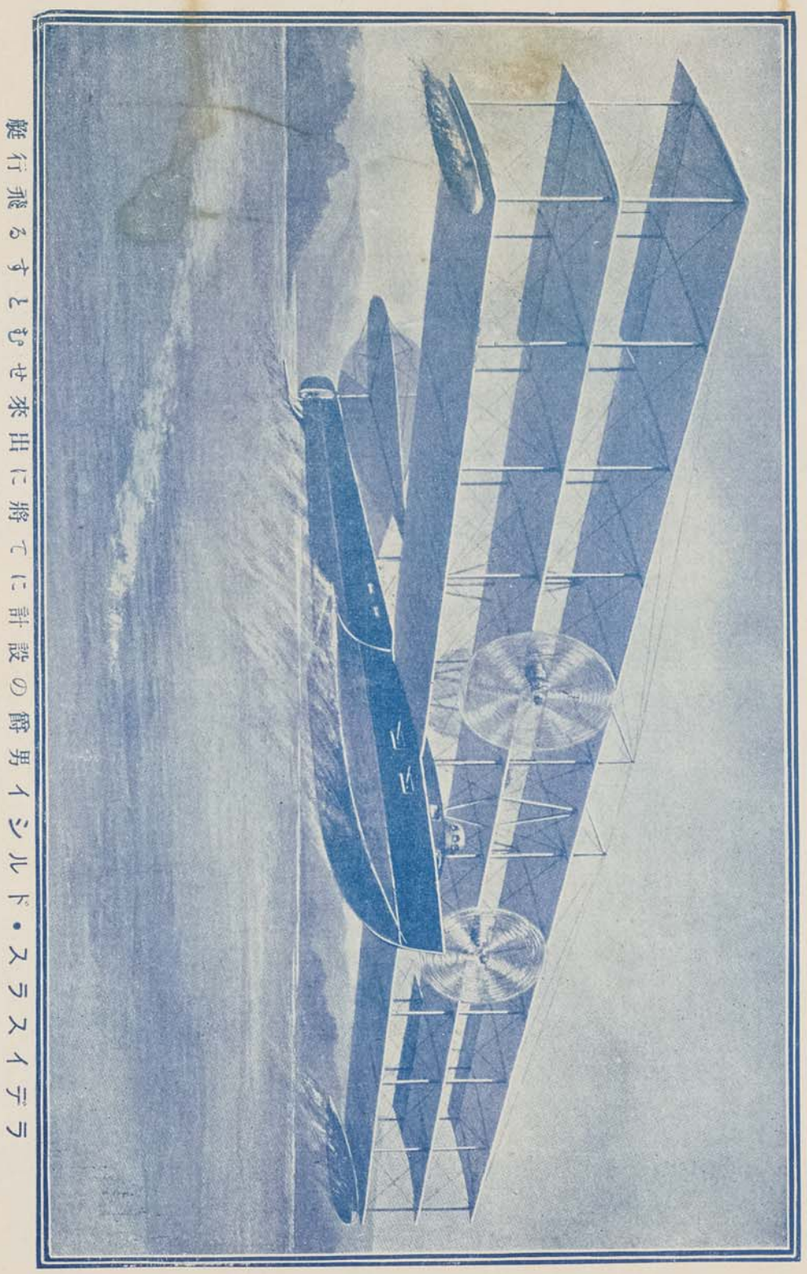
テントの式

（奉天の試驗地に設けたり）

奉天公園内の樹木

（すでのもたし晶結にめ爲の氣寒が霧んせまりあはで雪はのもい白るて滿に枝）

艇行飛の大最界世



艇行飛るすとむせ來出に將てに計設の爵男イシルド・スラスイデラ

（照參事記「艇行飛の大最界世」頁四三文本）

轉移

園池工具製作所

園田彦武
池田辰衛

製作工場
東京府下大崎町（大崎驛西側）
電話芝特長三九五四番

製作品目
カッター、リーマー類、高速度鋼錐、諸ゲージ類、マイクロメーター、タップ其他精密工具一般

特色
設備——完全
技術——優秀
期日——確正

一手販賣店

千代田組

東京支店　東京市京橋區元數寄屋町
電話新橋特長一八三一・〇八三一・一二五七・〇四三七番

大阪支店　大阪市北區曾根崎町二丁目
電話北長三四七・三四八番

九州支店　福岡市東中州二番地六
電話特長三六四一番

東北支店　仙臺市新傳馬町五番地
電話特長一一四二番

資本金　貳千萬圓（拂込濟）
積立金　七百八拾萬圓
（大正五年一月調）

東京市日本橋區駿河町壹番地

株式會社三井銀行

電話番號
本局　二百九十九番　長百二十九番
四百五十四番　長百三十番
特長　四百二十番

東京深川支店　小樽支店　横濱支店　名古屋支店
京都支店　大阪支店　大阪西支店　神戸支店
廣島支店　門司支店　福岡支店　長崎支店

年中無休刊（毎號八頁）

新聞を選ぶは家庭の急務也

▼其人を知るには先づ其友を見よとは昔からの名言である
▼其人を知るには其愛讀せる新聞を問へとは今の代の至言
▼「朝日」を愛讀するといふ事で人格が判るとは現代の定評
▼それは朝日新聞の報道が總て精確で機敏で且信用があり
▼殊に内外各地の特電は朝日の最も誇とする所で歐米各國
▼世界中の情勢から日本全國如何なる方面の事をも網羅し
▼記事は上品で且つ面白く一般社會に有益なる材料が多く
▼人格の高い方や注意深い家庭では「朝日」に限る故である

東京朝日新聞

本紙定價
一ケ月　金三十七錢
三ケ月　金一圓六錢
六ケ月　金二圓七錢

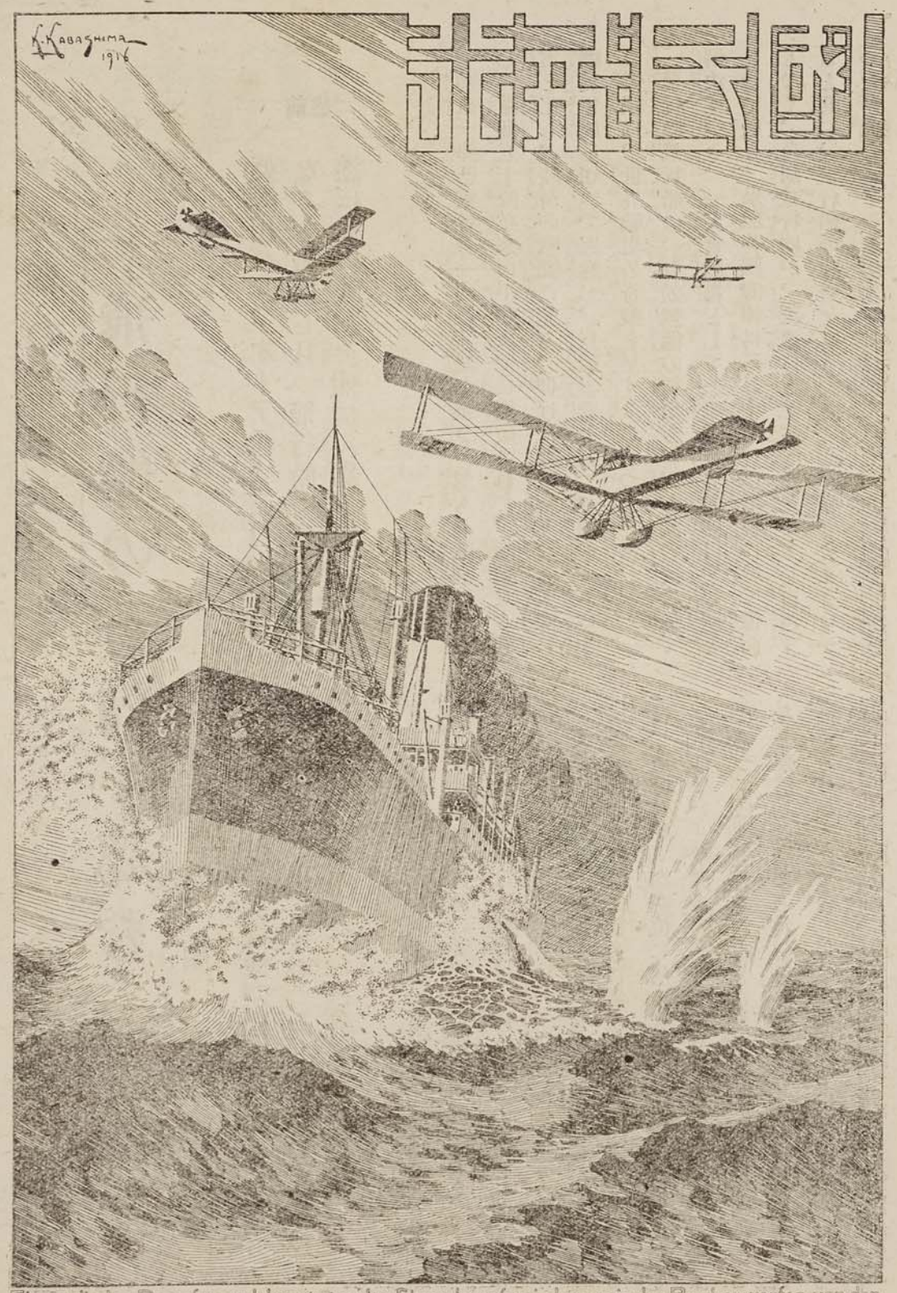
地方郵送定價（郵税共）
一ケ月　金四十七錢
三ケ月　金一圓三十六錢
六ケ月　金二圓六十七錢

海外郵送定價（郵税共）
一ケ月　金九十七錢
三ケ月　金二圓八十六錢
六ケ月　金五圓六十七錢

廣告料
五號活字十七字詰
一行（一回）金六十錢
掲載位置指定金五錢增

發行所
東京京橋區瀧山町四番地
振替口座東京一七三〇番

北海に於て爆彈と狂波とに惱む英國商船



Ein englischer Dampfer, welcher gegen den Sturm kampfen, indem er in das Bombenwerfen von den deutschen Flugzeuge angriff wird, welche sich auf einmal von irgendwo her herfahrten, in der Nordsee.

■■四月の三越■■

一日より
寄裂見切反物大賣出し（廿五日迄）

第卅一回
新柄陳列會（十五日迄）
和田英作氏筆油繪富士山と薔薇展覽會（十五日迄）

五日より
五月人形陳列會
洋傘陳列會

十日より
懸賞裾模樣圖案陳列

廿日より
日本書道會主催第五回書道會展覽會（廿六日迄）

東京 三越呉服店

（公論）

英國の海軍大臣

飛行船の有効を認む

時事新報記者　知覽健彦

前書

英海相バルフオーア氏は二月十七日の議會に於て自國飛行機の獨逸に比して劣等なるを告白し且つ飛行船の建造を怠りたるを嘆じて止まなかつた――而して氏は遂に此の缺點を補はん爲めには人力の有らん限りを盡すべしと絶叫した

『一』

颱風一陣巴爾幹の一角に沙塵を捲き、忽ち全歐洲に波及し、歐洲五十餘年來の平和は爰に攪破されて、暗澹たる戰雲と化し、陸海の戰鬪に先ち、仰げば蒼茫極りなき天際に鵬翼猛風を切つて突進し、巨鯨雲霧を蹴つて躍進する空中の慘禍は、世界戰史の奇觀を呈するに至つた。

飛行機飛行船の、有効無能の眞價も、即ち此の機に於て解決すべき、一大實驗場として一般飛行界の注目する所となつて居る。果然英國海相は二月十七日の議會に於て憶面もなく、自國飛行機が、獨逸に比し劣等なることを自白すると共に、飛行船の建造を怠りたることを嘆じて止まなかつた。此の言や平素事なき日に於ては兎に角、自國の兵士が白佛廣野に白骨を晒らし、國家の浮沈に關する歐洲戰の酣なる場合、自國の武器が敵國の獨逸に劣りたるを、表白したる其豪膽なる體度は、洋々大海の廣きに似て實に敬服すべきものである。

海相の自白なしとするも、實際に於て英國軍用飛行界も民間飛行業も亦遙に獨逸に劣り、世界航空界に對照する時は、遺憾ながら第四位に居ることは、恐らくは一般の定評を免れない。歐洲諸國が一朝にして國交敗れ砲火に訴ふるに當つては、優秀の武器として爭ふものは只航空機あるのみと確信し、幾多の人命を犧牲に供し、巨萬の費を水火に投ずるが如くに浪費して、一般協同之れが完成を期するの時に於て英國は如何、徒に傍觀の態度であつたのは、今更云ふの必要はない。實に五六年前の英國飛行界が寥々たるものであつた。此結果が即ち今回の大戰に臨み、優秀なる獨軍の飛行機に向つて、對等の行動をなす能はずして遂に海相をして此の言を敢てせしむるに至つたのである。

開戰以來既に一年有半の長きに渉つて、血河屍山の慘劇を演じ、且つ今回を以つて始て見る空中戰も、各處の天界に行はれて居る。然るに日々齎らす所の歐洲戰報の狀況を綜合して、何の航空機が、勇敢に又巧妙に行動するかと云ふに、遺憾ながら英軍附屬の飛行機にして遠く獨軍の天空を威嚇した者は未だ聞かないのである。只迅雷の如く天半に翱翔するのは獨佛に限り、流石は世界飛行界に於ける好敵手の立合にて天界の行動は如何にも目覺しきものである。

『二』

然るに英法相バルフオーア氏は、十七日の議會に於て英國飛行機の獨逸に比し劣り居ることに就き、如何なる事を表白して、國民に訴へたかと云ふに、曩に英國は航空省の一省を設置して、航空大臣を置き、陸海軍に屬する航空隊を統轄し、且つ一方に向つては、同業の發達を謀り、獨佛に讓らざる優力な飛行機を得んことの急なるを痛切に感じたが、其議は遂に實行するに至らずして止んだ。因つて議會に向つて堂々憚る所なく、英國飛行機は敵國の獨逸に劣りたりと、自白して人心を聳動したのである。曰く『我が英國飛行機は劣れり』と絶叫し、此の缺點を補はんには人力の有らん限を盡すべし、之に對して政府が國民の攻擊を被るは正に然るべきである。從來英國が獨逸のツエツペリン飛行船の建造を怠りたるは千歳の遺憾である。其理由は即ち飛行船其物を侵略的又は防禦的に使用するよりも、特に海上に於ける偵察用に供して最も有効である。現在獨軍の飛行船は海上に於て、多大なる便利を得て居るのである。故に獨軍飛行船の來襲に對する防禦は、陸海軍の協力に一任せねばならぬと血涙を流して、事實を赤裸々に述べ、自國天空武器の不完全を訴へた。國家多事の際英國民を震駭せしめたること甚しく、愛國の赤誠は舌端に迸り、國民をして奮起せしむる刺劇劑となつたのである。戰時一國の海相が、此の言をなすは、深くも軍事的飛行機の必要を感じたる所以にして自國の非を蔽はず、然も敵國の善を稱するは、明に大英國たるの襟度を發揮したるものと謂ふべきである。

『三』

英國航空界が、微々として獨佛に及はざる理由に付き、仔細に觀じ來れば、強大なる大艦隊は、世界の海上王と誇り舳艫相銜んで、海中に一大浮城を築いて居る。又地勢上四面環海の嶋國にして、北海は自ら強堅となり英海峽は歐大

陸に對し自ら防禦の塹壕となつて居るので、瓩空機何物ぞ能く北海の怒濤を越へて襲來するの威力あるべからずと、高を括て居たのが大英國の慧眼を以て如何にも迂濶にして將來を透視するの明を欠いたと云はねばならぬ。今日に至つて確に軍事上の失態と云はれても辯解の辭はあるまい。

元來英國は瓩空業に關せず、軍事的事業は、萬事遲れ勝にして之ひが趨勢如何を觀傍する一僻がある。一例を擧げて云へば、今より二十餘年前即ち西暦一千八百九十三年頃に於ける、英國の海軍は寥々たる狀態にして、船數に於て遙に佛國に數歩を讓つて居た。然かも佛國海軍が年々勢力を增殖し、優力なる大艦隊を編制するを傍觀したる英國々民は始めて長夜の夢から醒め、國防の危險を覺り、英海軍の一大擴張は遂に國論となつた、之れが爲に今日の如き卓絶無比の大海軍國を作り、世界の海軍を擧げて尙ほ及ばずと云ふ優勢を極むるに至つたのである。

又潛航艇の發達に於ても、佛國が先進國である。一度其効果を認めたる英國は、又急遽之れが製艦に着したが、現在では製艦の技術も又艇數に於ても、第一位を占むるに至つた。斯の如く初めは傍觀の位置に立ち、事實の善良と有効を容認するに至つては最後の優勝者となるのである。

瓩空機も戰爭に際して始めて、悔恨の言を吐露するに至つたが既に反省が遲かつたのである。西暦一千九百十二年今より僅か五年前の、英國飛行界は實に寂寞を極めたものであつた。對岸の佛國及び獨逸は、全國を擧げて熱中して居るのを見ても、平然として居た。之を以て推斷する時は當時未だ恐るべき天空の武器たることが、英國民の眼界に映じなかつたのであつたらうと推察出來る。

『四』

瓩空機の有効は、著しく軍事界に認められて以來、暫らく大勢傍觀の位置にあつた英國も、最早默過する時にあらず、俄然起つて飛行界の奮進に努めたのは歐洲大戰の勃發する前年一千九百十二年頃からであつた。陸軍瓩空費五百萬磅海軍に三百二十萬磅を支出することに決し、又一方民間に向つて軍用飛行機の懸賞奬勵を行つたのは、恰かも二十餘年前優力なる佛國海軍を見て、夢の醒めたと同一轍にして、躍起となり製造と研究に着手するに至つた。之れが即ち英國飛行界の第一階段である。同年二月獨逸よりパルセヴアール軟式飛行船十八號を購入して設計並に幾隻にても、建造し得る權利までも買收したのは、飽までも飛行船の完良を期して居たのである。自國に於てもガンマ幷にデルタ其他數種の海軍用飛行船を建造し、又巨萬の費を投じて海上用格納庫を設置したが結果に於ては、良好の成績を

擧げなかつた。此の當時英飛行家ヘーメル氏が、ドーヴアー、コロン間を四時間と五分で飛行したことがあるが、初期飛行界の英人の目には珍らしく、口を極めて大成功なりと稱賛の聲を放つたものである。斯る飛行は技術の發達した獨佛人に對しては何等の感も與へなかつた。

而して英國が、世の嘲笑を招いだことがある。即ち同十三年の三月內相マツケナ氏の時、空中瓩空法を設けた。其取締法は頗る長文であるが、概要は外國より飛行し來る外國の瓩空機にして、飛行禁制區域內に來る時は、發砲すると云ふ條項がある。此法文が世の嘲笑を招いだので、批難攻擊が甚しかつた。曰く『此の規定は友誼的の來訪者を驚かし、且つ飛行界の發達を阻止するものである』又『天空で飛行し居る飛行機に向つて地上より發砲するとも、何等の益なきものである。正に英國が飛行機に對する觀念の薄きこと並に飛行界の幼稚を自から告白するものなり』と一般の嘲笑を被つたのであつた。其法文中に示したる列國飛行威力の比較表に因つて見るも列國より幼稚と嘲笑されても止を得ない。當時英國の飛行界が、云ふに足らぬものであつたことは明かである。

	英國	獨逸	佛國	露國
飛行船	二	一三	一〇	六二
飛行機	三〇	二五〇	四〇〇	五〇

表に示した如く、獨佛露に比し、非常な懸隔があつた。殊に獨佛二國は、堅牢にして優勢な飛行機を世界飛行界に紹介し、模範となつて居るも、英國飛行機として知られ居るものは尠ない。これ發達の程度が遲れて居る結果である。

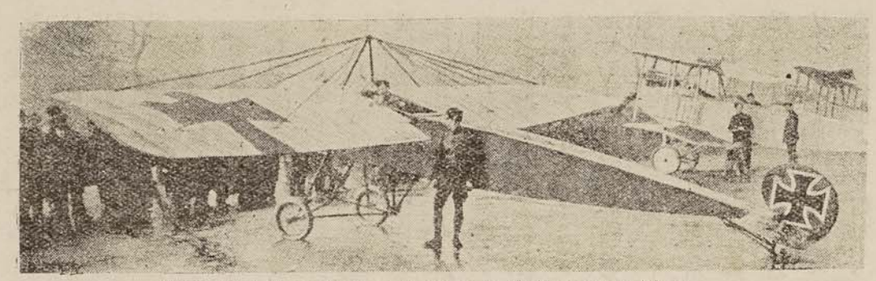
『五』

海相の演說中に、獨逸飛行船を建造するを怠つたのは遺憾なりと云つて居る。然る時は飛行船の戰時有効なりと云ふことを證明したものである。又歐洲戰報に就て見るも、飛行機の攻擊力に比し、獨軍のツエツペリン飛行船が與ふる所の攻擊威力の、比較的大なることを唱へて居る。然かも北海を渡つて英京に襲擊を行ふこと再三に及び、物質上幷に志氣の沮喪に及ぼす影響は豫想以外にして、又船首を轉じて巴里の市街を威嚇し、兩都の市民に恐怖の念を惹起させたのは爭はれぬ事實である。然るに英佛聯合軍の飛行機にして、一度び伯林の天空を掠め、一彈を試みたことがある乎否や、開戰既に一年有半に亘る戰鬪に其快報に接したることがないではないか。郊外に最も接近した機影を顯はしたことさへもないのである。尤も獨軍は白佛國境に、飛行船の根據を移し、距離に於て、英京と巴里を襲擊するに地の利を得て居ると云ふ者あれど、距離の遠近を問はず攻擊威力と長時間の瓩空力を有し居ることは明である。

飛行船の有効無能に就ては、歐米飛行界の問題であつた。佛國の如きは時勢遲れのものにして、文明的戰爭の武器でない所謂無用の長物なりと排斥し、殊に飛行船無能論者は曰く、飛行船一隻の建造費は、能く數十臺の飛行機を製作し得る。寧ろ一隻の飛行船を有するよりも、數十臺の輕快なる飛行機を有するこそ、戰時に於て有益なりと云ふのである。英國も飛行船無能論者として、飛行船の建造と研究を廢止するに至つた。而して獨逸がツエツペリン飛行船に熱中するを見て、其愚を笑つて居たのである。飛行船無能の先鋒たる佛國は、一頭地を拔き、一千九百十二年から、機上に機關銃を備へ付け、又は爆彈投下の試驗を行ひ、軍事上必要の武器と確信して居つた。當時我が陸軍より、軍事視察に特派したる者は、其發達に驚いたとのことであるが、其當時の英國如何と顧るに、前表に示した如く、初歩の時代であつた、漸く有効なるを覺つた翌年は大戰の突發を見るに至り、遂に英國をして飛行界に奮進するの歳月を與へなかつたので、堂々機音を連ねて雲務を捲き、伯林の天空に戰時の花を飾ることの出來ないのは千歳の遺恨であらう。

今に至て英國が、飛行船有効論に逆轉するも、一般飛行界が翕然として應ずるや否は、戰後の調査に依つて解決する問題であるが、時代遲れなりと嘲罵されたツエツペリン式が跳梁跋扈歐洲戰場に特色を發揮し、横暴を極むる人もなげなる行動は、從來の無能論者をして啞然たらしめて居る。

獨逸の開戰當時に於ける、ツエツペリン式は左まで有力なるものにあらず、瓦斯容積一萬二千立方米突に、五百四十馬力の發動機を有し攻擊力の恐るべきものとは思はれなかつた。然るに獨逸は初戰の實驗に於て、天空の戰鬪爐を期し攻擊力の大なるは、飛行船に由つて有効なりと確信し戰時中四萬立方米突にして一時間の瓩空速力六十哩餘四十時間の繼續瓩空に堪ゆる、尨大無比なるものを建造し、獨逸が理想とする、天空攻防の弩汲型ツ式を實現し、威力を擅にして、英京を襲ひ巴里を威赫し、然も北海の波上に遊戈して、英艦隊の封鎖行動を偵察し、英海峽の制海權を三千米突の高空より、殆んど占有して居る。獨潛航艇が英艦の監視區域を脱出し、横暴を極むるも此の結果である。又英京襲擊後に於ける、夜間の市中は燈火を消し、荒凉寂寞たる古城を過ぐるの感に堪へざるものがある。物貿上の損害なしと雖ども、士氣に關する影響は大なるものであらう。英國をして此に至らしめたるは、獨逸をして遂に飛行船主義の名をなさしめたものと云はねばならぬ。其獨軍の奏効と、英國の恐怖とが立證して以て、戰後飛行界の革命と共に、兩者並用論が遂に勢力を得るに至らんかと察するのである。



英國の手に捕獲されたるフオツケルル式飛行機

獨逸研究資料

輕快な飛行機と大飛行機の建造

前書

輕快なフオツケル式飛行機は、今や聯合軍側の飛行家からは、天魔の如く恐れられてゐる。其の構造は方今世界一に進んでゐると云ふ事が出來やう。又長さ百三十三呎、重量六噸に餘る大戰鬪機も獨逸は目下製作中である。

聯合軍側の飛行家をして天魔の如く恐れしめ、英國の飛行機が月十六臺宛も墜落せしめられるのは、獨逸最近の戰線にその姿を現はし出したフオツケル式單葉である。然も此れに乘つてるインメルマン及びプロツケの二飛行家は頗る巧みに機體を操つて猛烈な射擊をするので、この二飛行家に空中で廻り會つたら、到底無事には逃れられないと聯合軍側の飛行家をして觀念せしむる程である。

抑もこのフオツケル式飛行機が如何にして今日の如き威力を得たかと云ふに、此は例の獨逸一流の熱心な研究と努力とに依つて、遂にこの如き優秀な物を作り上たのである。然も模倣に巧な獨逸人は、佛國の飛行機中最も輕快で攻擊力の強いモラン・ソルニエーの特長を遺憾なく應用し、又取扱ひに簡便なグノーム式廻轉發動機をも模倣製出して此に取附た等は彼等の智力の中々優てゐる事を示す物である。

先づこの飛行機は如何にして獨逸に生れたかと云ふに、今を去る數年前即ち千九百十一年から十二年に掛て、獨逸に住んでゐた一人の若い和蘭人があつた。此の者の名はミヨヘール・フオツケルと云つて、年は二十三四であつたそして彼は一臺の頗外見の奇異な單葉飛行機（前號寫眞圖參照）

を製作して、これを多數の科學者の面前で試驗したが、安定が極て良好で、飛ぶ事も亦能く飛んだ。當時飛行機の安定問題では諸國の學者が頭を惱してゐたのであるから、此の怪異なる飛行機の自働安定に對して大に稱賛の聲を與へた。

この飛行機を目擊した一英國飛行隊の士官は、早速その一臺を購入して、英國に持ち歸つたが、その構造が頗る粗野であつたので、英國の試驗官等は餘り悅ばず、敢てこれを飛ばして見やうとはしなかつた。恐くその儘打ちやり放しにして了つたのだらう。其等の試驗官等が今日英國の多數の飛行機がこの粗野に見えた飛行機の爲に多數打落されてゐると云ふ事を知たなら、何んな顏をしてゐる事かと可笑しく思れるのである。然しこの飛行機は千九百十四年にヘンドン・マンチエースター間往復飛行競技會が催された時には、彼のブルツク氏に依つて操縱された。又グスタブ・ハメルもこの飛行機で英國中を飛行した事があつた。然し一般英國人はこの飛行機に對して大なる注意を拂はなかつた。

而してこの飛行機がその後如何樣に改良されたかと云ふに、昔時の方形型の主翼が稍兩（ドラルアングル）翼角を爲して主體と引離して取附けてあつたのが全然改められて、一見モラン・ソルニエーと何等の差異ない物と改められた。即ち主翼の前緣は後緣よりも稍短く、全長二十四呎六吋、全幅三十九呎九吋、主翼面積二百七十七平方呎、昇降舵の面積二十九平方呎、方向舵は七平方呎、主體舵翼亦モランと同樣の形をしてゐるが、仔細に點檢すると、大にその構造を異にするのである。即ち座席は椅子と共に自由に轉換し、操縱機は撓翼と昇降作用とは一本の垂直杆で行はれ、方向は脚杆で行はれ、脚機は頗る巧妙な緩衝裝置に依つて、地上との激衝をさけるやうに出來てゐる。又主要骨格は全部鋼鐵管からなつてゐて、主翼の緊張支持法は頗る簡便堅牢で取外しが自由に迅速に行はれる。從つて、主翼を疊んで主體の兩側に結び附けて運搬するのに頗る便利である。

之に取附ける發動機はグノーム型八十馬力、百十馬力百二十馬力と種々あるが、インメルマン、プロツケ等の使用するものは、百五十馬力乃至百六十馬力の固定式發動機の物であつて、速力は百哩以上に及ぶと云ふ。その結果は、從來この飛行機の特長とされてゐた自働安定と云ふ物が全然不用に歸して、安定は撓翼法に依つて、操縱者が自由に行ふやうになつた。彼のルンプラー式も速力の增大と共にその自働安定の特長は徹廢されるに至つたが、これは佛國式飛行機に屈服した物と云ふ事が出來る。

この飛行機が如何にして敵機を攻擊するかと云ふに、敵機を發見するや、その强大な昇騰力に任して、非常な高

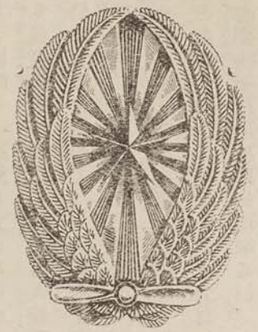
空にドシ〳〵昇騰して、敵機を俯瞰する位置となり、直ちに頭部を下にして、一直線に敵機の上に殺到して、牽進機の上から機關砲を亂打して敵を打つ。若しも斯の方法で敵を打ち逃すや、直ちに舵を轉じて敵機の後方に出で、尾部の方から一直線に打つ。然うすると、後方から搭乘者、油槽、發動機と皆一列になるので、彈丸は此の三者を縱貫する事になる。操縱者、射手の技術にも依る事であるが、飛行機其の物の優秀と云ふ事が敵機を打ち落す上に大效があるのである。獨逸は從來重くて速度の鈍い飛行機のみを使用してゐたが、佛國の輕快な飛行機によく打落されるのに鑑みて遂にこの飛行機を多數に製作して戰場に派出するやうに至つたのであらう。

六噸の大飛行機

獨逸はフオツケルの如き輕快敏速な單葉飛行機を多數に作ると同時に、又頗る大きな重い飛行機をも製作してゐる即ち最近獨逸が製作してゐる大飛行機は、從來の物の將に六倍の大さを持つて、一時間七十五哩の平均速度で、六百哩の飛行に堪え得られ。發動機は百馬力の物六臺と四十馬力の物一臺と都合七臺を取附けると云ふ。これに八名の乘員と七百ガロンの燃油と六十ガロンの滑油と他に三千封度の必要物を積込む事が出來るが、この三千封度の重量を廢すれば人員を三十名迄增加する事が出來る。

この飛行機は三葉式であつて、翼の全長百三十三呎、機體の全長は六十八呎、方面舵翼の面積五十四平方呎、固定尾翼並びに水平舵翼の面積百二十六平方呎、機體の重量は八千封度、發動機の重量四千封度、八名の人員の重量が千二百封度で、此れに燃油二千五百封度、武器彈藥等が三千封度であるとすると、その全重量は二萬一千封度で將に十噸を越す事となる。

而してこの飛行機は、全然攻擊用に供さる可き物で、出來上り次第、獨逸の主なる港灣に備へ附けて、英國其他に向つて、襲擊するのであると云ふ。又この怪物の如き大飛行機には、極く新式の砲が据附けられる筈であるが、その砲には反動と云ふ物が全然無い。即その砲の砲身には前後に彈丸をつめる仕掛となつてゐて、前方には眞の彈丸を詰め、後方には砂の彈丸を詰めて、前方の彈丸を發射すると同時に、後方に詰めた砂の彈が後方に飛んで行くから、砲其物には何等の反動と云ふ物が起らない。而して此の彈丸の直徑は實に九センチメートルの大さを有すると云ふ事である。フオツケル式飛行機で散々荒された聯合軍側は、更にこの怪物の如き大飛行機に依つて如何に蹂躙されるか、實に寒心の至りに堪えない次第である。（N生）



耐寒飛行

城東　渡部一英

▲吾人は耐寒飛行の目的を凡そ下の如くに解釋する——(一)寒氣と發動機との關係——(二)機體構造奈何——(三)搭乘者の防寒用意——(四)滿州に於ける氣流及び氣温の情態——以上▲始終殆んど無故障なるを得た所から世間からはスラスラと大成功を收め得たものと思はれて居るが當事者は何うして一通りの苦勞で濟んだのではなかつた▲兎に角其の結果將來は如何なる酷寒地に於ても飛行し得ると云ふ信念を與へられたと謂ふべしである

書

滿洲に於ける我陸軍航空隊の耐寒飛行は、何しろ我陸軍の試驗といふ許りでなく、世界列强の飛行界としても、未だ之れほど大仕掛に耐寒の目的を以て試驗した事がないので、飛行界にとつては、甚だ貴重な問題である。吾々は今强いて陸軍航空隊の遠征行の眞意が、何處にあるかといふ事を知らんとはしない。それは國民として大に憤まなければならぬ事があると信ずるから……唯だ吾人は表面に表はれた飛行機其物の性能、酷寒地に於ける操縱者の注意すべき事のみを茲に摘記すれば足ると思ふ。

抑も此の耐寒飛行が、二月十三日から同二十六日までに至る約十日ばかりの試驗に於て、始終殆んど無事なるを得た事は、世間の人の眼から見れば著しい成功であるが、實は此試驗の當事者の身になつて見ると隨分數へきれぬ程多くの故障が頻發して隨分と苦心をさせられたのである。乃ち此試驗に依つて始めて經驗した事柄は非常に多かつたといふ事である。

緒言

耐寒飛行といふ其純なる言葉の意味からして、陸軍といふ意味を全然排除して考へたならば其目的は凡そ下の四つ位の事項に屬するであらう。第一が寒氣と發動機、第二が機體構造、第三が搭乘者の防寒設備、第四が試驗地に於ける氣流及び氣温、其中尤も目的の主たるものは、言ふまでもなく發動機である。

發動機

發動機と一口に言つても、茲では勿論燃料も其中に數へて居るのであつて、寒地に於ける燃料に就ては、未だ十分な研究が世界飛行界にも與へられて居らぬ。今次の歐洲大戰地に於ては、言ふ迄もなく此種の研究も日々に繰り返されて居るには相違ないが、それ等は倒底今日吾々の窺ひ知る事を許さぬ。

今回我が陸軍が滿洲に送つた飛行機は、其機數四個即ちニューポール單葉一機、モ式復葉三機であるが、此れに据附けた發動機の性質から言ふと、之れを二種に別けて固定式と廻轉式とする事も出來るし、又之れを水冷却式一基、空氣冷却式三基。空氣冷却式を二つに別けてV字型と星型とに區別する事も出來る。其中何れが尤も今回の試驗に於て好成績であつたかといふ事は、今茲に斷定は出來ぬが、何れも一長一短はある。

試驗の結果は矢張り、機械油が一番永り易いのと、冷却裝裝に使用する水の取扱が最も困難であつた。機械油は之れを倒底其儘で使用する事は出來ぬ。即ち地上温度零點下五度以下ならば、其の寒氣の温度如何によつてアルコール、石油等を好い鹽梅に混合し、其氷結を防ぐことであるが、概して曲桿筐の中に貯へて置く裝置が尤も可し。之れは發動機の廻轉と同時に、次第に温度を油に與へるからであることは言ふまでもない。ノーム式發動機のやうに凡て送油管によるものは、其管の油から先きに氷るので、尤も取扱ひに不便である。揮發油は寒氣が强い程度の高いものを使用しなければならぬ。水冷却式發動機の冷却器は、始めから非常に其取扱ひを注意した結果、何等の故障も發生しなかつた。試驗を終了すれば直ちに之れにアルコールを通じて、聊かも此れに水分を殘さぬやうにし、試驗開始の際には殆んど熱湯を之れに注入し置く事等位のもので、何れも大した新發見では無かつた。

瀉化裝置に於ては、熱空氣を最初に送る事が、必ず必要かと思はれて居たが、之れは決して其れ程の必要を感じない、揮發油の度の高いものを注意し、ノツズルから噴出する油と、空氣の分量さへ適當であれば、必ず瀉化作用は十分に行はれるといふ事である。

唯だ飛行を開始するに先つて、必ず行はなければならぬ事が一つある。それは屹度發火器を拔いて、瀉筩中に少量の揮發油を注入してやる事だ。さうしないと、寒氣の爲めに瀉筩とピストンが毎も氷り附いて居る。要するに油や水

の氷結から來る故障が多いので、現在の裝置では、安心して長時間の飛行が不可能であるといふ事になつて居る。

■機體構造

機體構造上に於ても、幾多の注意すべき事項があるが、其中尤も心得べきは、金具、塗料及び車輪である。內地の寒さに感じない金具も零點下二十度以上の寒氣に遭遇しては、往々にしてそれが伸縮する。眞鍮と鐵とを以て作つたターンバツクルなどは、滿洲に於ては殆んど要をなさぬと言つて可い。緊張線でも、ピヤノ線が普通飛行機に適當したものとして考へられて居たが、之れも精製したワイヤーロープに劣ること數等である。

塗料としては、茲には主として翼に使用するものを指すのであるが、其れに含有する護謨の質を餘程よく精選しなければならぬ。酷い寒氣に逢へば、屹度翼面に龜裂を生じて、思はぬ災禍を生ずる事になる。現在內地に於て使用する塗料では、零點下二十度以上の寒氣には耐へられぬといふのが定論である。

車輪即ち廣義に於ける着陸裝置は、積雪地に於ては、餘程興味ある問題であつて、通常の護謨タイヤの車輪は、殆くど廻轉することなしに雪の上を滑走する。爲めに狹小なる地面には着陸が非常に困難である。今回の滿洲飛行に於ても、特に强大速力のニユーポール單葉などは、此意味からして非常に操縱の困難を感じた。結局タイヤに繩を卷いて遣つたのが案外好結果を見ることが出來た。

然し乍ら此れを本來から言へば、積雪地の着陸裝置は、護謨タイヤを使用するよりは、寧ろ鋼鐵製の廻轉不活潑のものを使用する方が遙かに勝つて居る。

■防寒設備

搭乘者の體を保護する爲めに、操縱席に暖房裝置を施す必要があらうと思はれたが、之れも實際長時間の飛行を敢行する際には、是非とも必要であると言ひたい。普通飛行に於て最も困難するのは、眼鏡と手足とである。

當初我が飛行隊が滿洲の地を踏んだ際に、街上を行く車夫が、車の轅に手袋やうの暖房裝置をして居つたのに氣が附いて、飛行機にも之れを使用し、操縱桿と兩脚部に懷爐を使用した。之れは屈竟の思ひつきであつたといふ。が然し之れ等は決して完全なる方法とは言はれない。必ずや將來は、操縱席には別に天蓋を作つて直接風に當らぬように裝置することが必要になることは言ふ迄もない。

眼鏡も普通の飛行機用のものは、降雪地にあつては不完全なる許りでなく、之れも防寒的設備を具へなければならぬ。陸軍では之れが爲めに、特に鐵葉板を用ひ、又特に前額部を十分に掩ふて空氣の直接あたることを避けたのであるが、前額部を餘り冷して激烈な頭痛を感じたりする事は內地では味えぬ事であらう。之れも要するに防寒設備の本來の性質から言つて、直接風に當らぬ事にするのが當然で內地でも同樣風力一米突を加ふる毎に、溫度は一度宛下るといふのが、一般の定論になつて居る。今回の飛行試驗に於ては、未だ之等を十分に經驗する程の長時間飛行を行ふ事が出來なかつた。最長二時間で、全試驗に百罐の油を消費したから、それから割出して約五十時間の飛行を行つたことになつて居るが、耐寒飛行の性質から言へば、更らに長時間の飛行をも加へて見たいと思はれる。

■氣溫及氣流

最後に氣溫及び氣流であるが、滿洲に於ける氣流は、豫想通り內地に比して數等よく、滯滿中甚だしき惡氣流に逢遇した事は、殆んどないと言つて可い。之れは時々のスコールでもあることを除いたならば、本土の如き島國に比して、大陸の飛行に適當する事は贅言を要しない。

氣溫も今年は、例年に比して非常に暖かつたといふが、それにしても地上溫度夜間は通常零點下二十七度に及んで居る。內地では想豫もつかぬ寒地であるが、日中高空の飛行に於て、漸く零點下十四、五位に止まつたといふ事は寧ろ奇蹟である。それ位の溫度は內地に於ける飛行でも屢々味つて居る經驗である。又特に茲に注意すべき事は、地上より高空が暖かいと言ふ事である。耐寒飛行五日目の如きも、地上は零點下九度、六百米突の高空に於て、零點下六度を示して居るといふのは、眞の其一例に過ぎないが、概して滿洲に於ける氣溫には、此種の傾向が多かつた。蓋し海水に於ても、水面溫度よりも、水深を高めるに從つて溫度を高める事は、潮流の具合で屢々見受ける所であると同樣、滿洲に於ても高空の風位が、多く南西であつたに比して地上は北であつたといふ。地上と高空と風位の違ふといふ事が、軈て斯う云ふ豫想外の結果を見るに到つたものであると信じられる。

■結論

想ふに滿洲に於ける此種の耐寒飛行に於て得たる經驗として、最も吾人の飛行界にある人々を喜ばせた事實は、今日の飛行機が、先づ如何なる酷寒地に於ても、必ず飛行し得らるゝ、要は唯だ操縱者の防寒設備を完全ならしむれば足るといふ事である。

（國民飛行）

英國議會に於ける

倫敦市の防空問答

一記者

前書

頻々としてツエペリンの襲撃を被る英國民は、今や狂氣の如くなつて、其の防禦を嚴重にせよと當局に迫つた。然し平時飛行機、飛行船を冷視して、空中勢力を發達させようと企圖しなかつた當局は、到底至急に空中大艦隊を組織する事は出來ないと、明に自白してゐる。其他凡ての軍備に於いて、英國如何に不注意であつたかは、バルフオア海相と一議員との問答で明瞭である。吁！　倫敦は遂にツエペリンの蹂躪に任すより他はないのである。

去年十一月十一日、英國議會に於ける信任投票の討議に際してジヨインソン・ヒツクス氏は英國飛行隊に關して多大の注意を發した。即ち冬期中に大發動機を取附けた大飛行機を多數に製作して敵に對する用意をしろ、前年の冬期中に獨軍は多數新型のアルバトロス式飛行機に裝甲を施し百五十乃至百六十馬力のメルセデス發動機を取附けた故智にならへと叫んで、英國の巧妙な飛行家等は獨軍の飛行家を多數殪したのは皆小型の小發動機を附けた飛行機に依つてゃあるが、今冬期中に多數飛行家を養成すると同時に、長距離飛行に堪え得られる大飛行機を多數に建造したならば敵機を殪す事更に多からうと力說した。更に話頭を轉じてのツエペリンの襲來に對する海軍飛行隊の倫敦防禦の組織に就いては甚だ不滿足な點がある。その一例としては陸軍飛行隊中錚々たる一委員が、倫敦防禦隊から追はれて、代りに海軍飛行隊員をその後に入れ、先きの名飛行家をダルダネルス海峽に派遣して、其所にゐる二名の有名な飛行

（英國議會に於ける倫敦市の防空問答）

家の上に座らした。これは折角海軍飛行隊の爲めに盡さうとした者を罷免したかの感を與へる。尙最初の海軍卿が海軍飛行隊長に對して採つた態度には尠なからず遺憾な點が認められる。即ち英國海軍の飛行隊を完全な物たらしめたのは、彼のスエター隊長であつたが、海軍卿は此の者の職を奪つて、代りに飛行機に關しては何等の智識も持つてゐない一海軍將官と隊長に任命した。此將軍が初めて飛行隊に來た時、飛行機の何物であるかを少しも知らない爲に、隨分滑稽な事を幾多演出したのが有名となつた。海軍卿は戰時中飛行隊の組織を變更する事は頗る困難であると嘗て述べたが、此如き何等飛行智識のない者を飛行隊長に据ゑて、其れに新たに種々の事を覺させると云ふ事は、可なり大きな組織變更ではないか？　又凡ての事が何故海軍卿の手元から發せられるのか？　此れが爲にいざと云ふ時非常な遲延が生ずるではないか？　飛行隊長其者が直接指揮を執たら、事が敏速に運ぶではないか？　それとも又海軍卿自身が飛行隊長となつたなら、一番好都合なのではないか？

二月以前に大飛行機建造の命が發しられたと云ふ事であるが、此所に來場してゐる議員達からも、既に數ヶ月前にその事を要求しておいたのであるが、漸く先週になつてその命令が發しられたと云ふ事である。飛行機の建造は是非冬期に限る。そして春期に至つて、獨逸が新ツエツペリンと新飛行機とで來襲して來るのに備なければならない。何故第一我々は今日ツエツペリンを所有してゐないのであらうか？　何故大型飛行船を建造しなかつたのであらうか？　何故英國式ツエペリンの建造を昨年一月に止めたのであらうか？　右飛行船の建造は依然經續されてゐる者と信じても、何故その後の八ヶ月と云ふ物は無駄に空費されたのであらうか？　我々はツエペリンの襲擊が如何なる慘害を及ぼしたかを能く知つてゐる。遂に政府も東海岸を防禦する爲めに、一大飛行船を用意しなければならん。それにはツエペリンの一艘を捕獲しなければならんと考へ附いたらしい。英國海岸の各所にある飛行場には、第一級の飛行機を多數に用意してツエツペリンが襲擊して來た時には、此れを攻擊しなければならん。又陸軍と海軍との間には、何等の聯絡がないと云ふではないか？　痛烈に一々の理由を擧て、ジヨインソン氏が當局を攻擊したが、此れに對してバルフオア海軍卿は陸海軍間の意思疎隔と云ふ事はない。飛行隊の組織も充分能く整てゐる、又何も熱心に仕事に從事してゐると云つた後に、サー・パーシー・スコツトの新しい意見も充分に聽收して、今や倫敦の防備は全部彼に一任して、命令は速刻彼の手で行はれるやうに成つてゐると辨明した。

ジヨインソン氏は尙此れに對して、倫敦市防禦の責任が數人の人に依つて所有されるやうな事なく、只一個の人が

所有してゐて、ツエペリンが倫敦市上に現はれてから、飛行機の飛揚を命令するやうな事なく、北海の上に見え出した時にその人から出發の命令が出でん事を眞に望んでゐるのである。と先づ前提して、倫敦市防禦の大砲は、長い間世人を欺いてゐたが、實際その大砲が如何なる種類の物であるかを知つてゐる者は、最近に襲來したツエペリンが一萬五千呎の高所にゐるのを射擊する事が出來なかつたのを寧ろ當然と思つてゐる。彼の巴里市の周圍數個所には、三百碼おきに七十五耗砲が備へ附けてあつて、その着彈距離は一萬九千呎、而してその場所には强力な探照燈が置いてあると云はれる。即ちツエツペリンが巴里を襲擊しないのは、一に此等防禦が完全に行はれてゐるからである。ツエペリンが若しもこの探照燈の射距離内に入るならば目を眩惑させられて、直ちに砲擊の的となる事を敵はよく知つてゐる。大英國の主都を何故巴里と同樣の保護に置く事が出來ないのであらうか？

更に氏は論點を轉じて、倫敦の防禦はこれを東海岸から始めなければならない。有力なる大砲を自働車の上に載せて、東海岸の各所に据へて、上手な砲手に取扱はしたなら未だ日沒前にツエペリンに對して挑戰する事出來、此れを苦もなく擊ち落す事が出來る筈だ。僅か二三十呎の大さしか持つてゐない獨逸の飛行機すら、戰線に於ては、此れを絶へず擊ち落してゐる。ツエペリンは此に比較して、頗る尨大な形體を具へて居るから、容易に射擊の目標となる筈だ。又射手は佛國から雇つて連れて來ても可い。

又倫敦を完全に防禦する爲めには、ツエペリンに對して積極的に攻擊を開始することにあるのだ。即ちツエペリンの格納庫を皆爆破して了へば可い。飛行機二千臺の價は僅か戰艦一艘半の價にしか當らない。此等が大に爆彈を投下したなら、戰局を直ちに片附けて了ふ事が出來ると思ふ。此等の飛行機は先づライン河を横斷して行つて、豫て海軍當局に解つてゐる筈のツエツペリン格納庫の有りと有ゆる所に驀進して行つて、爆彈を投下したなら、飛行船の全部は忽ち消滅して了ふだらう。

此れに對してバルフオア卿は答へて云ふのに、それは何れも正當な御考へであるが、戰爭の進展と同時に、各國の武器は夫々進歩を示し、優勢な者が他方を制してゐると云ふ有樣で、今眞に獨逸を打敗かすと云ふ事は一寸難しからうと云つた。

ジヨインソンは此に對して、吾々は決して不可能とは思はない。我々は最後に勝つ事を希望してゐるのであると叫んだ。

バルフオア卿は更に、諸君は英國の工業界なり發明界なりが、昔日の如く再び世界を支配するやうになる事を望ん

で居られるやうだが、今日では最早その望みは無つた。今日海軍省としての意見は、水上飛行機の有ゆる部分が最つと改良されん事を切實に望んでゐるのである。今日の水上飛行機は長さ、速力、發働機の馬力が漸時擴大されつゝあるが、此れに依つて眞に空中を完全に防禦し得られる日の來るのを期待してゐるのである。陸軍側に於ても、確に此れと同意見で、良飛行機の一日も早く出現せん事を冀望してゐる事と思はれる。此の兩省は絶へず意見を交換して、便宜を計つてゐるが、戰爭の終局を告げる迄には、必と敵國に優る物を作り出すに至る事を信じてゐる。

然しながら、その武器が何時になつたら、使用する事が出來るとは豫言出來ない。即ちその間に獨逸では吾々の少しも知らない或武器を製作して、思ひも掛けない結果を收めるかも知れない。此れと反對に我國に於て、獨逸の少しも知らない武器を使ふ事になるかも知れない。凡て此等の事は、今の所臆測として殘しておくより外はない。

次いで倫敦防空隊からガリポリに追はれた者に就いて辨明して曰く、彼の人物はガリポリにある有名な飛行家達の上に立つて、完全な隊形を組織する爲めに派遣されたのであつて、他の飛行家と共に空中に飛行する任務を帶びては居ない。而もその結果は非常に良好で、名飛行家等は此れが爲に益々その技倆を發揮させる事が出來るやうになつた。

此れは決して當局の失當な所置では無つたと思つてゐる。

又國内飛行隊に對する攻擊は正に當然な事であると思ふが、然し今日ではその組織は全然代つて、今では海軍一手で倫敦防備の任を行ひ、海軍大臣の直屬となつてゐる。開戰當時の飛行隊は全く幼兒の如き物であつたが、戰爭の發展と同時に飛行隊も急激に發展を來した。其れと同時に、その任務は有ゆる方面に益々擴長して、飛行船に加ふるに飛行機を以てするやうになつた。又瓩空機の設計はこれを設計家、飛行家、機械學者等に謀つて作らせるやうにした。此れ等を指揮して尋常人の到底及ばぬ努力を示した人は、實に飛行船に關して深き造詣を有してゐる人であつた。斯くして漸く發達した物を今日では海軍當局者の手に引受けて、實際にやつて行けるやうになつたのである。

最初飛行隊に對して最も盡力してくれた人は、彼のチヤーチル氏であつた。彼に對しては國民は深く謝せなければならんと思ふ。飛行隊が最初から海軍大臣直屬の物で無ればならなかつたと云ふ説には大に反對しなければならん。若しも最初から、然うであつたなら決して今日の如き發達は遂げられなかつた物と思ふ。今日の如く隊形を整へて初めて潛航艇、驅逐艇等と同等に海軍省直屬の物となる事が出來、又その働きを能く現はす事が出來るやうになつたのだ。先づ最初には飛行家の養成に力を注がなければなら

なかつた。即ち軍の指揮官なり、高官連は飛行家を養成すると云ふ事に到底出來なかつた。矢張り一の組織隊に於て此れを養成し輩出せしめなければならなかつたのだ。その結果は遂に完全なる大組織を形成するに至つた。

倫敦の防備に就いては、陸軍省の責任の部分を除いて云ふならば、海軍當局としては、出來るだけ飛行家の數を增して事に當つたのである。然し更に最つと多數の飛行機と飛行家とが有つたならば、更により多く活働が出來た事は言をまたない。故に今日では出來るだけ多數の者を養成する事に盡力してある。

又ツエペリンを何故我國で作らなかつたか？　その製作を何故中止したか？　と云ふ質問に對しては、政略的の論議をすることは好まないが、實際目今は無用な程多數には製作してゐない。今製作しつゝある物は何れも偵察用の物である。而して此等飛行船を何故最つと以前に作らなかつたかと云ふ質問に對しては、ツエペリンと飛行機との優劣が未だ決定されてゐない今日であるからと御答へしなければならん。國々に依つて、その所信は違つてゐる。獨逸がツエペリンに重さを置いたのは過まりであると云ふ人すらあるではないか？　それであるから此れを以て一がいに當局を責めるのは酷である。又倫敦或は其他の部分を防禦するのは、沿岸を防備するに如くはないと云ふ論には贊成する。然しながら全海岸を防禦すると云ふことは到底出來ない。吾々は出來るだけ防備區域を擴長して、ツエペリンを撃ち落したいと思つてゐる。然し又ツエペリンに對する防禦を海岸だけに限ると云ふことは又不可である。更に海上に迄防備の手を延ばさなければならない。即ち多數の巡洋艦を海上に放つてその襲來を防がせなければならない。然しながら、此等防備上に於て、飛行機の能力が限られてゐる如くに、大砲の能力も亦制限されてゐるのである。その制限と云ふのは、數に於てゝある。飛行機は出來るだけの力を以て製作に從事してゐる。又飛行家の養成、大砲の製作等には全力を盡してゐるが、然し殘念な事には、此等は皆手後れとなつて了つた。今回の戰爭に於ては、有ゆる點に於て、我國は手後れとなつたのである。然し此れは私の責任ではない。凡ての一般的狀況が然らしめたのである。例へば我々の必要缺く可からざる軍器製造所でも、此れを缺いてゐるものがある。故に我々の必要な武器を充分な分量にまで滿すと云ふ事が何うしても出來ない。然し此は漸く改良されつゝあるが、とに角大砲の供給が不足であると云ふ事は否まれない事實である。我々は餘り必要でない土地にある大砲を、必要の土地に移動しつゝあるが、未だ〳〵充分には行渡つてゐない。故に倫敦及び倫敦附近にも大砲の數が缺乏してゐる事は認容して貰はなければならない。

又ツエペリン防禦の飛行隊の組織が完全に行つてゐないと云ふが、そんなことは全然ない。陸海軍互に提携して、倫敦附近の飛行隊は陸軍に屬する物と、海軍に屬する物と一手に分れて、互に電話に依つて、密接に連絡が保たれて居る。故に兩者のしてゐる事は互に能く解つてゐるのであつて、兩者間に主義方針の差異、權利の差等と云ふ者はない。故に今此等の組織を變更するの必要を認めない。又此等飛行隊のある所では、旺に練習を行つてゐる。然し私は此の如く我が海軍の飛行隊が分れて設置されてある事には多少不安を感じてゐるので、一大練習場を作つて、其所で一樣に練習を行つた方が得策であり、又經費も節し得られると思つてゐるのであるが、今日の狀態では此を一個所に纏めると云ふ事は出來ない。陸軍に賴らない時には、練習を行ふ事が出來ないやうな有樣になつてゐるから、其内組織を改良した上で、何とかしたいとは思つてゐる。然し陸海軍間の親密な關係は然うなつても依然變りない事と思つてゐる。

ツエペリンに對して飛行機と砲火と何れが防禦に有効であるかと云ふことは一寸斷定出來ない。高級首腦部でも二説に分れてゐる有樣であるが、私は兩者を完全に使用したいと思つてゐる。然し完全な此等の兵器を、熟練な人間を多數に一時に得る事は到底出來ないので、軍需局と相俟つて追々此れを充實させる事に努めたいと思ふ。

又飛行隊を以て獨逸國内に進擊すると云ふ意見は、大に贊同する所であるが、然し此れは今日の狀態では到底不可能であると云はなければならない。何となれば、今日の飛行機は、未だそれだけの活動能力を持つてゐない事を遺憾とする。然し近い未來に、飛行力が增大され、積載量が增されて、攻擊力が增加されたならば、ノーフオルクの海岸から、ライン河畔に迄進擊して行く事が出來るやうになるであらう。又英國を襲擊したツエペリンの根據が白耳義にあると思ふのは、大なる誤りであつて、彼等は何れも北獨逸から襲來した物であつた。而して其所には到底我が飛行機では攻め入る事が出來ないのである。然し飛行機を持つて敵を攻擊する事は、我々の絕へず希望してゐる所であるが、此事たるや頗る困難且つ危險な事なのである。

とに角百十八平方哩を有する倫敦市を完全に防備するには、多數の飛行機の外に、多數の大砲を市外、海岸、海上に設備しなければならんのであるが、これは追々海軍省の手で、完全に取行つて、國民一統に安神を與へるやうにしようと思ふ云々と。

海相の言明した如く英國が有ゆる武器の用意に於て甚だ手後れであつた事を、同盟國として吾々も甚だ遺憾に思ふ所なのである。

佛國軍用飛行機ヴオアンザン式の變遷

（承前、完）

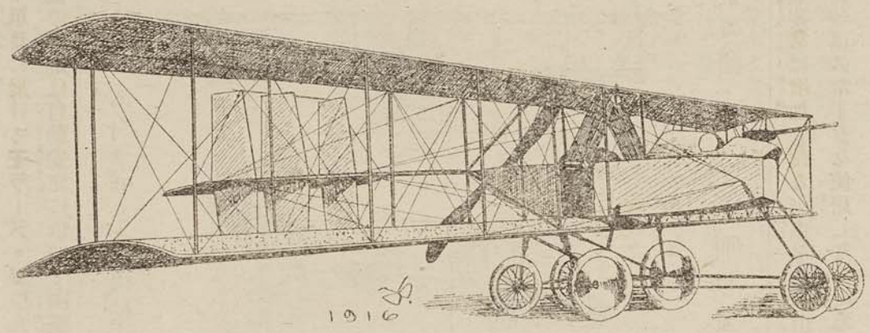
佛國飛行大尉滋野男爵助手　松岡陽一

ヴオアザン氏は陸軍型を作つた後即ち一九一二年更に之を全然改良して一の雄大なる軍用飛行機を設計構築した即ち第一圖に示すものは一九一二年型と稱するもので現に歐洲戰の始まる迄之の型式のものを佛軍は使用して居た。本式は上下兩翼の長さ同樣で、即ち二十メートルを有し之が負荷面積は六十五平方メートルを有し、主體の如き二本の鋼管にて作られ之れが後方に長方形の昇降舵と三枚の極めて大形の方向とを有して居る此の三枚の方向舵は張線を以て互に連結され方向操縱器を足にて踏む事に依り同時に同角度に動く樣作られてある。此の主體及尾部は從來の式とは非常に變化して居る。又着陸裝置の如きも陸軍型に至つて稍良好となつたるも本式に於いては尚軍用としての要件として更に一層堅牢に作られてある。即ち滑走車輪は中央部の一對が主なるものにて車輪も最も大なるものを用いて居る前後の車輪は中央部のものに比して遙か小なるものを使用して居る此等三對の車輪は何れも其の機脚の上部に緩衝用鋼鐵製スプリングを使用して居る。本機に於いては陸軍型同樣支柱及び主翼の主骨等は全部鋼空管を使用して居るのであるから軍用としては非常に丈夫でよいのである。座乘框は發動機の位置より前方は方形で發動機より後方に到るに隨つて扁平となつて居る座席は二個で前席は偵察者兼攻擊者の座席で∧型の放熱機の前方に在る座席が機の操縱者の座席である。發動機はサルムソン式カントンユンネ型二百馬力を以てシヨウビエル式推進器を回轉し一時間百キロメートルの速力を出す事が出來る。殊に本機の特異とする點は機の最前端に口徑三十七ミリメートルの加農砲を以て武裝せる點であつて、空中にて敵機又は敵飛行船等を攻擊するもので其攻擊力は實に恐るべきものがある。

要するに一九一一年當時の陸軍型は兎に角當時は相應の機なりしも後に作られたる本機と比較し見れば軍用としての價値に於いて數等の差異を生じたるは明かなる事實である其後一九一四年八月歐洲戰の開殆後ヴオアザン式は直ちに

佛軍飛行隊主力として使用さるゝに至つたと云ふの一事に依つても如何にヴオアザン式が優秀群を拔き居たりしかを知る事が出來る。開戰後に到つてヴオアザン氏は更に改良を施して出來上つたものが即ち第二圖に示すが如きもので即ち軍用としての要件たる地下偵察及爆彈投下に便なる構造を有し其の積載力强大にして且つ又相當の速力を有し其の構造堅牢にして空中攻擊具を備へ且つ之が使用に便利なる構造を有し

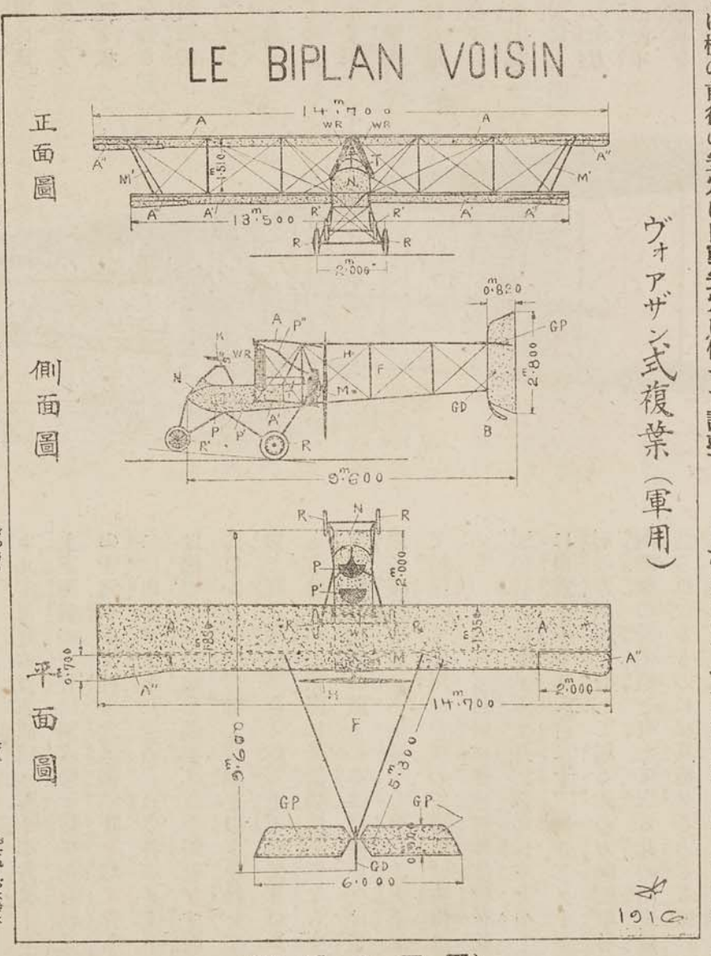
第一圖



全く佛國最優秀機と稱する事の出來るものであるのである即ち上翼は十四メートル七百、下翼は稍小にして十三メートル半で之が負荷面積は五十平方メートル强である。之の上下兩翼の主骨は鋼空管を以て作られ又兩翼を支持する處の十八本の支柱も之又鋼空管を以て作られる、上下兩翼端には巾零メートル七百、長さ各二メートルの動翼を有し之は機の横方安定を調整するの用をなす而して此の上下のエルロンは從來の如く張線を以て連結せずしてM'なる鋼管を以て互に連結される即ち上下のエルロンは張線で連結するときは種々の元因にて緊張度一樣ならずして最良の方法とする事が出來ぬ然るに本式に於いては鋼管を使用したるを以て張線の如く不精確なる事なく上下エルロンは互に極めて精確なる作用をなすのである。主體は陸軍型同樣の∨型のものを使用し材料は總べて鋼空管を使用して居る此の主體の長材は五メートル三百の長さを有して居て其の結合點に巾零メートル八百二十、長さ二メートル八百の極めて大形の方向舵を有して居る此の方向舵取付の主軸の下部には鋼鐵製の滑走橇を有して居る此の滑走橇は本式にても最初造られたるものには具備せざりしも後に至りて其の必要を認め之を着けたるものである。本式には巾零メートル九百長さ六メートルと云ふ頗る細長い昇降舵を有して居て尾

部には安定尾翼を取去つて單葉に於けるモラーヌ・ソウルニエー式の如くに機の前後の安定は自動安定に依つて調整される。着陸裝置は前部に二車輪と後部に二車輪を有し前部のものは其の徑六十五サンチメートルで後部のものは一メートルの徑を有し一寸普通の飛行機に見られぬ程の大きいものを使用して居ると云ふのも機の重量非常に増加したるが主なる理由である。而して此の主車輪にはスポークを使用しないで木製の圓板二板を合せ之をボールトにて止め之にタイヤを附したるもので一寸外の式で見られぬ變つた點である滑走中雜草などでスークを損ずるの恐を除去する機脚は全部鋼管を使用して居る事は勿論である。座乘框は陸軍型に酷似せ

第二圖



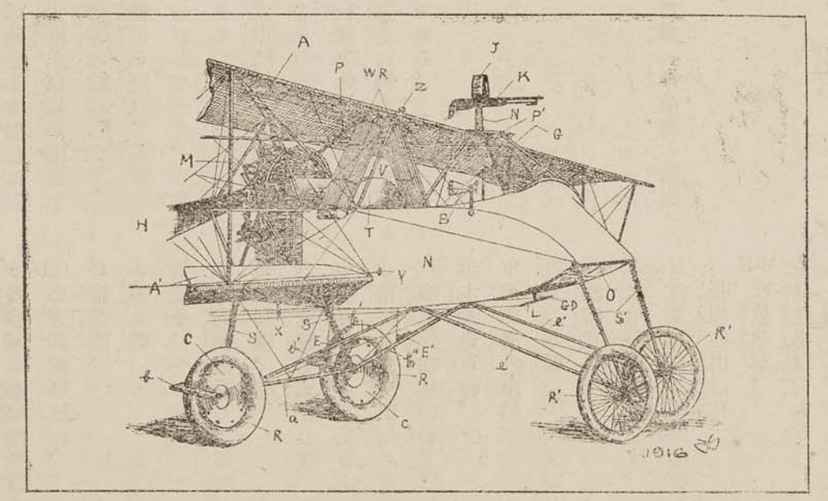
（圖面の説明）

A 翼
A′ 下翼
A″ エルロン
B 尾部滑走橇
F 主體
GD 方向舵
GP 昇降舵
H 推進器
K 機關銃
M 發動機
M′ 上下エルロン連結鋼管
N 座乘框
P 操縦者座席
P′ 同乘者座席
R 主滑走車輪
R′ 前部滑走車輪
T 油槽
WR 放熱器

るものを有し座席は最前部のものが操縦者席で後席には同乘者席である。發動機はサルムソン式カントン・ユンネ型百五十馬力又は二百馬力を使用し一時間に百二十キロメートルの速力を出す事が出來る、同乘者席の後方に放熱器を∧型に取付る此の放熱器の上端よりP″なるパイプに依つて發動機の上方の氣筩に連結され又下部のポンプより放熱器の下部にパイプにて連結されてあるので發動機の上部より入りたる冷脚水は下部に廻りポンプより放熱器に入り更に又發動機に至つて冷脚作用を遂るの裝置である。

本式にては框の前部操縦者座席の上に三脚を有する臺を作り之に機關銃を具へ空中に於いての敵機攻撃に具ふ。尚三十七ミリ

第三圖



メートル口徑の加農砲を具備せるものは前部に砲を有し隨つて後席が操縦者席になつて居る。

本機の全重量一千五十キログラムであつて一時間百二十キロメートルの速力を出し其の昇騰速力の如き單獨にて二千五百メートルの高度に到るに僅々約二十分を費やすにすぎずして其の積載力の如き五百キログラム乃至七百キログラムを積載するを得而して其の耐空時間の如き五時間の輕油を充すに足るのタンクを有して居るのである。

即ち今一九一二年型と一九一四年型とを比較し見るに後者は機の全幅小なるも其の幅員廣き故其の面積に於いては僅か十三四メートル負荷面積を減少したる事、下翼を上翼より短かくしたるを以て横方安定良好となりた

る事、主體の形式を變更したる事、機の速力を增加したる事又方向舵の數を一枚に減じたる事、主滑走車輪の位置を後方に置き最後部の一對を廢止したる事等の點にして要するに機の全部に渡り成るべく複雜なる構造を避けて簡單にして然も優良なる構造に改良したるものにして一九一二年式に比し更に優秀なるものとしたのである。現在佛軍は本機を以て大いに獨墺軍を擊破して以て空中防備主力蠶隊として佛國の爲めに偉大なる成績を擧げつゝある。而して歐洲戰は今後當分續行するであらうから向後ヴオアザン式に依り更に驚くべき空中の威力を發揮し完全に獨軍を惱ますも又遠きにあらざる事を信ずるの次第である。

第三圖は即ちヴ式の前部でAは上翼、

A′は下翼、
a は車軸、
B は風壓に依つて計る速度計、
b は雨後泥地面を滑走車輪にて泥をはね飛し推進器の破損を生ずるを防ぐ爲めの泥除
b′及びb'_1は主車輪軸を確保する鋼管
Cはスポークの代りの木製圓板、
E及びE′は地上より機に乘る際の足のかけ處、
e 及び e′は前車軸を確保する鋼管
GDは方向操縱器軸、
H 推進器、
J 彈丸帶、
K 銃身、
L 方向操縱具の下部腕、
M 發動機、
N 機關銃を支ふる腕、
O 操縱者が下瞰する爲めのセルロイド張りの窓、
P 冷脚 水循環用パイプ、
P′機關銃取付の臺（此の臺は三本の鋼管脚にて支持さる）
R 主滑走車輪、
R′前部滑走車輪、
S 及び S′緩衝用スプリング、
T 油槽、
Vは∧字形鋼管支柱、
Yはエルロン X は爆發瓦斯の排出管口及昇降舵操縱用張線の出口孔、
WR は放熱器、
Zは注水口である。

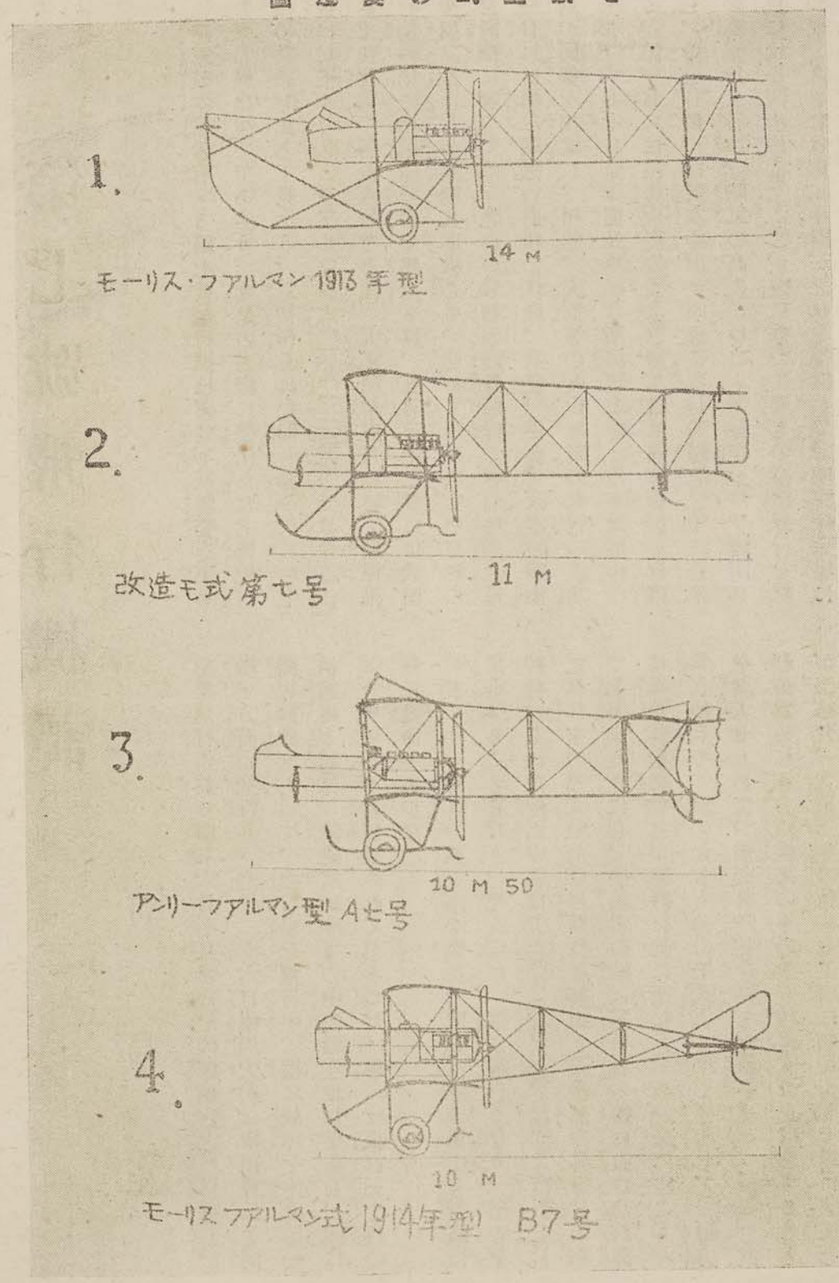
第七號飛行機譚

青鳥生

陸軍航空隊の有する第七號飛行機ほど其形狀容姿を更めた飛行機は少いであらう。今是の多樣に變化した七號飛行機の物語を記して見よう。最初作られた即ち第一代目の七號は、モーリス・フアルマン式（一九一三年型）で、普通日本で使用して居るものである。大正三年五月初めて所澤飛行場の第一格納庫の中で建造され、五月三十二日には武田少尉（現中尉）が同機に搭乘して、初めて帝都の空を見舞つた同機に取つては、之れが最初の野外飛行であつた。六月一日には第二期飛行將校の佐藤、眞壁、伊藤、阪本の四中尉が同機を操縱し、川越、大宮等の近距離野外飛行に成功した。六月七日より開始された所澤習志野の卒業飛行にも、第一日には佐藤中尉（現大尉）第二日は內藤中尉が操縱し、第三日目には阪本中尉が該機に駕して歸途二千二百米の高飛行を行ひ、陸軍の高度のレコードを作つた。同四日目には小關少尉（現中尉）が之に乘つて殿りの卒業飛行を終つた。九日には澤田中尉が之れを操縱して、駒澤練兵場に着陸し、東宮殿下の台覽に供し奉るの光榮に浴した。又卒業飛行の前日即ち六月七日には、佐藤副官之に搭乘し、橫濱方面に飛行し、七月二十六日德川大尉は依田曹長を同機に同乘せしめて、飛行場を飛行中、機に故障を生じ第一格納庫と第二、第三格納庫との中間の空地に墜落し、機はメチヤメチヤに破壞されてしまつた。思へば哀れ三ケ月の短い壽命であつた。

其の中に東洋の風雲漸く急に、我航空隊の勇士も青島に出征することとなり、飛行場は、俄に寂しくなり、留守を仰付けられた澤田中尉は、其間に獨持の飛行機を設計した。之は從來のモ式の前部昇降拖を廢止し、後部の昇降拖のみで上下する樣にし、操縱者の席は同乘者の後に設け、前部に機關銃を据付けて戰時行動に便ならしめ、又偵察にも非常に便利で、翼の如きも他のモ式より深く彎曲して風壓力を增大せしめて、前部昇降拖を廢した處を補つて居る。其れが爲めに速力は從來のものより秒速五米を增加することが出來た、大正三年の秋から工事に取かゝり、前に破壞した七號機の材料を使用し、全く出來上つたのが大正四年一

七號型式の變遷圖



月の半頃であつた。是が即ち改造モ式七號別の名澤田式等と云つて居るものである。此第二代目の改造七號は先代の樣に餘り花々しく活動しなかつた。時々各練習將校が試驗的に場内を飛行する位であつたが、大正四年五月二十六日、岡大尉が之を操縱して飛行場の内外を飛行中、機に故障起り飛行場の北一里なる富岡村大字北田の麥畑の中に墜落し原型を止めざるまでに紛碎されてしまつた。此の如くして第一次改造七號機の壽命も亦僅に五ヶ月の短きに終つた。改造モ式が壞れてから澤田中尉は更に新型飛行機を設計して、其の年の七月には早や見事に作り上げられた。型は一九一三年型アンリ・ファルマン形で、A七號飛行機と云つて居た。是も餘り活動しなかつた。佛國のアンリー・ファルマンと異る點は、主翼の兩端が上方に反り上つて居る事と、佛國ではグノーム式發動機であるのに、之にはカーチス式百馬力を付けてある所に在る。

同年七月九日、東宮殿下が所澤へ御台覽になつた時、岡大尉が之を操縱して台覽に供し奉り、無上の光榮に浴したが、常には格納庫の奥深く引込んで居つて、持々引ぱり出されて飛ぶ位であつた。同機は左右の安定が非常に惡いと言ふので各將校に嫌はれて居た。九月二十五日には第三期の岩富中尉が同機で飛行中、氣球庫の北方へ墜落し、機は大破して微塵となり、中尉は非常な重體に陷つたが辛くも命は取り止める事が出來た。第一代目と二代目の七號は、同じく二十六日に破壞し、第三代目のA七號が二十五日に墜ち、三ヶ月足らずして壽命を終つた。

又八月頃から製作された一九一四年型モーリス・ファルマンは即ち其番號を繼いでB七號と名づけられた。現に佛國で軍用として用ひて居るのも是れで、發動機はルノー七〇馬力で、凡ての點が是までの飛行機より堅固に見ゆる氣持ちのいゝ形をして居る。佛國の同式と異る點を言へば、前部の橇が一米ほど短くなつて居る位であらう。此の四代目のB七號機は光輝ある同機の爲め、最も誇るべき歴史を持つて居る。其れは昨年十二月二日の御大禮大觀兵式の當日阪元中尉が、同機を操縱して、駒澤に來り、二十米以上の烈風を突いて他の飛行機が、怒濤中の木の葉の如く風伯に奔弄され、しばしば危地に陷つたにもかゝはらず平然として猛風を突破し、悠々と目的を遂げ得て、多大の賞讃を博されたと云ふことである。此烈風中のB七號の飛行振りは陸軍航空隊飛行機の革命を促し、以後同型の飛行機のみを建造すべく、方針が定められたのである。此光輝あるB七號は今尙ほ所澤に健在である。B七號の弟とも云ふべき十六號や二十一號も全く同型である。（たはり）

世界最大の飛行艇

某海軍飛行將校

前書

其れはアメリカ號を更に大きくしたやうな物で――主翼は三葉から成り――長さが百三十三呎――幅が十呎――重量一萬二千ポンド――目下カーテイス會社で製作中である。

最初陸上に發達した飛行機が、暫時海上に應用すべく發達しかけた時に、宛も今回の大戰爭が勃發したので、一時其進歩の道程が阻まれたやうに思れたが、事實は決して然うでない。彼の大平洋横斷の爲に建造されかけたアメリカ號飛行艇を初として、大型飛行艇及び水上飛行機の優秀な物は、之を北海、英佛海峽乃至は地中海、ダルダネルス海峽、黑海等の各所に持て行て偵察或は防禦攻擊の用途に大に使用されてゐるのである。從つて水上飛行機の出生地である米國では、聯合國側から續々申込まれる注文に依て、多數の水上飛行機飛行艇を製作してゐる内にラデグスラス・ドルシイ男爵と云ふ人が、今回圖（口繪參照）の如き未曾有の大飛行艇を建造する計劃を樹て、目下米國バフアローのカーテイス飛行機會社の工場に命じて製作中であると云ふ。

この飛行艇は、彼の戰爭勃發前に大西洋を横斷する計畫で作られたアメリカ號飛行艇を擴大したやうな物で、將に水上戰鬪艦とも稱す可き恐ろしい大飛行艇なのである。其主翼は三葉になつてゐて、長さが百三十三呎、幅が十呎、上下間隔が十呎、全體で四十平方呎、重量一萬二千封度、乘員必要物品等を搭載しての全重量が二萬一千四百五十封度、下部の艇の長さは六十八呎、最大幅員が廿呎、V字型をした底部は全部銅板が張てあつて、骨格は堅牢なアシユ材で組立てられる。艇の後方は尖く切斷してあつて、段階を成し、離水を容易にしてある。尚最後部に舵が附てゐて水上に於る方向轉換の便を計てある。艇の内部は十二個室に區劃してあつて、各室は防水設備が充分に施されてある。此内三分の二は飛行艇全部を浮揚させる力を支てゐるのである。艇の上部に設てある司令塔には操縱器及び航海の要具が備てあり、又船室には八名の乘員並に燃油七百ガロン、滑油八十ガロン、及び各種の武器を收容出來るやうになつてゐる、一時間の速度七十五哩、東京と下ノ關の間位を一飛びに飛行する事が出來る。其發働器は百五十馬力の水冷式V

字型の物を二個宛合併させて、三百廿馬力の物として三個所に取付け、それで十五フイート叭の螺進機を廻轉させる事になつてゐる。尚此等の發働器に始動を與る爲に補助機關として四十馬力の物が電氣作用で發働させられるやうに備附けてある。此小發働器は又安定機其他の小部分を動かす時に使用される事になつてゐるが、殊に水上を走る場合には、此發働器に依て水中の推進機を廻轉させる裝置となつてゐる。

尚この三重螺進式の特長と見る可き點は、只一個の螺進機では其の破損と同時に直ちに降下しなければならぬ、又二重螺進機では、間もなく降下しなければならんと云ふ不便があつて、飛行は頗る不安であるが、二重であると三個の内一個が破損しても速度が稍々減ずるのみで、決して降下を餘儀なくされると云ふやうな不便はなく、又前方二個の牽引式螺進機が全く停止したとしても、後方三百二十馬力の推進式の物が一個働いて居れば、十五分の一位の角度で徐々に降下姿勢を採りつゝ、適當の著水場を求めると云ふ頗る好都合に出來てゐる。又尾翼の構造は五十四平方フイート叭の方向舵が四十六平方叭の鰭翼の後方にあつて、水平舵は又九十六平方叭の面積を有し、固定水平尾翼は百二十六平方叭を有して安定を助けてゐるのである。又燃料等の外に三千封度の重量を載積出來るのであるから、一封度半の飛行砲二門の外に、三封度乃至は六封度重砲を多數に積んで、此等を艇の各部に備附ける事が出來る。

尚又此の艇の基となつたアメリカ號飛行艇は翼が僅か七十二叭、全重量二千六百封度と云ふ小型の物で、凡ての威力は、この新造の物からは頗る落ちるのであるが、一昨年開戰の冬十一月に英國海軍省の購入する所となつて、直ちに海岸防禦隊に使用され、海峽を軍隊輸送する場合に、この警備をする任務に服したが、獨逸潛航艇を破壞する事三度に及び、その他潛航艇を發見するごとに此を三倍の速度で追跡し、更に驅逐艇に命じて擊沈させる等その効力は驚く計り強いので、其後英國政府は同型の物を直ちに十二艘米國に注文し、後更に又二十艘注文して、大に潛航艇の殲滅に使用した等、その効績は豫想外に偉大であつたのを見ても、此れより更に數倍偉大で、武力も遙に強い今回の新飛行艇を實務に使用する事となつたならば、或はツエペリン飛行船を負かす程の功績を擧げるだらうと云はれてゐる尚此の種の大飛行機は飛行艇計りでなく、陸上用の飛行機に製作しても、其効果は同じやうな物だらうと云はれてゐる。とに角此飛行艇は從來の飛行界の記錄を破る大飛行機であると云ふ計りでなく、時宛も戰時中に屬するので斯る大飛行機が戰爭に參加したなら從來の戰術に如何なる大革命を與るか頗る興味ある問題であると云つて、世界列强は今や耳目を此飛行艇の完成に全く集中させてゐると云ふ。

翱翔旅館

蒼天生

前世紀迄の人類の快樂は地上と海上との兩方面に極限されて居たが二十世紀の初頭に當つて航空機關が發明されてから人類の歡樂境に向つて天空といふ第三の世界が所有せらるゝに至つた。

空中の巨鯨……翱翔旅館……ツエツペリン大飛行船よ！　我々の安全にして感興極りなき第三娯樂天地は大ツエツペリンの翱翔ホテルに依つて求め得るに至つた新たなる天空の世界には不愉快なるトンネルもない。煤煙も飛ばない。其外には危險なる暗礁もない。怒濤もない。

――――――

夏の朝のやうな清新な空氣の心地よさ。琴の空音のやうな發動機の旋律。雲雀の囀りのやうなプロペラーの騒音。王宮のサロンにも比す可きツエツペリンの船室には滑らかな大理石の卓子もある。冷たい臘色に光るグランドピアノもある。若しも空氣の密度の相異から誘因する船體の動搖がなかつたならば泡立つビーヤの祝盃も擧げる事が出來る。外界の一切の羈絆から脱したこの室は學者、詩人にとつては好個の書齋と成り、美術家にとつては最適のアトリエと成るであらう。

――――――

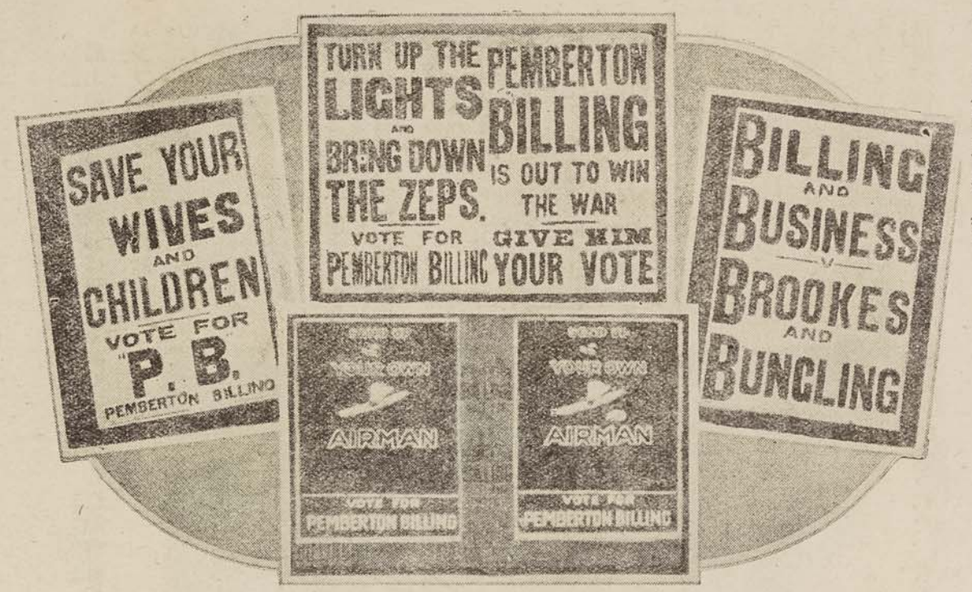
船上のあらゆる設備は恐らくはリバプール汽船會社や、ハンブルグアメリカ汽船會社の代表的汽船にも劣るまい。隔絶せる地上海上と神秘的交通を保つ爲には無線電信機の裝置がある。花の如き、イルミネーションの美觀は倒底地上海上の比ではない。既に一千九百十四年のクリスマスは獨逸最大のツエツペリン飛行船『ビクトリヤ・ルエーゼ』號の上で催された。當日『ビクトリヤ・ルエーゼ』號は廿餘人の乘客を乘せライン河畔なるフランクフルト市上を數時間に亘つて游戈した。其際船室の卓上には美くしい降誕祭樹が飾られ各種の祝の演說や暗誦が演ぜられた、若しも乘客の中に音樂、ヴアイオリン、セロ、立琴等に巧みな人々が居つたなら空中に於て一大音樂會が催されたであらう、此樣な天空の歡樂境は嘗つて『ハンザ』號の上でも催された經驗がある。

ツエペリン飛行船『ビクトリヤ・ルエーゼ』號上のクリスマス

△　△　△

△　△　△

今や航空機の急劇なる進歩發達と共に空中に於ける我等の歡樂世界は目醒しい擴張を遂げ實用的なる空中旅行の完成は元より空中ホテル、空中料理店、空中カフエー、特に日本紳士社會の要求に應じて空中待合の現出するも遠き將來ではあるまい。



空中より撒布せるチラシ

飛行機で選擧運動

英國知名の飛行家にして政治家たるペンベルトン・ビリング氏は本年一月二十五日英國マエルインドの下院議員補欠選擧に際し英國空中防備の充實を政綱として選擧場裡に打つて出で其主義政見を徹底せしむるが爲自ら飛行機に搭乘して選擧區上を飛翔しながら寫眞に示すが如きチラシを撒いたり飛行機又は自動車上から政見發表の演説を爲した。寫眞に示すチラシの文句は『汝の妻子を救ふ爲にペンベルトン・ビリングに投票せよ（即ち獨逸ツエツペリン投彈の慘禍を防ぐ爲にの意）探照燈の光を天に向けてツエツペリンを擊ち落せよ、ペンベルトン・ビリングは戰爭に勝利を得んが爲に打つて出たのである、汝の一票を彼に投ぜよ』『汝自身の飛行家を當選せしめよ』と云つた具合で頗る時勢に適應したる運動方法を執つたのである。氏は開票の結果不幸にして落選したのであるけれ共選擧運動に飛行機を利用したのは實に氏を以て嚆矢とする。

倉富砂邱

◎坂本君の飛行の時

ニコ〳〵倶樂部が紀念飛行をする爲に、關西から坂本君を呼んで、代々木で飛行をした。其の結果は、不幸にして飛行間もなく墜落して、機體は破壞されて了つた。主催者側の方では、前に宣言した帝都訪問飛行が出來ないのを非常に殘念がつて、僕に何とか是に代るべき方法はないだらうか、何とかしてもらへまいかと云ふことだつた。其れに未だ十時少し過ぎた位ゐの頃ではあるし、旨く行けば、其日の夕方にでも間に合ふかも知れないと思つて、何とかして見ようと云つた。僕は此の場合、帝國飛行協會に向つて交渉するより外に道はないと思つた。其れでニコ〳〵倶樂部の藤井君と一緒に、自働車を驅つて運動に着手した。

其れには、豫め阪本君の承諾を受けておく必用がある。二回の飛行をする豫定だつたから、この中の一回を、外の人にやらせてもらいたい、そして後の一回を、坂本君の飛行機が修繕出來てから、してもらいたい、さうすれば兩方ともに顏が立つだらうと云ふ積りだつた。京橋の旅館に阪本君を尋ねて、此の話しをすると、快く承諾してくれた。其れで愈〻運動に着手して、協會の主立つた人――話さねばならぬ人――話して甲斐のある人――を訪ね廻つた。處が折惡く皆不在で、已むを得ず一時代々木へ引上げ、更に新宿の或る旅館へ行つて、主催者と色々相談をした。其中に、協會の八田氏と電話で話すことが出來て、其れでは君からの賴みといふことにして、阪谷男へ交渉して見ようといふことだつた。其の結果、阪谷副會長は承知してくれたのである。

其處に尾崎行輝君が見えた。偶然だつたが、僕は八田常務理事と電話で話してる處に、丁度尾崎君が來たので、電

話で二人が相談してくれた。其の時に既に二時を過ぎてゐて、殊に突然のことでもあり、又祝日で職工も休んでゐるから、今日の飛行は六かしさうだといふことだつた。

此時、こんな時間とか、職工とか、其の條件が良かつたら、即ち此日の中に飛行は出來てゐたのだ。協會の方も、突然のことではあり、所謂理事會を開いて相談するなど云ふ暇はないから、斯ういふ便宜な方法を取つて、承知してくれたのである。僕は繰返して云ふが、協會は此日、僕の要求を容れてくれたのである。事實の上に於て、遂に中止となつたのは、又別な問題であつた。

此外に發動機借入の交渉もしてゐる人がある。斯う開けて來た協會のことだから、空いてゐる發動機なら貸してくれるだらうと思つてゐる。此の位ゐのことはしてくれても好いと思ふ。

阪本君の代りに、飛行協會に飛行を賴んだのを、笑つてゐたものがあるさうだ。協會の如何なるものかを知らぬもののすることだ、とまで云つたものがあるさうだ。僕は其の人を氣の毒に思ふ。色々と物識りが多くなると、隨分とうるさいことになるものだ、とつく〴〵思つた。

◎ナイルスの弟子志望者

何時も朝寢をせねばならぬ僕は、其日も可なりの時間まで寢てゐた。すると『下女が起しに來て、『國民飛行會の方と云つてお出でになりました』と云つた。僕は渡部君が來たのだらうと思つて、今直ぐに起きるから座敷に待つてゐて頂けと云つた。其れから顏を洗ひながら、渡部君ならば、知つてゐる筈だが、何だか變な取次ぎやうだと思つてどんな人だと聞いた。若い書生さんのやうな方ですと云ふ。其れぢや渡部君の代りに、誰か來たのか知らと思つた。

會つて見ると、僕は初めて見る人だつた。飛白の羽織を着て、小倉袴を穿いてゐた。未だ若い男である。行きなりナイルスさんは今何處にゐますかと云ふ質問だつた。僕も好くは知らなかつたから、知らないと答へた。ナイルスに就て色々と質問を受けた。未だ僕は此の人が、何の目的を以て來たのか、要領を得なかつた。色々と話してゐる中にナイルスの妙技に感じて、その弟子になりたいと云ふことだつた。語學は少しも出來ないといふ。其れぢや仕樣がな

いぢやないかと云つたら、手點似をしてゞも用は達しられると云ふ。そして日本でナイルスの弟子になつて、米國までゞも連れて行つてもらひたい。それから徐ろに宙返飛行を稽古したいといふことだつた。

三十分もして此少年は歸つた。僕は到底、ナイルスに御紹介するだけの力もなし、又、お世話して上げるだけの力もないからと云つた。少年は其れでは、長岡將軍にお願ひをして見ますと云つてゐた。僕は將軍にお願ひが出來れば此上のことはあるまいと云つて分れた。

◎ナイルスとスミス

ナイルスは上海に向つて飛ばんとして居る。スミスは十九日とか二十日とかに、横濱へ着かうとしてゐる。ナイルスの飛行會から起つたゴタ〳〵が、未だに解結がつかずにゐる。何だか嫌な雲が、其處邊に漂つてゐる。此の名飛行家をして、立派に日本の國を去らせたいと云ふ處から、僕は、二月の末頃から、ナイルスのお名殘飛行といふことに與つて奔走した。此の一番最初の話しは、二月二十八日の夕方であつた。帝國ホテルで、彼の支配人フリードマンと會つて、此の話しが出た譯である。

青山の飛行から引かゝつて困つてゐるものは、大分ある帝國ホテルの支拂ひも殘つてゐる。誰が拂ふとか、誰に義務があるとか、ないとか、この問題は迚も一朝一夕には解されぬ。とも角、今一度東京で飛行をさして、その收入から、一細のゴタ〳〵を片附けやうと云ふのが、最初に僕の頭に起つた手段であつた。それが出來れば、四方八方が圓滿に收まる。金の問題も片が附く。そしてナイルス一行にさつぱりした氣持になつて、日本の土地を去ることが出來る。さうしてやりたいと云ふのだつた。

由來僕は金錢上に關係することは大の嫌いである。今までだつて、一度もしたことはない。僕は屹度金を扱つては下手に違いない。此のお多殘飛行に就ても、僕が其んな不得手な仕事は出來ないから、青山飛行會で金に引掛つて困つてる人を立てゝ、其の人を立たせやうとした。今日まで未だ此問題に關係してゐる譯である。

昨晩までの情況によれば、折角奔走して見た、お名殘飛行は、先づオジヤンになりさうだ。大いに悲觀してゐる處である。遂にナイルス一行に、不快な思ひをさせて歸すのかと思ふと、誠に殘念なことである。

スミスは大分大仕掛けな考へを以て日本へ來つつあるらしい。あの櫛引といふ人は、仲々のやりてだといふから、面白い飛行が見られるだらう。どうか彼等を失望させないやうにしたいと、今から思つてゐる。（三、一一）

楯の半面（一）

【田中館博士の印象】

蒼天生

飛行機に田中館博士は竹に雀、牡丹に唐獅子以上の好對象である。

田中館博士

東京帝國大學理科大學教授正四位勳二等理學博士田中館愛橘と職員錄にある通りの嚴めしい肩書附まで呼べば、淡々として冷灰の如き一學究とも聞えやうが、飜つて『飛行機の田中館博士』或はより一層くだけて單に『館さん』と呼ぶならば、よしや飛行將校の岡大尉や澤田中尉を知らぬ人でも一種の懷かしさを以て直ちに了解する事が出來るであらう飛行機に田中館博士は竹に雀、牡丹に唐獅子以上の好對象である。

明治四十二年の初冬に彼の德川大尉が霜白き代々木原頭で、日本最初の空中飛行を試みた當時の事は云はずもあれ所澤に初めて陸軍の飛行場が出來た四十四年頃、所澤に泊り切りの飛行記者連が、壯快なプロペラーの響に驚いて、顏も洗はず、飛行場へ驅けつける頃には、何時でも東京から自轉車でやつて來たと云ふ田中館博士の姿を發見せぬ事が無かつた。又現在の飛行船『雄飛』號が、獨逸から着いたばかりで毎日飛揚試驗をして居る頃、新宿發の一番汽車では屢々薄きたない二等車の隅に博士の背廣姿を發見した。素朴にして磊落なる博士は、身の邊りを注意しようなどゝいふ婆婆つ氣は露程もなく、處々インキの汚點や煙草の燒焦をこしらいた背廣服のポツケツトから御自身の頭程ある梨の實をとり出して其半分を私に與へられたり、銀紙に包

んだチヨコレートなどをすゝめられる。

□

博士は持前の萬事に無頓着な性質だけに、頗る奇行逸話に富み、十八錢といふ正札附のネクタイを所澤の春風にひらめかしたり、地方へ出張して宿の女中に櫻肉を食はしてくれと注文し、其櫻肉の馬肉の別名なるに心付かざりし失策談、ある理學上の難問題に沒頭し其儘入浴して難問題の解決に耽つて居ると、漸やくにして難問の秘鑰を索り當て驚喜の餘り其方式をノートに取らんと思ひ『占めた』と大呼して裸體の儘で書齋に飛び込んだと云ふ話、又事は少しく尾陋に亘るが、寢食の間も書籍を離さざる博士の便所に於て迄讀書される事は何人の不思議でもないが、某の日大學の講義を終つた後用便の爲め、本を手にした儘便所に入つたが、其本の面白さに釣り込まれて肝心の用は忘れてしまひ頻りに讀書に熱中して居た。やがての事に午後五時の鐘が鳴ると大學の小使は一つ一つ各便所に錠を下して歩くのである。便所内に在つて斯くとも知らぬ博士は尙も一心不亂に耽讀して居たが、其内に日がトツプリと暮れて文字も讀めぬ樣になつて來たので、止むを得ず便所を出やうとすると扉には外から堅く錠が下りて、押せども敲けどもいつかな開かぬ。流石無頓着な博士も一夜を便所内に籠城せねばならぬかと思ふと些か心細くなり『オーイ、オーイ』を連呼したが、四邊はシーンとして何の應もない。遂に博士の助を呼ぶ聲が本郷通りを散歩中の學生の耳に入り、首尾能く難を救はれたなどは逸話中の逸話と云つて善からう。

□

逸話の披露は之れ位で打ち止めにして博士の閲歷と人物とを少しく調べて見たい。博士は岩手縣の北邊二戸郡の產其遠い祖先には王化にまつろはぬ北狄の血潮が流れて居るかくして何んとなく剛强峻厲な處がある。傳ふる處に依れば南部檜山の血性男子相馬大作は、博士の血族に當るとの事で、其强剛の趣あるも故あるかなである。型の如く筋書を辿れば安政三年九月福岡町の近郊に生れ、明治十五年帝大の理科大學を卒業して理學士と爲り、大學理學部の助敎師を拜命して、敎職に在る事五年餘、二十一年には理化學專攻の官命を帶びて英國に留學を命ぜられ、グラスゴー大學に於て電氣學、磁氣學を研究し、後獨逸に轉じ伯林大學に入つて研學する事二年の後、二十四年に歸京して理科大學の敎授と成り、理學博士の學位を授けられ、二十五年の久しきに亘つて其該博なる講義を續けて居るのである博士は帝大數千の青年學徒から、溫顏なる師父として追慕

せらるゝのみでなく、其郷黨たる南部人からは師父も尙及ばざるの敬愛を受けて居る。舊藩主南部伯爵を會長に戴く岩手縣の青年子弟は、毎年二期に南部同郷會なる親睦會を開き、舊藩出身の先輩と後輩とは一堂に會して、無禮講の氣焔競べをするのであるが、此會の席上で最も郷黨の信望を繫ぐ者は、同じく南部の出身者にして現代に時めく政友會總裁原敬氏でも無く、和製ルーズベルトとして聲名一代に普ねき後藤新平男でも無く、果た又前海相として海軍問題の爲に時の首相山本權兵衞伯に殉じた齋藤實男でも無い。信望の的は實に一個の大學教授に過ぎざる我が田中館愛橘博士その人であつた。秋霜の侵す可らざる如き威容の裡に春風胎蕩の温情を漲らす物は、實に博士の風丰の第一印象である。其訥々たる東北辯丸出しの講演なり、座談なりには頗る拙なるが如くにして、頗る巧みなる雄辯術が潜んで居る。博士の辯舌の田舍臭さに暫々失笑せんとする人々も、漸時にして博士一流の輕快なユーモアと、井然たる論理の透徹とには覺えず傾聽せずには居られなくなるであらう。博士の玲瓏玉の如き人格は到る處に其光輝を表現せずには措ぬのである。

理化學界に於ける博士の高邁なる學識や、凱空機學者としての博士の權威に關しては今更らしく呶々の筆を加ふるの必要を見ない。私は既に奇行家としての博士、人格の人としての博士に關して稍其片影を寫し得たと信じるが故に此處には更らに家庭の人としての博士に就いて語り、典型的學者の學者的生活は如何なる物であるかを寫して見たい。

□

向ケ岡彌生町と云へば、今日では西片町東片町等と並んで清新な學者町と見做されて居るが、明治二十四年に博士が歐洲から歸朝して其處を現在の場處に卜した頃には、向ケ岡一帶の地は白晝狐狸の横行する樣な荒凉たる地域であつた。博士は其處にカルフオルニヤ邊りの百姓が住むにふさはしい、名ばかりの洋館を建築したのである。總建坪三十坪にも達せざる可き平家造りの其洋館は、當時に在りては未だ綠色のペンキの塗色も冴え〴〵として、新歸朝の學者のホームとして、尙幾分の光彩を放つて居たかも知れぬ。然れ共、爾來年を經る事幾星霜、現在に於ける博士の住宅なる物は、殆んどダイオゼネスの桶とも稱す可き元始的色彩を放つて居るのである。試みに博士の住宅を訪問して見よ、人は本郷追分で電車を乘り捨て、右に高等學校の寄宿舍に於ける寮歌の高唱を聞きながら、向ケ岡のダラダラ坂を一直線に下り、更らに左折して羊腸たる彌生町の小路を辿れば、小路の正に盡きなんとする一隅に、朽ち倒れんとするばかりの小さき門（記者曰く最近に之れは改築されました。）を發見するであらう。門の右柱には消えなんとするが如き糢糊たる墨痕を以て、微かに『田中館』の三字を判讀する事が出來るのだ。苔蒸すが如き三四の石段を上つて形ばかりなるヴエランダ樣の玄關に立てば、左方頭上なるドアの上に『取次』と黑書した長さ七、八寸の木札がブラ下つて居る。訪問者は此の木札を引く、札は太き麻繩を以て室内の鈴に接續し、ガラン〳〵と頗る超俗的な音を發しながら、秋の田の鳴子の如き響を以て應じるのである。此灰色の『怪物屋敷』の如きドアの中から出現する取次ぎの方は、再び訪問者の度膽を拔かずにはおかぬであらう。此灰色の戸が靜かに内の方から開いた時、――時が夏ならば――目の醒める樣な中形の浴衣を着て、漆の樣な髮の毛を清新なマーガレツトに結んだ博士の愛孃美稻子さんが、濃い綠色のカーテンを背景にして、浮出す樣に表はれるであらう。此愛孃美稻子さんこそは、枯淡なる博士の學者生活に向つて唯一のオーシスともなり、博士が家庭的生活の女王とも成つて居るのである。十數年前、未だ壯年にして賢夫人を失つた博士は、當時未だ三、四歳であつた唯一人の令孃の幸福なる可き生涯の爲に、多數の熱心なる博士夫人候補者を悉く拒絶して今日に及んだのである。私は此貞節温情ある博士が半生の獨身生活に於て、博士ならでは發見し能はざる美くしきローマンスを味ふのである。書齋、寢室、接客室の全部を兼ねたる二十疊敷き位の書齋は、明り取りの窓を除いたあらゆる四壁に、天井にも達せんばかりの和洋の書籍がある。座臥常住洋服しか着られない博士は、早曉より夜半に至る迄山なす書籍裡に在つて研究を怠られないが、研究に稍や疲れた夕には、書齋の一隅に置かれたる臘色の大ピヤノが、愛孃美稻子さんの纖手に依つて彈ぜられ、老博士の頭腦に向つて回復の泉を湧かしめるのである。學業の餘暇ある冬の夜など博士を訪ふならば愛孃が手製の匂ひ高き紅茶に自らウ井スキーを注しながら燃え盛る壁暖爐の火を圍んで盡き果てぬ飛行閑話に夜を更す事もある。私は特に同郷の一後輩として博士の爲に祝盃を擧げながら淋しい彌生町の夜更けを歸つて來た事もあつた。（五、三、一〇）

百六十五年前に

英佛海峽を渡つた飛行機

桃太郎

今日世界中の空を自由に飛び廻はつてゐる飛行機は、今から大凡十年計り前に、亞米利加のライト兄弟が初めて作り出した物だと云ふ事は、皆樣もとくに御承知の事でせう。それから又ナイルス等が宙返りに用ひてゐるブレリオと云ふ單葉飛行機の發明者で、元ランプの製造を本業としてゐたル・イブレリオと云ふ人が、今から七年程前に、英國と佛國との間の海峽を始めて飛行機で飛び越して、世界中の人を驚かしたと云ふ事も大低は御承知でせう。何故この僅か廿五哩——日本の里程で十里——計りの海を飛行機が飛越して世界中の人を驚かしたかと云ふに、彼の世界の大英傑ナポレオンが百萬の軍勢を率ひて、歐洲の平野は皆自分の足下に蹈ばへたるにも拘らず、僅かこの廿五哩計りの海水が横はつてゐた計りに、英國には一指も觸れる事が出來なかつたので、ナポレオンは死ぬ迄もこの海を渡らなかつた事で殘念に思つてゐたのです。その當時今日のやうな飛行船なり、飛行機なりがあつたなら、大奈翁は今日の獨逸以上に英國を空中からドシ〳〵攻擊したに相違ありません。つまり英國が小さい國ながら世界中に威張つてゐたのも、この僅かの水で歐洲本國と分れてゐるからなのです。その大事な海峽を、ブレリオが僅か卅分計りで易々と飛越したのだから、英國は元より、世界中の者が皆驚いたのです。最う英國は枕を高くして眠つてゐる事は出來ない。何日何時空中から敵が攻めて來るかも知れないと思ふやうになつたのです。實際今日の對戰では獨逸の飛行機、飛行船が旺に倫敦を初め各都市を空中から襲擊して、英國民を驚かしてゐるではありませんか。とに角、斯のやうな意味で彼のルイ・ブレリオと云ふ人は世界に一記錄を作つたと云ふので大變有名になつてゐるのです。ブレリオの英佛海峽横斷、此れは歷史上に全く有名な事として記載される事になつたのです。然し風船でこの海峽を風に吹かれて飛越した者は、今から百卅年程前にあります。これは立派に記錄に殘つてゐます。然しこれは風に吹かれて飛越したと云ふので、餘り重くは見られてゐないのです。

然るに、飛行機で右の英佛海峽を最初に横斷した者は、右のルイ・ブレリオと云ふ佛國のランプ屋ではなくて、實際はそれよりも百五十八年前即ち千七百五十一年に伊太利の一僧侶に依つて立派に横斷されたと云ふ事が此の頃或記錄に依つて明にされたのです。千七百五十一年と云へば、今日の飛行機の發明があつた所か、未だ例の風船の發明すらも無つた時です。その時から卅年過ぎた時に、佛國のモンゴルフイエと云ふ兄弟の者が、ストーブの煙から思ひ附いて紙の袋に煙をつめて空に上げて見たのです。大昔から飛行機を發明しやうと思つて色々な物を拵へた人はありましたが、まだその頃は一寸でも土地を離れるやうな物を作り上げた物は、無つたのです。それだのに、伊太利の名も知れぬ坊さんが立派な飛行機を作つて、英佛海峽を見事に

乘切つたと云ふ事は、千古に誇る可き大成功の事柄なのです。慥にこの坊さんは世界の大偉人に相違ないのです。

扨その坊さんは何う云ふ人であつたかと云ふに、伊太利ヴエラスのエフ。ピトリと云ふ人が、アムステルダムで出版した『千七百五十一年史』と云ふ古い本の内に、シヴイタ、ベクチア生れのアンドリア・グリマルデイと云ふ僧侶が、この大冒險を行つたと書いてあるのです。この本計りでなく、當時の古い本には皆この事が、その年中での大事件として書き記されてあります、でこの坊さんはその前廿年間も東印度にゐたのであるが、同地から實に不可思議千萬な、即ち鷲の如き形をした物を携へて來て、それで佛國のカレーから英國の倫敦迄飛んで行つたと云ふのです その時の速力は一時間で計ると十八哩、ざつと六里計りであつたと迄書いてあります。

其所でその當時の記錄に何んな事が書いてあるかと云ふに、英國の或人から、この本の著者の所へでも手紙で書いてやつたものらしい物が載せてあります。今それを飜譯して見ると——

千七百五十一年十月、倫敦にて、

數日前に此の地に到着した一人の立派な人は、リスボンを經て東印度から來た人なのです。この人は。シヴイタ・ベクチア生れのアンドリア・グリマルデイと呼ばれる伊太利の僧侶で、年は五十格合、背は中位の人です。この人は極東にあつて廿年間傳導に從事する合間に、一の不可思議なる機械を完成させる爲めに十四年間と云ふもの、機械學と數學との研究に從事したのださうです。この不可思議な機械と云ふのは、一種箱の如き形をしたもので、輕々と空中に飛揚し、一時間廿一哩——七里——の速度で空中を走る事が出來ると云ふのです。その機械の外觀は鳥の形をしてゐて、翼の長さが廿二呎、胴の所はコルクを巧みにつぎ合せた物で、張線で丈夫にいはいつけ、上に紙を貼つて羽が附けてあるのです。又翼は麻布と鯨の骨とで出來てゐて、矢張り外ては紙と麻とが附けてあつて、然もこれが三つに疊まれるやうになつてゐます。その胴體の中には簡單な卅個の車輪と二個の眞鍮球とがあつて、此れに鎖が皆引張つてあります。又水銀の入つてゐる六個の眞鍮の容器を動かすやうに出來てゐて、乘つてる者は機體の水平や均整を保つ事が出來るやうになつてゐます。そしてその飛行機が前へ進むのは、鋼鐵の車と磁石との摩擦に依るので、強風の中をも突進して行く力を持つてゐるのです。

そしてこの飛行機は廿一呎の長さのある尾翼に依つて左右に方向が自由に轉じられるのです。この舵は細い革紐で操縱者の兩足にしつかりと結び附けられてゐて、足の動かし方で何うにでも飛行機の向きが變はるのです。又その飛行機の頭は丁度鷲の頭のやうに威風堂々と立派に組立てられてゐつて、嘴は透き通つた何かの角で出來てゐます。又その眼はピカ〳〵光る硝子で出來てゐて、嘴の内部から引張つてある張線に依つて、ギヨロ〳〵光る所は本との眼と少しも變りません。そしてそのこの眼と嘴とは飛行中絶へず動いて、三時間經つて、飛ぶ力が盡きると、翼が自然に止つて地の上に靜に下りて來て、乘つてゐる者が脚で地を踏むと、忽ち又飛行機は天に昇つて行くやうになつてゐるのです。

で、若しも運惡く飛行の原動力となつてゐる車の一つでも破損した時には、その飛行機は眞逆樣になつて墜落すると云ふ危險があるので、この發明者は、決して樹木より上の高さには飛ばないやうにしてゐました。そして英佛海峽を飛び越すと云ふ冒險も二度と二度び繰返さないと云つてゐました。それでは何故佛國のカレーから倫敦へ飛んで來たかと云ふに、それは、半分は世間の人を驚かしてやらうと云ふ好奇心と、半分は當時世界の有名な機械學に精進した學者又は大學教授等に爲つて見たいと云ふ希望があつたからださうです。

それでこの僧侶が倫敦に到着するや當時有名な英國の機械學者の二人に逢つて、その飛行機を能く見せた後、この飛行機は未だ不完全で故障が起り勝ちであるが、この次ぎのクリスマス迄には、六時間の間一度も休まずに、一時間卅哩の速力で飛行する事の出來る、新しい好い飛行機を作つて飛んで來ると約束をしたさうです。

第一この飛行機の羽の美しさと云つたら、何んな畫家でも思ひも附かんやうな美しい、黑青赤褐白等の有ゆる色を巧みに配合して實に見事に出來てゐたさうです。扨てこの坊さんは倫敦に來て何うしたかと云ふに、學者達に見せた後、彼は先づ倫敦公園からウイユゾルに飛んで行つて、二時間の後には無事に元の所に歸つて來ました。尙彼は國王陛下の誕生日に、記念塔の頂上から出發して、倫敦市上を一週して、公園に歸つて來ると申したさうです。この話しは皆眞實の事です。只充分に書く暇がないので、大に省略しました。』

と斯う記錄には記されてあるのです。そしてその飛行機がその後何うしたかは記錄に記してありませんが、若しその儘發達したら、今日の飛行機とは又別種な面白い物が出來上つたゞらうと思ひます。この儘に姿の消えて了つた事はつく〳〵殘念な事だと思ひます。

俺は武藏野の鳶であるる

鳶　老

俺は武藏野の鳶である、富士、筑波、日光の山連で三方を圍まれ南の一面が涯のない大洋に接して居る。この廣ろい虛空は俺達仲間の活動世界であるのだ。俺は、彼の深い奧秩父の山谷に在つた、親鳥の巢を飛び出して以來、既百年にも餘る、長い時を過したであらう。思へば、長生すると、種々な世の中の出來事を見なければならぬものだ。

俺はこの久しい年月の間、只、毎日々々、お喋りの小鳥共を相手にして、空の中を高く低く、又彼方、此方へと飛び廻つて遊び暮らした。時としては、地上に蠢々して居る動物共の頭の上に、突然白ろい糞を振りかけてやつては忽ち高舞し、年が年中、汚らしい土の上に許り住つて居る彼等を嘲笑つたこともあつたが、老ひ込んだ此の頃では、そんな惡戲な眞似も、空面白くない。

所が、彼等地上動物の中で、人間と云ふ高慢な種屬が居る、この高慢先生は自ら稱して萬物の靈長なんどと、大きな事を常に云つて居る。そして、その我慾を充實する爲めの只一つの利器——科學と云つて、萬能の神のやうに信仰して居る利器を、眞向から振り冠つて、自分達の生活區域を俺達の仲間が、天から授かつて居る、この虛空にまで擴めやうと焦燥し始めた。彼等は曾て、彼等の古るい歷史に於て、折に觸れては『飛んで行きたい』とか、『翼が欲しい』とか言ふ切實なる願望を漏して居た、又彼等の宗敎、哲學藝術に於て、絕對の力を得れば必ず自在に空界を翺翔することの可能を信じて居た。『天に昇る心地』と云ふ言語は彼等の間に既に熟んに使用されつゝあつた。そして、それが思ひ掛けない幸福が、數知れない程、後から後から、續々と彼等の肉體と精神を、柔かに包むとき、彼等はその心の快感を表現する言語として、使用して居るのであつた。それ程に、彼等人間共は、俺達が、自由自在に天空を飛び廻つて居るのを見て羨望して居るらしかつた。

然し、俺達、鳥族仲間では『人間何するものぞ、あまりと云へば、身の程知らぬ僭上の沙汰である。お前達が、如何に焦燥しても、如何に科學と云ふ利器を振り廻はしたとて、お前達の體の恰好が依然として、其儘である限りは、夢にならいざ知らず、決して決して、實現すると云ふことは、思ひも寄らぬことである。』と相變らず彼等の無謀を嘲笑して居たのであつた。

△

それは、俺が確かに三十代の血氣盛りの頃であつたと思ふ、人間共は紀元千八百四十二年と云つて居る、遠い海の彼處に、ヘンソンと云ふ膽玉の大きな、科學とやらの頭の勝れた奴が出て來て、始めて平面翼式の空飛ぶ機器を製作へた、次で、リリエンタル、とか、ベンバーム、とか、マキシム、とか云ふ人間共が、思ひ思ひの機器を工夫して、俺達を眞似ることの可能なることを、大に吹聽したものだから、無法者は續々と頭を擡げて來た。サントス・デユモント・ライト兄弟。ブレリオ。フアーマン。アントアネツト。カーチス等と云ふ人間の力で、見事俺達の世界を侵畧されてしまつた。其の內に、俺が棲息して居るこの日本の人間共も——模倣ことにかけては、人間共の間で殆んど天才だと稱せられて居る——後れ走せながらも、ボツボツ研究を始めた。

時は明治も終りに近い、四十四年の四月のことであつた。前年の暮頃から開拓し始めて、格納庫や、研究所を建てた、此處、武藏野の中央で、彼等は澤山の人間共を集めて、初めて、空を飛んだ。空を飛ぶ機器——人間共は飛行機と稱して居る——を俺は見た。其の朝、俺は、コンモリと茂つた森の塒で未だ靜つと翼を休めて居ると突然に小鳥共が、俄に騷ぎ立てゝ、俺を喚びに來た。何時見ても氣持ちの好い、丘から丘に、淡い霞が張つて居て、柔かい朝風は、俺が搏翼する度に、甜めるやうに俺の胸毛を顫動せしめた。俺は數多の小鳥共よりもいと速く、碧空の面に高々と舞ひ上つた。そして人間共の、空飛ぶ狀況を瞰下ろした。

其後と云ふものは、俺は殆んど、毎日のやうに彼等の飛行を瞰下して居る。此頃では彼等もだん〳〵巧妙になつて來たし、彼等の乘つて居る機器もなか〳〵良く出來て來たと見えて、俺達ちと競爭をよく演る、時としては、俺達が彼等に瞰下ろされることもある。又俺達の飛ぶ方法は大低彼等も見樣見做で、容易く演つてのけるやうになつた。風

が猛烈に強く吹いて、俺達のやうな翼の力強い者でさへ、塒に籠らなければならない時でも、彼等は平氣に、小憎らしい程沈着た態度で、ブーン、ブーン飛び廻つて居る。が然し、彼の飛び初め頃は、イヤハヤ誠に憐つぽい容子であつた。今から想ふと、全く隔世の感とやらを禁ずることが出來ない。

彼等が初めて飛んだ飛行機は、二種あつた。大きな主翼が上下二枚ある、フアルマン複葉と、ブレリオと云つて俺達の型を大きくしたやうな單葉であつた。彼等はその二つの飛行機を後生大事にして飛んで居たが、飛ぶ度に機體の何處かを、傷めない時は尠かつた。そして、風を怖れること非常なもので、彼等はよく――今でもだが――氣流が惡いとか、何とか、口癖のやうに云つて居た。であるから、幼稚な彼等が飛行する時刻は、明け方か、黄昏か、でなければ全く風の無い時に限られて居た。『惡氣流』だとか『突風』だとか云ふ彼等の常套語に、も一つ『發動機の故障』と云ふ言語があつた。而して、彼等は、この常套語を一切使用する必要のない時機が來れば、その時は將に、彼等の飛行機は、如何なる時に於ても、俺達のやうに、自在に空を飛び廻れるものだ、と信じて居る。或は、さうかも知れない。

△

軈て日數の重るにつれて、彼等の飛行機の數は一臺、一臺增加した。前のフアルマンに好く似た新しい型の飛行機も、飛ぶやうになつた。『德川式』と彼等は名を呼んで居た。乘る人間の頭數もそれと共に增ゑて來たけれども、秋の末頃から翌年の春頃までの間は、彼等の飛ぶ日は、極めて稀れであつた。機體を傷めたのを治療に費す日が多かつたのだ。治療する人間共も、現今のやうな進歩した者が居なかつたのと、治療の方法が下手であつた爲めであらう。

兎に角、彼等は、俺達が見て、止て仕舞へば好いのにと思ふやうな、幼稚な時を執念くして、二年を過した。彼等の熱心なる、漸く、俺達の仲間入りをするやうになつた。少しの風の吹く位いは、氣にしないやうになつた。そして、その飛ぶ領域も次第次第に擴めて行つて、遠く東京までも飛んで行つたこともある、そんな時には、又人間共は、無暗矢鱈に嬉がつたものだ。すると、飛ぶ方の人間共も、調子に乘つて、俺達が、獲物を掴む爲めとか敵を蹴落してやる場合によく演る眞似を始めた。『空中滑走』と彼等は稱して居る。その空中滑走を高い空の上から演つて、地上に降りる藝當を見せると、又もや人間共はヤンヤと喝采した。

彼等の怖れる常套語の『突風』は、間もなく、彼等を禍した。木村、德田、と云ふ二人の乘る人間は、例の如く東京まで飛んで行つて、澤山の人間共から、ヤンヤを浴せかけられた後、この武藏野の塒に近く歸つて來て、『突風』に翼をへし折られ、地上に墜ちて死んだ。人間共は益々熱心に飛行を研究するやうになつた。

『モーリス・フアルマン』と云ふ新らしい複葉飛行機と、『ニューポール』と云ふ單葉飛行機は、此の頃から、我が物顔して飛び廻るを見るやうになつた。又『飛行船』と云ふ大きな囊に五六名の人間共が乘つて其の間を悠々として飛び廻るやうになつた。澤田中尉、長澤中尉、と云ふ人間が乘つて居る飛行機は、ソロ〳〵俺達ちに、空で競爭を挑んで來た。俺は、種々な藝當を演じてやつて、彼等に示してやつた。然し彼等は無情である、俺のやうに、高い空を自在に飛べない、小鳥共は、好く彼等の、あの大きな體に衝突つて殺された。俺達の『突風』は彼等の飛行機と、彼等が地上から、擊ち當てる彈丸とであると、此頃では、小鳥共の仲間で怖れて居る。

彼等は新しい飛行機を燗んに工場を建てゝ製造するやうにもなつた、彼等は風の吹くことを、だん〳〵怖れないやうにもなつた。

△

彼等の飛行範圍は時の經つと共に又擴張された。彼等は又種々な藝當をも容易演るやうにもなつた。そうして彼等は遂に今日のやうに俺達を超えて此の武藏野の空界の支配者となつた。然し俺は未だ未だ、彼等に誇る可き、多くのものを持つて居る。彼等は飛び立つたり、又は翼を休めに降りたりするには、廣い廣い場所を、地上になければならない、俺は何處へでも勝手に降りることも出來れば又、何處からでも、彼等の如うに地上を長い間滑走せずとも飛び揚ることが出來る。彼等は又一度空中に飛び出すと、空中では同一の位置に一秒時間でも止つて居ることが出來ないけれど、俺は三十分でも一時間でも靜と同一の位置を保持して居る。そして今一つは、俺は一直線に高空に昇ることも出來るが、彼等はグル〳〵旋回しなければ、昇空することが出來ないではないか。これ丈けが、せめて俺達鳥族が彼等人間共を嘲笑ふ理由として永遠までも保持したいと思つて居る。

冒險小說

秘密の飛行艇

(Guy thorne)

仲木貞一譯

一の(一) 自動車のチャンピオン

私はオクスフオード大學第一年の夏の學期の終りの時に突然監獄に打込まれて、六ケ月の苦役に服する身となつた。

と斯う書き出すと、餘り事柄が突飛なので諸君は驚くかも知れないが、全英國を震駭させ、この大戰爭の運命を左右させる程の偉勳を樹てた私の經歷を話すには、是非共此處から話しを始めなければならないのだ。

私が十月の學期に入學しようと思つて、オクスフオードにやつて來たのは、丁度二十の年であつた。そしてその翌年の二十一歳は、人生の中でも一番華やかな年であると思つて、強い憧れを以つて待ち望んだのも仇な事、その年の半ば以上は暗い牢獄内で儚い月日を暮す事になつたのだ。友人の誰だつてこんな不幸に廻り逢つた者は無からう――私の若い蕾は將しく拐り取られて了つたのだ。

私はハロウで散々愉快な生涯を送つた後、二人の後見人に連れられて、オクスフオードの聖ポール大學に入る事になつた。その二人の後見人達はスコツトランドの法律家達であるが、私と何う云ふ關係の者であるかはついぞ知らなかつた。私の父親は外國で可なり大金を儲けたのだが、私が英國の小學校に通つてゐる十歳の時に西班牙で死んだ。で私には兄弟姉妹も何もないから、父の物は凡て相續するのだと云ふ事は後見人のバーンスやニコルソンにはよく解てゐた筈だ。で休日に友達の家に行た時等、若も私がエチンバラか或はグラスゴーに行うものなら、後見人達には甚だ困る事が出來するのだと云ふ事を聞かされた事があつた。

其所で私はオクスフオードにやられる事になつたのだ。そして一年の學資金は六千圓と云ふ一寸纏まつた金額だから、ポールのやうな小さい大學に居るには、これで充分にやつて行ける筈だつた――只何うも足りなかつた。

私の身體は鐵釘のやうに強くて、護謨輪のやうに丈夫であつたが、端艇だの、蹴球だの、クリツケツトだのは一切しなかつた。只初めから自動車競爭にだけ非常な興味を持つてゐた。一體私は極く激しい刺戟を與へる物で無れば興味を惹かなかつた。これは私自身に小さい年らも自動車を一臺所有してゐたからだらう。何しろブルツクランドでは可なり名の知れた自動車乘りに成つてゐたのだが、學校に來てからは、實際自分で競爭を行ふ機會は無つた。後見人達はよく私に競爭をやらしたり、殊に自動車で遠乘をさせたりしてくれたが、御蔭で可成りの費用が入つた。後見人達の思はぬ程金が掛つた。外にも入る事は中々あつたが、すん〳〵私の金は減て行た。私は金が入用になれば、金持の悴のやうに直ぐ送て貰へるので、學校に入てから半年程經た時には、餘り多くでもないが借金をするやうになつたで、後見人から送て來る筈の數千圓の金が中々やつて來ないので根性のけちなオクスフオード商人は、早速一人の書記をソマーレスト、ハウスに行て私の父親の遺言を調べて見ると、私の未だ知なかつた色々の事を聞て歸つて來た。

一の二 カイゼルの甥は厭やな奴

ポール大學第八週日の演奏會の晩、私は二三人の友達をブールの『鷄眼亭』で夕食を濟してから、大學に歸つて行つた。丸い大きな月が、世界中で一番美しい市街の上に掛つて、何とも云はれぬ美しい夏の夜であつた。私は歐洲大陸を悉く旅行した事がある。彼のアゼンスも知つてゐる。然しこの塔の街程美はしい町は何所にも無つた。

ポールに於ける第八週日の演奏會と云ふ者は、卒業式に行ふ舞踊に次いでの大事な物であつた。私は廊下を通る時若しや手紙が來て居はしないかと思つて、門番の部屋の前を見たが、ポールと云ふ四角い文字が高く點されてるのが見える計りで手紙は無つた砂礫道の上や芝生の上には、椅子や小卓子が一杯に列べてあつた。其の上には大きな日本の傘が天幕のやうに廣げてあつた。柔い電燈の光りは一面に輝いてゐた。窓の前に咲いてゐる花から發する香りは、明々と輝やく二階の窓から流れ出るヴアイオリンの音と調和するやうに見えた。その音樂は明かに校歌である。食事の既に濟んだ私は、今衣服を着換へやうとしてゐたのである。演奏會は九時十五分から始まるのだ。

私の部屋は、有名な禮拜堂のある泉の庭にあつた。その一階の美しい部屋の内には、色々な贅澤品が置き列べてあつた。實際私は學校の内で貴族的の生活をしてゐたのである。私の友達は皆私のやうに贅澤な趣味を持つてゐる若者達計りであつた。同じ一階の右隣りの部屋にはロツと云ふ

學生が宿つてゐた。彼は非常に富裕で、容貌が立派で私と同じやうに稍々淺黑い顏色をしてゐた。彼の父親はサー・エイテル・ロツと云つて、獨逸猶太種の大きな財政家であつた。そしてイートンに來て、其所へ半猶太的の經財的機關を立てて、自分がその首領となつた。だが私は個人的には此人と何等の交渉等も無つた。然しとに角その悴のロツは常に快活で私と同じやうにバリングトンの會員であつたから、彼は極く眞面目な人間に相違ないと思つた。その當時には確に然うだと思てゐた。其ロツの部屋の先の方は、我我雜兵の住む部屋とは違た、三間の部屋を占領してゐる豪い人達が住やうになつてゐた。で、私の三番目の部屋に住でゐる人は、獨逸皇帝の甥で、『殿下』と呼ばれる身分の人であつた。此プリンツ・フオン・ケルンと云ふ若者は、つい一週間前迄は、我々は少しも然う云ふ身分の者であるとは知なかつた。全く不可思議千萬な人物なのである。此者の事を語り出すには、丁度『アラビア夜話』を語り出すと同じ事だ。

私の左の部屋の第一號室は、丁度禮拜堂に隣り合つた四角の所になつてゐたが、其所にはイボル・アトリーと云ふ者が住んでゐた。彼はマンチエスター附近の大機械工場の社長サルフオード卿の第三子であつた。

このアトリーは又頗る不思議な人物であつた。脊が低くて、痩せこけて、其れでゐて擧動の活潑な、色の黑い、濃い黑い髮毛が低く額の上に垂れかゝつて、加之に濃い口髯を生やしてゐる男であつた。彼は吾々と同樣一年生でありながら、吾々よりも三歲位年上であつた。彼は非常に怜悧で、吾々に解らない本等を讀んでゐた。そして勝負事だの遊戲だのには決して手を出さなかつた。然し正直な所私は餘り此男を好かなかつた。只一點彼と近附きにさせた事があつた。それは兩方の自動車に關する智識が同じであつたからである。其他の點では全く二人は沒交渉であつた。

私は話の都合上、ザツと私の近所に住む學生達の事を述べたのだ。

扨て私は自分の部屋に入て來て、電燈を點した。そして衣服を着換ながら、私は戸の外に留守の印しを出さうとした。と云のは、之から何か一人で考へ事をしやうと思たからだ。其所へアトリーが突然入て來た。彼は何時のやうに、ノーフオーク形の上衣に、フランネルのズボンを穿いてゐたが、それは此所にゐる學生の通常着である。で、私は彼が演奏會へ行く前の早夜食を未だ食てゐない事に氣が附いた。

彼は卓子の上の銀の箱から卷煙草を取出して吸つた。

『君は演奏會へ行かないのかね？』と聞くと、

彼は頭を振つて『音樂は大嫌ひだ、其れから大學科長の

妻君達だの、種々の人間の妹だの從姉妹だの、叔母だのつて奴は皆大嫌ひだ。僕は第一仕事があるもの』と彼は答へた。

『然うかね、然し僕はこれから着物を着換へなければならん』と云つて、暫く默つてゐた。

このアトリーは決して煙草計りで我慢をする男ではない時折食堂に赴いて葡萄酒を飲む事は知つてゐたが、餘り親しい間柄ではないものだから、私はその儘にしておいた。

彼は鳥が點頭くやうな格合に首を妙に振つて、

『君が着物を着換へる間、君の寢室に入つても可いかえ？僕は君に少し用があるのだ』と彼は云つた。

『あゝ、可いとも。然し君は未だ晩飯を食はないんじやないかね？』と聞くと、

『いや、最う自分の部屋で濟ました』と答へた。

私は着物を着換へ始めると、此の色の黑い小男は、側で凝つと私の樣子を見詰めてゐた。一體この男は斯うしてゐて何うするのだらうと私は心の中で思つた。彼がサルフオード卿の息子の中でも一番怜悧な子だと云ふ事は能く知つてゐた。それだから私は、彼に細かく見詰てゐられるのを敢て腹立しいとも思はなかつた。私は自分で智識が足ないだけ、それだけ、人の智力には非常な尊敬を拂ふのである。

『ロウアン君、あの男はランドルフの役人の家で、サー・チヨージ・マツクアーサと一所に飯を食つてゐるのだよ。とに角彼等は貴族なんだからな』と彼は云つた。

私はその時チヨツキに附ける立涙な釦を探してゐたのだが、その手をはたと止めて了つた。

『然うかい！』と漸く私は云つた。

實は私はイダ・マツクアーサ嬢に對して戀慕してゐたのである。それであるから、最前著物を著換へる間、たつた一人になつて、最う一時間經てば、この戀しい人と演奏會で逢へるなと云ふ事をしみ〳〵考へて見やうと思つたのであつた。彼女は演奏の合間に、私と一所に水菓子を食べやうと約束したのであつた。

『ねえ、ロウアン君、僕の親父がランカスシヤアイヤーの技師で、サー・ジヨージが又タインサイドの技師だつて云ふのは、不思議な事じやないかね』

この時漸く私は心が落附いたのだが、今迄彼が私の心に探りを入れてゐると云ふ事を少しも氣が附かなかつた。其所で私は短刀直入に質問した方が可いと考へた。

『ね、アトリー君、君は僕より年長者だから、僕に違曲な注意をしてくれたが、然し僕と君とは然う親密でない迄も、とに角一通りの友人なのだから、その事を最つと明かに云つてくれ給へな』

私の聲の調子は、稍々つつけんどんであつた。それは顏が幾分赤くなつたので、それを彼に見られまいとしたからだ。然し彼は笑ひもしなければ身動きもしないで、凝つと前と同じやうな眼附きをして冷靜に私の顏を見詰めてゐた然しその冷酷なやうな顏附の中にも、何所か友情の仄めきが見えてゐた――私は今迄アトリーから、友情を受けやう等とは全く豫期してゐなかつた。

彼は極く落附いた調子で、『君は僕にその事を最つと訊きたいと思ふかね？　それとも、君は僕を窓から放り出すかね？　若し僕に悉しく訊きたいと思ふなら、僕はイダ・マツクアーサー嬢の事をすつかり話すし、若し僕を放り出すなら、僕は君の三分の一も力が無いんだから、僕は君のされる儘になるより仕方がないよ』

『何を失敬な事を云ふのだ？』と思はず聲を高めると、彼は膝に載せてゐた長い褐色の手を上に揚げた。見るとその甲の所には、黑い毛が一杯に生えてゐて、それが宛で生きてゐるやうに見えた。私は思はず、聲を落して了つた。

そして彼は前に身體をのし出したが、其時不思議にも、今迄少しも氣が附かなかつた彼の眼の內からは正直な親切な光りが現はれ、又黑い髯の下には優しい微笑がこぼれ出たので、私はその儘衣服机の側の椅子に腰を下して、躊躇もせず『さあ、早くあの女の事を語り給へ』と斯う叫んだ。

『ね、「火花君」君がマツクアーサー嬢に戀慕してゐる事は能く知つてゐるよ。だから、僕は君に出來るだけ援助したいと思つてゐるのだ。僕は君が思つてゐるよりも君が大好きなんだからね』と斯う語つた。

私は彼が「火花君」と云ふ渾名で私を呼びかけたので、少なからず面食つた。實際私の仲間の者は私のジヨン・グレゴル・ロウアンと云ふ本名を呼ばずに、多くは「火花君」と呼んだ。と云ふのは、私はオツクスフオードの或る自動車屋の主人と、火花の點火機の事で議論をして、とう〳〵其奴の口の內にその點火機を差込んで、危ふく警察に引張られる所を二百圓出して內濟に濟して貰つた事があつたので、爾來皆は私の事を『火花君』と云ふのであつた。

『どうも、親切に難有う。然し何だか女學生の云ひさうな文句を君は云ふね？』と私は答へた。

彼は笑つて、『そりや然うだよ。何しろ君と僕とは、未だそんなに親しくないんだからね。だが、まあ、僕の語る事を聞いてゐたまへ』

私は彼の云ふ事を聞く事にした。然うすると、段々驚く可き事が解つて來た。

『アトリー君、僕は實際彼女に戀慕してゐるよ。極く理想

的に、極く……』と云ひかけると、

彼は再び手を上げて、『僕はあの女を能く知つてゐる。最う何も云はんでも可い。能く解つてゐるよ。僕は君があの女と約束をして、結婚するのを望んでゐるのだ』と斯う簡單に云つて了つた。

『然し、そりや……』

『いや、僕が何れよく話す。今日は何も云はない。只今夜僕は君に萬事に氣を附けて、名譽を傷けるやうな事のないやうにと、その注意をしにだけ來たのだよ』

『然し君、あの女が僕に少しでも注意してると云ふ事は、全く解らん事だからね。僕は一體苦勞性なのだよ。だが、又時には、あの婦人が僕を思てゝくれはしないかと思ふ事があるのだよ。とに角僕は今夜それを試て見る。若し其機會が無つたら、來週の夜會にそれを確めて見る。あの婦人の事で知てる事があるなら、何卒皆語てくれ給へな』と斯う云つた

『今君の一番の競爭者はケルンだらう？』

私は點頭いた。實際この獨逸の王子と私とは稍々面白くない關係になつて來てゐるのだ。彼奴はイダ嬢の機嫌を取つてゐるし、女の方も王子の氣嫌を取つてゐるやうだ。娘と云ふ者は皆斯うなんだらうね。だが、僕の見る所では只それだけのやうだ。殊に君も知つてゐるだらうが、彼奴は皇族の身分だ。とても平民の娘とは結婚が出來ないからね』

『何、出來るとも！　彼の男は王子の身分を斷はつたのだ。最う餘程前の事だ。カイゼルはそれを不承知だつたさうだが、彼の男はやつつけて了つたのだ。君はこれから大急ぎで競爭をしなければならんよ。僕は君にこの事を云ひに來たのだ。さあ、君はチヨツキにその美しい藍玉の釦を嵌め給へ。そしてうまくやつて來給へよ！』

彼は腰を下してゐた寢臺の上から立上つて、私に挨拶をして出て行つた。この時私はふと思ひ出した事がある。それは彼が今直一度も學校と云ふ物に通つた事がない事である。彼は兄弟達と一所に、イートンの學校に行く事を拒んだ。そして、父親の工場に入つて、十五の年から職工になつて、大砲や軍艦の製造に計り從事してゐた。そして機械學には全然精通して、とう〳〵オクスフオード大學に入る迄になつた。彼の人となりは之でも能く解るわけだ。然し私は最と彼に引附けられた物があると思た。それは譬令ひ彼の今迄の方法が形式と云ふ者には缺げてゐるかも知れないが、確に彼は人格の人であり力の人であると云ふ事だ。

私はその當時學校や大學の形式が非常く嫌ひになつてゐた。その證據には私はその頃の約半年の間と云ふものは、ちつとも苦しんで勉强をすると云ふ事が無かつた。（つゞく）

（國民飛行）

ミンバラ式單葉模型

全長――三十吋
翼長――九吋
翼幅――六吋
尾翼――長さ六吋、幅二吋

（號　A）

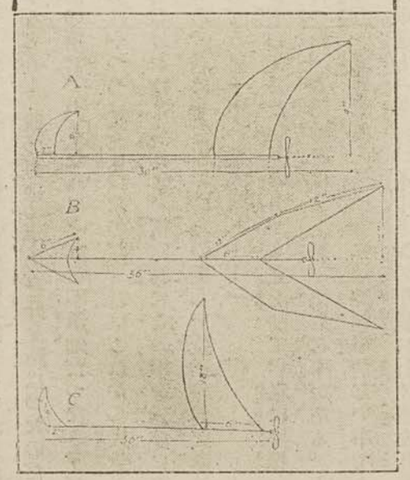
全長――三十六吋
主翼――長さ十二吋、幅六吋
尾翼――長さ四吋、幅六吋

（號　B）

全長――三十吋
主翼――長さ十八吋、幅六吋
尾翼――長さ六吋、幅二吋

（號　C）

ミンバラ式單葉



ブレイ式複葉模型

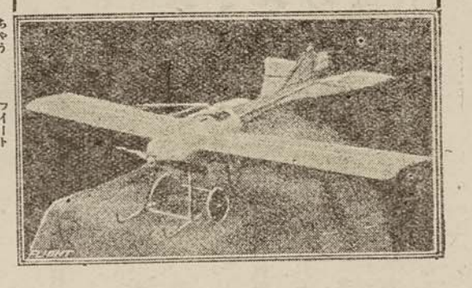
（模型飛行機）

螺進機――全長十吋、進節十五吋
護謨――一吋の四分の一の物四本宛三本（千二百廻轉で二十五秒間に五十碼を飛行す）

機體――一吋の三十二分の一の厚さのアルミニユムで掩ふ

全長――二呎六吋
全重量――四分の三封度
翼幅――七吋
翼長――三呎

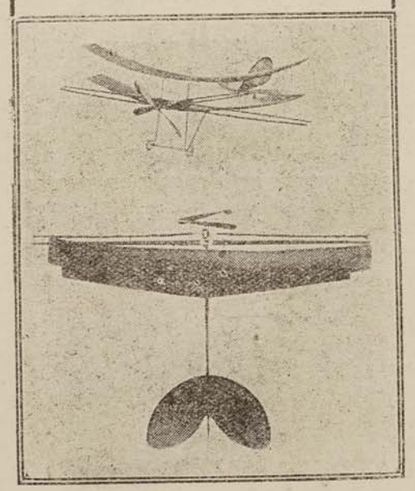
ブマ式單葉



ブマ式單葉模型

上翼――長さ四十八吋、中央の幅六吋、末端の幅三吋四分の一（一、五五平方呎）
下翼――長さ四十一吋、幅は上翼に同じ（一、三二平方呎）
翼間距離――三吋
尾翼――一、二六平方呎
全重量――護謨を除きて十二オンス
護謨――一吋の十二分の一の物十二本一對、重量二オンス四分の一
螺進機――十一吋（二個を重ね合はせておき、主翼下方に張渡せる棒に附せる護謨の廻轉を一個は受ける）

ブレイ式複葉



母のスミス

アートスミスは確に稀代の大天才であります。彼が今日の大飛行家となつたのは、彼自身の素質に據る處大にありますが、彼をして――やつと十五歳の少年をして――自由に飛行機の研究をさせた彼の兩親、殊にその母親の苦心が全く彼を今日の大飛行家たらしめたのだと云ふ事が出來ます。この大事な兩親に對してアート・スミスは出來る丈の孝行を盡してゐます。其れだから彼は孝行飛行家として尙一層世間から評判されてゐるのです。

ブルドツクの仇名

アート・スミスが丁度十五歳の夏、母親と親友のアルと少女のエミーとは、その鄕里のインデイアナ州のフオート・ウエーンから程遠からぬジエームス・レークへ、二週間計りの天幕旅行に出かけた事があつた。

天幕はその美しい湖の側に張られる事になつた。或日の夕暮方に少女のエミーとアートとは、端艇に乘つて湖水の眞中に漕ぎ出した。そしてアートは船底に仰のけになつて暮れ行く空を眺めて居ると其所に一羽のノスリ(角鷹)が飛んで來た。翼を充分にした儘、悠々と空中に輪を描いてゐる。アートにはそれが不思議に思はれて仕方がない。ふと近頃ライト兄弟が飛行機と云ふ物を發明したと云ふ事を新聞で見た事を思ひ出して、ノスリの羽と飛行機とが何うも關係があるやうに思へて仕方が無くなつた。

其所でアートはエミーに向つて、

『僕は何うかして、あの鳥のやうに空を自由に飛び廻はる機械を作りたいと思ふのだよ。』

と云ふと、豫てアートが何事にも熱心で、必と物事を成し遂げる事を知つてるので、

『えゝ、貴方がおやりなさる事なら、必と立派に出來てよ。』

と苦もなく相槌を打つてくれた。

アートはこれで全然飛行機研究の決心を樹てゝ、早くフオート・ウエーンの自宅に歸るのが待遠しくなつた。彼は家に歸るや、早速飛行機に關する事の雜誌を集めて、研究を始めた。彼は豫て仲間の友達からブルドツクと仇名されてゐた程の、物事に熱心な頑固な小供であつたから、今飛行機の研究を始めるや、その熱心な事一通りでない。で色々な雜誌から智識を借りて、漸く一個の飛行機を建造するもくろみが頭の中に出來た。彼は兩親に何時この事を打ち明けようかと、その日の來るのを待つてゐたのである。

父親は土木請負を業としてゐた。十七年間汗みづくになつて働いた御蔭で漸く一かどの請負師にはなれたが、未だ大工をしてゐた時に、餘り激しく働いた爲めに日射病に罹つて、最うこの頃では目が餘程見えなくなつてゐた。その爲めに仕事は段々無くなつて今では家だけが凡ての財産となつた始末である。それが爲めにアートは十四の年から學校を退かされて、或建築師の所に、一週五弗で小僧にやられてゐたのである。

岩よりも堅き決心

アートは飛行機さへ出來れば、當時懸賞金として發表されてゐた、シエブラー賞金、亞米利加科學世界社の賞金等十萬弗計りの大金が皆自分の懷ろに入る如く思はれた。アートはこの内二三百弗出して父親の眼病を是非治して上げたいと思つてゐた。

或日夕食を濟ますと父親は何時ものやうに、手帳と鉛筆を出して、アートに仕事の相談をし始めた。目の薄くなつた父親は、斯うして伜に字を書いて貰ふのである。その時アートは突然、

『お父さん、私は飛行家になりたいと思ひます』と云つた。

父親は非常に驚いた。心の内に爆烈彈を投げ込まれたや

うに驚いた。然し平面は熟と平靜な顏附をして、伴の說明するのを待つてゐた。アートはライト兄弟のことや、雜誌に出てゐた飛行に關する學理の事等を話してゐると、其所の臺所を片附け終つた母親はさつさと入つて來て、何時ものやうに繕い物を始めた。

父親はその時やをら、

『アートは飛行家になりたいとよ』と云つた。

『まあ、飛行家に？　そんな危い仕事を！』と母親は只あつけに取られてゐた。アートの外に三人の子供があつたけれども、それが皆夭死した事を考へると、母親が一寸喫驚たのは道理である。

アートは一生懸命飛行機の少しも危い物でない事を說明した。

父親はその飛行機はいくら位で出來るかと聞いた。

『千七百六十弗程かゝります。然しこの家を抵當に入れたら、その位の金は出來はしないかと……』

アートが此所迄云ひかけた時に、父親の頰の肉はピクリと動いた。全くの所この家は天上天下スミス一家に取つては今日の場合全財產なのである。然し父親は、

『うむ、然うすれば出來るだらう。』

父親が斯う云つた心の內には、自分が一生碌々としてつまらない生涯を終つたから、せめて伴のアートをして一廉の立派な人間にさせたい。それには今アートが飛行機と云ふ、まだ世間では多く手を附けない新しい物の研究を始めたがつてゐるから、ことに依つたら、此れをやらせたら、アートは天下に名をなす程成功するかも知れない。と斯う父親は考へたのである。

母親にも早速父親は相談した。母親は只默つて心配さうな顏をしてゐた。

アートはその後十二吋計りの模型を作つて、これを兩親の目の前で飛ばして見せると、美事に飛揚した。然し其れを外に持出して、試驗をして見ると、高く上つた後物干綱に當つて、バラ〳〵に破れて了つた。更に第二の模型を作り始めた。その時のは父親も側から手傳つてくれた。

或夕方、父親はとう〳〵『この家を御前の研究の爲めに抵當に入れるから、何卒立派な飛行機を作つてくれ。』と母親の肩につかまりながら云つた。

此母にして此の子あり

アートは父親の手から千八百弗の小切手を渡された時には、全く夢ではないかと驚いた。そして彼の全身には力と勇氣とが强く漲るのを覺えた。それと同時に、この金を十倍にしても兩親に返さなければならないと思つた。

翌日から今迄務めに出てゐた所を廢して、友人達が冷嘲するのも省みずに、小舍の內に入つて切々と飛行機の組立てに從事した。只一人の友人アルは仕事の合間には屹度手傳ひに來てくれた。父親は又薄くなつた目で紙鑢を手さぐりで木材に掛けてくれた。母親は又ミシンを持つて來て、翼布を縫つてくれた。又火の氣のない小舍の內で、一生懸命翼の骨を削つてゐると、其處へ母親は暖い物を煮て持つて來てくれた。その度びにアートは是非共成功しなければならんと思つた。

母親は一體男優りのきかん氣のさつぱりした氣象の女であつた。其れと同時に頗る神經質で、一旦斯うと決心したら、容易に所信をまげない貴い氣質を持つてゐた。アートはこの母親の氣質をそつくり受繼いだのであつた。母親は又自分の手一つで家の內外を綺麗に手入れしたり、仕事を皆片附けて了ふ外に、敎會の仕事迄引受けて、婦人扶助會の會長の位置に座つて、寺の敷物の買入れから、坊さんの給料迄、皆自分の手一つでさつさとやつてのけてゐた。

伴が飛行家に成らうと最初言つた時こそ、母親は少し驚いたが、飛行は決して危い事でなく、又決して不可能の事でないと知つてからは、少しもそれを止立てするやうな事は云はず、却つて一日も早くアートの仕事が完成して、空を自由に飛び廻はる事を希つたのである。斯くて日となく夜となく、アートの仕事の進むやうに手傳ひ、又目のつぶれて行く父親の心を勵ますやうに心を配つたのである。

湖水の上の鳥のやうに、空を自由に飛びたいと云ふアートの望は、漸く三ヶ月後に達せられる事になつた。彼は首尾克く空中の人となる事が出來たが、着陸に際して、地上に衝突して、機體は滅茶〳〵に壞はし、自分も亦氣絕したが、親切な兩親はこれをいたはり助けて、又第二の飛行機を作らせるやうにした。

然し第二の飛行機も亦大破損を被る事になつた。この時には最早スミス一家の城とも寶とも賴りにしてゐた家は人手に取られて、兩親は小舍住みの儚い身の上となつた。

然し健氣な母親は決して愚痴等をこぼさない。病人の父親をいたはりつゝ、アートの仕事が何卒成就するやうにと、一生懸命に勵ましてゐたのである。若しこの母親が無かつたら、アートはとくに飛行家になる事を中止して了つたかもしれない。

斯くてアートは度々作り換へた飛行飛を携へて諸方を飛び廻はつて、とに角一廉の飛行家としてフオート・ウエーンに歸つて來た時、第一番に同乘させたのは、實にこの母親であつた。伴の作つた飛行機に乘つて村人等の上を高く昇つて行つた時、母親の心は何んなにか嬉しい血汐の浪で一杯になつてゐたらうか？

古來偉人は皆母親が作つた者であると云ふアート・スミスにしても其通り、此母にしてこの子ありと云ふ事が出來るのである。母親も亦伴を立派な者に仕立てこそ、初めて母親としての價値が現はれて來るのである。

古い女と飛行機

—子ねい丹—

■ダイナマイトの指環を

『一寸御嬢さん、御覽遊せ、蓄音機が飛んでまゐりました』

と頓狂な聲を出して飛行機の飛來を告げる隣の奥さんを笑ふ事の出來ない私の宅の古さ加減……或る夜父が劇場見物に行つて歸つて來て、

『己は西洋といふ國は大嫌である。實に怪からん國である。女は半裸體になつて公開席へ出て、人前も憚らず男の手を取て穢はしい行動をする。此樣に非常識な國であるから、チヨゴマと云ふ惡漢も居れば、ベロサと云ふ淫婦も居る』

『否、それはチゴマとサロメの事でせう』

『大した違ひは無いさ』

と話す父に退けを取らぬ母の新らしさ加減。

『先程パノラマの帽子を被つてダイナマイトの指環を穿た役者みたいな方が尋ねられたよ。何でも小説やさんだとさ』

眞面目で話すから大笑ひをした事がありました。此の樣な喜劇はよく演じられます』

■私の周圍——マクダ式

扨て私の周圍は權現樣時代の所謂因襲的空氣に包れて居ますので、私は歐米の書籍を讀み、洋樂を彈奏し、其上多くの男女と自由に交際を致しますから、家風とは全然調和せず、それが爲常に、暗鬪、衝突、不平の絶間なく恰度マグタ式の生活をして居ます。私は何故水平線から脱した女になつたであらうかと、自分ながら奇蹟のやうに感じますが、これも時代の潮流が強い力で私を引き付けたのであります。

■天の羽衣を身に纏ふて……

處で私は二月十一日ニコ〳〵倶樂部主催のもとに阪本飛行家が婦人を同乘させた帝都訪問飛行を爲さるとの事を松永ニコ〳〵主事より承りました。

豫てより、飛行機に憧憬と歴史とを持て居る私は、此好期を利用して是非乘り度と早速松永氏に願ました處快よく許可して下さいました。其時の嬉しさは天の羽衣を身に纏て遠く月の世界へ行たやうな心地になりました。併し宅の者には此事を絶對に秘密に致て置ました。ですが都下の新聞

紙は當然之を素破抜ましたものですから、遂に露顯に及び、父は怒り、母は泣て私の袖に縋て同乘中止を勸告する段となり、宛然地球が破滅する報知でも聞たやうに家内中大騒動となりました。けれども私は此麼事にもならうとちやん、と豫想して居ましたから、飛行當日は午後代々木練兵場へ行て乘せて戴く積りでしたが、不幸にして阪本氏は墜落なされ、折角の企も殘念ながら水泡に歸したので厶いました。

其の夜母は夕刊を示して、

『私の云つた通り落ちたではありませんか。だから飛行機なぞ鳥の眞似をして空を飛ぶ魔物みたいなものに乘つてはいけませんと云ふのですよ。今日若し乘つて御覽なさい、今頃はお前の死體の前で私は狂人のやうになつて泣て居たでせう。意地張のお前の事だから乘らないとも限りませんからね……、宅の屋根の上でも飛んで來らば私は大風呂敷を持て後から救ひ受ようと思つて居たのでした。是も日頃信心して居る佛樣の御かげです、南無阿彌陀佛〳〵〳〵』

と六字の唱名を稱て、はら〳〵涙を流して居たものです。母の慈愛に對して何と感謝して宜いやら、私は暫くは無言の儘俯いて居りましたが、そゞろ涙が禁じ難う御座いました。

■昔ならいざ知らず

私は此の時思ひました。

日本婦人に限らず、婦人は總て感情が強過ます。而も昔ならいざ知ず、文明が進歩した現代に生た婦人は、近松巢林子が描いた德川時代の婦人のやうに感情にばかり生ず、もつと理性を發達させ智解力を十分持たねばなりませんと。

今迄の婦人は男子に『弱き者よ汝の名は女なり』と云はれてそれを甘じて受け、男子に絶對的に服從をして、一生高等下婢と娼婦の眞似をして無意味に暮して仕舞ふ事は、如何にも女性として愚の極ではありませんか婦人が此の現象になるのは、男子より智識と研究心と理性とが足りないからであります。

ですから今迄眠つて居た日本婦人達は、一刻も早く覺醒し、努力して智識を得なければなりません。

男子は弱い者〳〵と輕蔑致ますが、さう冷笑したものでは無く、婦人はある方面では男子より偉大な勢力があります。賢明な婦人等が澤山出て十分に男子を後援し活動したならば、文明は更に大なる速力を以て急進するに相違ありません。爾するのが私等現代婦人の義務ではありますいか。

私の母が飛行機に對して智識があつたならば、あの際彼の如き悲劇(?)も起らずに濟むだでせうに……とは謂ふものの親の情愛から來る所のものに對しては、理論で解決の出來難い場合もあります。

ノートのノート

國分邦彦

■紀元節のお芽出度い日に、「女」を飛行機に乘せて、帝都の天空を自由自在に翔り、而も上から景品券を撒くといふ企てが發表されたとき、世人は好奇の眼を瞠だて丶、興味深く此事を迎へると共に、幾多の世評が湧いて、到る所の話題となつて居たやうである。中には猛烈な酷評を浴びせた人もあつたやうに記憶する。女は女らしい事をやれ、其麼跳ねっ返りの事をするよりも未だ他にする事が澤山あるではないか。日本の女の美點を損ね、婦人の天職を忘れて途方も無い興味に走るといふ事は決して褒めた話ではない。而も同乘婦人の顔觸れを見、其來歷や動機を聞けば、人の廣告の代になつてもやるが併せて自分の廣告をも遂げやうといふ以外に何者をも見出す事が出來ない。要するに假令生命を棄てゝも、虛榮心を滿足させたいといふより何者も無いではないか、實に愚かの極みである。と極言した人すらあつた。

■何か一つ、在來の因襲に背き、慣例に悖つた事柄を行ふ人があれば、必らず其所に、贊否の世論が囂然と湧き起つて、批難、中傷、煽動、其他種麼事をする人が出來て來るものであると、先哲が殘て敎へて吳れたから、此種の事に反對した方々に對しても、私共は立場や主義を異にして居るだけに、強ち、一概に愚論であるとか、餘りに理解が無さ過ぎるとか言ひ度くはない、けれども暫く理屈を抜きにして是非一般の人々に考へて戴き度いのは、我國の航空界が、實に貧弱極まるもので、一朝事のある際には、地段駄履んで口惜しがつても、尙及ばない、憐れむべき現狀に於てあるといふ事である。陸海軍の航空隊は多少の發達を齎らして居るが、之れとて、歐洲の大戰上に馳驅して居る各國の夫れに比べては、到底比較になつたものぢやない、殊に我民間飛行界に至つては全くゼロと言つても好い程の有樣だ、新聞に雜誌に活動寫眞に、彼國の實際を窺つて見れば好い、最早議論をして居るなその餘地はないのだ、事實上一時も早く我航空界を發展せしめねば、何時我國に一大危難が降り掛つて來るか解らないのである。

■假にツエツペリン飛行船が我東京の天空に襲來して、猛烈な爆彈を投下したらどうするか、夢だ、空想だと嘲つては可けない、今日の趨勢を以てすれば、必らず實現される事と思はれるのだ、現在より速力をもつと快速にし積載力、航續力を豐富にすれば、何の事はない、實に容易に行はれる事なのである。其時に之れに好く拮抗し得る、航空機が果して我國にあるだらうか、

何千米突の高空に命中の効力を有する航空機射擊砲が我國に存在するであらうか、射擊砲の事は、門外漢である我れ等には判らないけれども、航空機の方は確かに無いと斷言するに憚らぬ、尠くも現在の狀勢から推測すれば、二三年先になつても覺束ない、斯う想へば我國民たるもの、殊に大和魂の所有者たる者が、安閑として居られたものぢやない、で、多少此間の消息を諒解して、偉大なる恐怖を抱いて居るものは、蹶起して斯界の發展を促すに努めて居る、諸種の方面から、口に筆に、一生懸命になつて奔走して居る、が、未だ國民の自覺を得る程度には達しては居ないのだ、未だ世界の注意を充分惹き付け得る迄には餘程遠遠なのである。此麼大問題を、獨り、財政の乏しい政府にのみ委せて置いては、とても滿足な解決を得られはしない、故に先覺者は一層輿論の喚起に努めねばならぬ。

■此意味に於て、假令廣告的であつても、眞に國家を想ふといふ念慮から「女」を乘せて飛行するといふ事は、世人の心を惹き付け得られる手段の一つとして、誠に面白い、有益な企てと思はれるのである、古い文句だが「日の本は岩戸神樂の始めより女ならでは……」兎角、女が飛び出すと奇妙に人氣が集まる、殊に武骨な所に女が一枚混ると一入人氣澤山の景氣を作る、更に夫れが美人であれば一層妙だ、若し女の飛行家でも出來れば、其人の周圍は、男の飛行家よりも、より以上見物人の山を築くであらう、故に女が同乘した飛行機とか「女」の操縱する飛行機が、青い空の下を縱横に快翔するといふ事があれば、飛行將校が所澤から大阪に、或は弘前に高田に、道濱から伊勢灣に、又十時間連續飛行を行つたといふ事よりも遙かに深刻に飛行といふ觀念を一般に與へるに違ひないと思ふ。併し婦人同乘飛行の計畫も、阪本君の飛行機が大破した事に依つて、全然頓挫して了つたが、願くば、廣告利用の商店なぞが優秀な技倆を有し、健全なる飛行機や發動機を有つてる飛行家に依囑して今後續々此種の企てを行つて貰い度いと思ふ、然らば貧乏な民間飛行家も、其報酬に依つて、更に幾分かの活躍を試みる事が出來るかも知れない。

◎

■深さの知れぬ蒼い空の上に、眞綿のやうな白雲が薄く刷かれて、麗かな陽光が長閑に充ちて居る、春の一日であつた、社會の上流に動がぬ地位を占めて居る或紳士と私は、不圖東京停車場の待合室で出逢つた、紳士は私の伯父の親友で、幼い時から私に眼を掛けて吳れる人である、話は簡單に種々の道を辿つて、飛行界の事に纏れて來た、人を見送る前の數分間、

「日本の飛行界も振はないね、殊に民間が」

「えゝ、あなたのやうな方が力を入れて下さらないからでせう」

「私なんかが力を入れても入れなくつても大した支障はありやしない、併し兎角世の中は、どんな立派な國家的の仕事でも、力を入れなければならぬやうに仕向ける勝立が出來て居ないと、好く行くものぢやないやうだ、民間飛行界の不振といふ事も、矢張此邊に原因が潛んでゐやしないかね」

「或はそうかも知れません。が、未だ痛切に飛行機なり飛行船が一朝事ある際に、恐ろしい力を持つて居るものだといふ事を、一般に理解して居ない爲めもあるんでしやう、歐洲戰爭に於ける航空機の活躍も、威力も、新聞雜誌

或は活動寫眞等で、好く知つて居ても、あれは外國の事だ、位で、對岸の火事を見て居るやうな心持で居ませうからね、畢竟、足許から鳥がたつ、といふやうな事に際會しなければ、我國民には飛行界を進展させなければならぬといふ事が判らないんでしやうよ」

「それは君等のやうに、斯界に關係を有つて居る側の言ひ分で、普通の人の考へは、其處迄に進んで居やしない。好く事が判つて居る人は、未來の事を或程度迄像測する事が出來るが、先を知るにも其方面の智識の無い人、假令、飛行機の飛んで居るのを見て、あゝ面白い、あゝ壯快だ、といふ丈けで、今見て居る其飛行機が、大事の際にどれ程、戰場で活躍が出來るかといふ事を想ひ及ぼす丈の智識を有つて居ない人なれば、いくら君達が口惜しがつても力んでも徒勞な事に終つて了ふんだ、人間といふ者は立場が、違へば見方も違ふし、考へ方も違ふ、だから飛行機なら飛行機といふ者に對する先覺者が、熱心に忠實に、異つた立場にある人を、自分等の立場に足を入れるやう、努力しなければ可けない、此意味に於て此頃飛行會を組織した某中將の熱心は全く感心に堪えないよ、彼の人は自分で知人を說得に廻つて居ると云ふぢやないか」

■折柄見送られる人が美々しい粧をして、多くの人と此室に入つて來たので話は途切れた、「飛行界に關係ない人の方が、反へつて其進展策を知つて居るんぢやなからうか」といふ感念が、湧然と其時の私の腦裏に憂つた。汽車が今西に走つて行かふとする刹那に於て……

姉妹飛行家

右が姉左が妹（飛行機はライトイ式複葉）

米國には一昨年頃から各地に飛行をして居る姉妹飛行家が有る。姉はカザリン・ステンリンと云ひて今年廿一歳、妹はマージヨリー・シー・スチリンと呼び、十九歳の美人である。兩人共ライト式複葉の操縱者であつて姉は宙返り飛行も出來るとかで大變な評判だ。今年の五、六月頃には日本へやつて來ると云ふ噂がある。

戲曲 空中の悲劇（一幕）（下）

仲木貞一

――創刊號の續き――

妻。（三十二三歳の病上りの弱つた樣子）貴方、二時を打ちましたから、お仕度をなさつては如何ですか？

マシウイチ。あ、然う思つた所だ……（立上つて妻の顏を見入り）お前は最うすつかり好いのか？

妻。えゝ最うすつかりよくなりました。貴方さえ許して下されば、今日にも貴方と御一所に飛行機に乘つて見たいと思つております。

マシウイチ。途方もない事を病後の身體で、そんな危險な事が出來るものか。己のやうな丈夫な者でも、斯うして毎日乘つてゐると、神經が段々衰弱して行く。殊に今の飛行機は、頗る安定が惡いから、風の强い日には中々骨が折れるのだ。

妻。道理で、この頃貴方の御顏色は好くないと思ひました。その外に未だ何か御心配がありやしませんか？

マシウイチ。心配？　そんな物は藥にしたくもない。只、今設計してゐる飛行機を早く空に飛ばして見たいとそれ許り心に思つてゐるのだ。

妻。その飛行機と云へば、今日アリウシヤは、あの飛行機の模型で一等を取つて來ました。

マシウイチ。あゝ然うだ。あの型なら安定が好いから、風等には平氣なのだ。

妻。早く、その安定の好い飛行機が出來て、二人で一所に乘つて見たう御座いますわね。

マシウイチ。何れ乘るよ。譬令己が死んでも、お前一人で是非完成して貰ひたいものだ……（次の間に行きかける）

妻。貴方、先刻此所にゐらしつた方は、ペトロウイチさんじやありませんか？

マシウイチ。（振返つて）あゝ然うだ。それが何うした？

妻。あの方はテロリストじやありませんか？　あの危險な。

マシウイチ。馬鹿！　あの男がテロリスト等で堪るものか己の小供の時からの友達じやないか……（妻を睨す）

妻。でも、世間では、皆然う云つてゐますよ。最も危險な

思想を抱いてゐる人達だつて……（夫の後を追つて入る）

（入違ひに小供と叔母と下僕とが別の口から登場）

小供。お祖母さん、僕今日はお父さんと一所に飛行機に乗つても可いでせう。お祖母さんからお父さんに然う云つて下さいよ。

叔母。未だ、何うして、お前が本との飛行機に乗れるものかね。高い所へ飛んで上るのだから、お前等は目が廻はつて了ふよ。お父さんのやうに大きくなつたら、澤山御乗んなさい。

小供。だつて、今日はお父さんは、高く上るんだつて、皆が然う云つてるんだがなあ。

叔母。だから、尙危ないのだよ。小供の内にはよく見てゐて、そして大きくなつてから上手に乗るのです。

小供。けれども、つまらないなあ、毎日見てゐるだけじや。

下僕。お坊ちやん、直きにお乗りなさるやうになれますから、最少し御待ちなさいましよ。今にお父さまの飛行機が出來上りましたら、坊さまも私も皆一所に乗せて戴くのです。

叔母。最う三時に間もないのに、ミカエルは何をしてゐるのだらう？

下僕。多分御仕度を爲さつてゐらつしやるのでせう。最前のお客さまは、とうの昔お歸りになりましたから。

叔母。今日も大公殿下が一所にお乗りなさるのだらうがね？

下僕。さ、如何で御座いますか……。昨日の模樣は本とにお目にかけたいやうで御座いましたよ。飛行機から大公殿下と一所に御降りになると、殿下は早速胸の勳章をお取りなさつて、旦那の胸にお掛けなさつたのです。その時の有樣を、本とに一囘貴女に御目にかけたう御座いました。この國中に、あんな名譽の事はありませんでした。

叔母。そんな大事な方をお乗せするのだから、ミカエルは本とに用心してくれないと困る。

下僕。旦那樣は、全く御上手なのですから、そんな御心配は御無用です。

（マシウイチは軍服に改めて妻と共に次の間から出て來る）

叔母。最う御出かけかえ？

マシウイチ。えゝ、これから行つて來ます。

叔母。少し風が出て來たやうだから、用心しておくれよ。

マシウイチ。えゝ、大丈夫ですとも。それよりも、何卒、貴女こそ風を引かないやうにして下さい。

叔母。えゝ、有難う。お前こそ高い空の上に昇るのだから、本とに氣を附けておくれよ。

マシウイチ。けれども、叔母さん、飛行機乗りと云ふものは、何日何時死ぬかも解らないものですから何卒そのやうな時が來ても氣を落さないで下さい。

叔母。まあ、お前は何うしてそんな悲しい事を急に云ふのだらう。

妻。ミカエルは今日は何うかしてゐるのです。顏色も宛で地獄のやうな色をしてゐます。

マシウイチ。はゝゝゝ。（無理に笑つて）そんな緣起の惡い事を云つてくれるな。今日は世界の記錄を破らうと思つてゐるのだ。では叔母さん、行つて來ます。（叔母に接吻をする）アレキサンドウ、お前こそ未だ本との顏色になつてゐないから、氣を附けるが好いよ。（接吻する）

妻。（目に涙を溜めて）貴方。今日の飛行は廢すわけには行かないのですか。

マシウイチ。馬鹿な。そんな不名譽な事が出來るものか。（小供を抱上げて接吻をして）さ、お前はおとなしく待つてゐるのだぞ。

小供。否え、御父さん、僕は爺やと一所に見に行きます。

マシウイチ。然うか、行きたければ行くがよからう。（時計を出して見て）あゝ、最う時間だ。では、左樣なら、左樣なら。……（去る。小供と下僕も續いて去る）

叔母。（妻がハンケチを目に當てゝ泣くのを見て）まあ、御前、何うしたのだえ？

妻。でも、何だか厭やな顏をして出てゐらつしやつたから。

叔母。そんなに心配しなくても、大丈夫歸つて來るよ。涙等出すのは不吉だよ。さ、此方へ御出で、火にでもお當り。（暖爐の側に行く）

妻。でも、今日は、先刻、テロリストの人が訪ねて來たりしたのですから、何だか心配でたまりません。

叔母。えゝ、テロリストの人？　何うして、そんな人がこの家に來たのだえ？

妻。さあ、何うしてですか。永く流罪になつてゐた、ペトロウイチと云ふ人が見えたのです。

叔母。まあ、然うかえ。何うしてそんな人が來たのだらうね。何卒、間違ひがなければ可いがね。そんな人達と交際をして、何うしやうと云ふのだらう。

妻。（外を眺めて）叔母樣、風が出て來たやうですね。

叔母。（窓の方に寄つて）本とに强い風が吹いて來だね。雲があんなに亂れてゐる。日も暗くなつて來た。

妻。暴風雨になりさうです。

叔母。飛行機は大丈夫だらうかね？

妻。叔母さん、ミカエルの飛行機が飛んでゐます。あれ、

彼方の樹の上の所を。

叔母。あゝ、成程。大變風に搖られてゐるね。

妻。えゝ、本とに……。あ、あんなに風にゆられてゐますでも段々高く昇つて行きます。

叔母。いよ〳〵暴風雨になつて來たね。鳥が驚いて皆巣に歸つて行く。木の枝があんなに吹飛ばされてゐるよ。飛行機は大丈夫かね。何所へ飛んで行つたのだらう妾には最う見えない。

妻。づつと向ふの空に極く小さく見えます。最う餘程高く上つてゐます。

叔母。上の方も風は強いだらうね。

妻。久々、こんな天氣では矢張り同じでせう。ぢや、段々大きくなつて來た。逆樣になつて、あんなに速く落ちて來ます。

叔母。まあ、何うかしたのではないだらうかね？　落ちたのではないだらうかね？

妻。あー、翼が折れた！（目にハンケチを當てゝ俯く）

叔母。え！　本とにかえ？……何うしたら可いだらうね！（室内をマゴ〳〵する）

妻。（机の上に伏して）叔母さん、ミカエルは最う死んで了ひました。

叔母。まあ、何うしたら可いだらうね？　妾は斯うしちやゐられない。行つて見て來やう。（急いで左手の戸口に行かうとする）

（下僕が慌しく入つて來る）

下僕。（聲を振はしながら）奥樣、御隱居樣、旦那樣は——旦那樣は、空から落ちてお亡りになりました。

叔母。あゝ、遂う〳〵死んで了つたかえ。（椅子にがつかりと倒れる）

下僕。何とも、申上げやうが御座いません。今日は下から見えなくなる程高く上つてゐらつしやつて、とう〳〵風の爲めに翼が折れて落ちて御了ひなさいました。聽て今御遺骸は、近衛の兵士共が此所へ御運び申します。

妻。おゝ、あの方は、屹度自殺を爲されたのだ！

叔母。えゝ、自殺を！　何うして？

（この時、小供が入つて來る。直ぐ後から近衛の副官が入つて來る）

小供。（母の側に聽寄つて、泣きながら）お母さん……。お父さんがねえ……。

妻。（小供を抱いて）おゝ、お前は御父さんの御亡りなさるのを見てゐたのかえ？

副官。（恭々しく敬禮をして）マシウイチ大尉殿の奥樣、私は大公殿下の御名代として、御悔みを申述べに御伺ひ致しま

した大尉殿の名譽ある御最後に對しては大公殿下を始め一統の者が深い哀悼の意を表します。それと同時に我國唯一の名飛行家を失つた事を、我國の爲めに深く惜しみます。本日の大尉殿の飛行は、實に勇敢とも壯烈とも申上やうのない立派な物でありました。我國に飛行界のあります間は、今日の暴風雨中の大飛行に就いて、永く語り傳へる事と思ひます。このやうな立派な飛行家をこの國に持つてゐた事を我飛行界は永久に名譽と致す事と思ひます。大公殿下には、本日の名譽ある大尉殿の飛行に對して、この國一等の勳章を授けられ、尚又遺族の方達に對しては、今後多分の恩給を賜はるとの事であります。又葬儀は此れを國葬として行ひ、當日は、特に花輪を以て飾られたる飛行船を以て、寺院の上を飛行させるとのことであります。お悔みとして、これだけの事を申傳へに上りました。

妻。御丁寧に、種々難有う御座います。何卒、大公殿下によろしく御禮の御取次を御願ひ致します。

副官。承知致しました。

（兵士登場）

兵士。（恭々しく敬禮をして）只今大尉殿の御遺骸を運んで參りまして。

（一同アーメンと呼び、胸に十字を切る）

——幕——

◆海軍筑空隊令發布◆

豫ねて報道せる海軍筑空隊の編成は愈々四月一日より實施を見んとして此の程『海軍筑空隊令』を發布されたり。其の全文を左に掲載すべし。

海軍筑空隊令（軍令海第四號）

第一條　海軍筑空隊は之を横須賀軍港に置き尚必要に應し他の軍港、要港及其の他要所に置く

海軍筑空隊は其の所在の地名を冠稱す

第二條　海軍筑空隊は尚該鎮守府又は要港部に屬す但し軍港要港以外の地點に在る筑空隊は其の所在海軍區を管する鎮守府に屬す

第三條　海軍筑空隊には必要に應じ筑空隊母艦として艦船を附屬す

第四條　海軍筑空隊に左の職員を置く

司令　飛行機隊長

機關長

分隊長　將校、機關將校

軍醫長

主計長

（國民飛行）

隊附　尉官、機關佐尉官、軍醫、主計、特務士官、准士官、下士卒

必要に應じ前項職員の一部を置かず又は軍屬其の他特種の人員を置く

第五條　海軍航空隊には前條に掲くる職員の外練習、研究其の他の必要に依り臨時隊附として將校、機關將校、將校相當官、特務士官、准士官及下士卒を置くことを得

第六條　司令は鎮守府司令長官又は要港部司令官に隷し部下を統率訓練し軍紀風紀を維持し隊務を統理す

第七條　司令は必要に應じ部下職員を一時附屬艦船に乘組ましむることを得

第八條　司令は航空隊を若干の飛行機隊に區分す

飛行機隊は飛行機二臺以上を以て編成するものとす

第九條　司令は部下の職員缺員中又は事故ありて其職務を執ること能はざるときは他の職員をして其の職務を代理せしむることを得此の場合に於ては將校、機關將校及將校相當官に付ては之を海軍大臣に、其の他の者に於ては之を本人在籍の鎮守府司令長官に報告すべし

第十條　司令缺員中又は事故ありて其職務を執ること能はざるときは部下の將校席次の順序に從ひ其の職務を代理す此の場合に於ては代理者は之を海軍大臣に報告すべし但し特に代理者を置きたる場合は此の限に非らず

第十一條　飛行機隊長は司令の命を承け飛行機隊を指揮し又司令を佐け部下飛行機隊に對し司令の命令を執行し隊務を整理し隊員の服務を監督す

第十二條　將校分隊長は司令の命を承け分隊を指揮し部下の紀律を維持し教育、人事及航空機の操縱を掌り且擔任の兵備品を整備す

第十三條　機關長は司令の命を承け機關部員を監督し機關術及電機術に關することを掌り主管の機關及兵備品を整備す

第十四條　機關將校分隊長は司令の命を承け機關長監督の下に分隊を指揮し部下の紀律を維持し教育及人事を掌り分擔の機關及兵備品を整理す

第十五條　軍醫長は司令の命を承け醫務衛生に關することを掌り主管の兵備品を整備す

第十六條　主計長は司令の命を承け會計給與及庶務に關することを掌り主管の兵備品を整備す

第十七條　隊附尉官は司令の指定に依り飛行機隊長又は將校分隊長に屬し各其の命を承け服從す

第十八條　隊附機關佐尉官は司令の指定に依り機關又は機關將校分隊に屬し各其の命を承け服從す

第十九條　隊附軍醫は軍醫長の命を承け服務す

第二十條　隊附主計は主計長の命を承け服務す

第二十一條　前諸條に掲ぐる以外の職員は各上官の命を承け服務す

第二十三條　艦隊に海軍航空隊を附屬せしむるときは前諸條を準用す但し此の場合に於ては艦隊航空隊と稱し鎮守府司令長官又は要港部司令官の職務は所屬長官之を行ふ

第二十三條　横須賀海軍航空隊は前諸條の外將校機關將校に航空術に關する事項を教授し且其の改良進歩を圖る所とす

横須賀海軍航空隊の教育綱領は横須賀鎮守府司令長官海軍教育本部長と合議の上海軍大臣の認可を經て之を定む

第二十四條　横須賀海軍航空隊には別に職員として副官及教官を置く

第二十五條　横須賀海軍航空隊司令は航空術の教授に關することを統理す

第二十六條　横須賀海軍航空隊司令は必要に應じ教官以外の職員をして教授其の他練習のことを掌らしむることを得

第二十七條　副官は司令の命を承け教授に關する庶務を處理す

第二十八條　教官は司令の命を承け教授を擔任し且研究調査に關することを掌る

首席の教官は前項の外司令を補助し教務を監理す

第二十九條　横須賀海軍航空隊に於て修習する將校機關將校を航空術學生と稱す

第三十條　航空術學生は身體強健實務の成績優等にして航空機の操縱又は其の機關取扱に適すと認むる者に就き海軍大臣之を命ず

第三十一條　航空術學生卒業したるときは之に修業證書を授與す

第三十二條　横須賀海軍航空隊司令は學生中不適當と認むる者あるときは之を横須賀鎮守府司令長官に稟申す同司令長官至當と認むるときは之

を海軍大臣に具申し海軍大臣は之に退學を命ずることを得

第三十三條　海軍大臣は戰時又は事變に際し必要と認むるときは航空術學生を退學せしむることを得

第三十四條　海軍大臣は横須賀海軍航空隊に臨時講習科を設け將校、機關將校、將校相當官及下士卒に航空術に關する必要の講習を爲さしむることを得

附　則

本令は大正五年四月一日より之を施行す

本令は施行前飛行術を習得したる將校機關將校に對しては其の技倆の程度に依り本令第三十一條の修業證書を授與することを得

◆アート・スミス氏來朝◆

『空中の藝術家』『懸星競爭者』『空中の新王』と誕名され、今や全世界に名聲嘖々たる曲藝飛行家の名手米國人アート・スミス氏は、三月十八日午後横濱入港の地洋丸にて來朝し、直ちに帝都に入りて帝國ホテルに投宿したり。

◆陸軍の山嶽飛行演習◆

陸軍航空隊第四期練習將校の為四囘野外飛行演習として三月十九日より一週間に亘り熊谷町を中心とし寄居、秩父町附近に於ける山間の偵察、操縱演習を擧行せり之れに使用せし飛行機は三　にして根據地たる熊谷町荒川堤の河原には第記第四期生以外に指揮官として有川隊長監督者として陶大尉、眞壁、伊庭、中澤其他數名の先輩飛行將校出張せり。

◆ナ氏の婦人同乘宙返飛行◆

三月十四日、ナイルス氏は近江國八日市町に於て同町字金屋重森きりと云へる今年十九歳の女學生を一名例の第二『前風』號に同乘せしめ、午後一時五十分、飛行場の中央より機首を西に向け太郎坊山を目標に滑走すること百五十米突にして飛揚し、大きく一周又一周、七分の後ちには早くも二千ヒートの高さに昇騰するや、先づ正面宙返を試み、續いて同五十八分横轉飛行に移り、其れより同五十八分六秒にして第二囘目を行ひ、機首を南に向けて東の上空より急角度の空中螺旋滑走にて同五十九分場の中央目蒐けて下降を始め、同二時見事なる着陸を終りたり。之れ本邦に於ける婦人同乘宙返り飛行の嚆矢なりとす。

◆海軍飛行機の大椿事◆

海軍の飛行機は、三月二十日より上野に開催せる海事博覽會場を訪問すべく、午前十一時三十五分桑原中尉（室井中尉同乘）操縦の イ十號を先頭として、飯倉大尉（加藤栗野兩機關中尉同乘）操縦のロ五號之れに續き、同四十分阿部中尉（頓宮機關大尉同乘）操縦のイ十二號、殿りとして何れも追濱を出發、三機相前後し春風蕭る竹の臺なる博覽會場を訪ひ、歸途はイ十號機とロ五號の二機は同時に芝方面に雁行し去りたるが、阿部中尉のイ十二號は別方面に進路を執り午後零時四十分頃芝區虎之門上に出で、其處より機首を南に向け約五百米突の高度を保ちて進航中、同區明舟町十九陸軍少將町田經宇氏邸の上空に差し蒐るや、突如として機の右翼（上下共なるやは尚ほ疑問なり）破壞して上方に跳ね上り、忽ち安定を失して左翼を下に横轉すること二囘に及び、恰も木の葉の如くに約二百米突の低空に轉落し、同位置よりは更に機首を眞逆樣にして町田少將邸屋上に轟然たる一大音響を發して落下し、軒を拔き緣側を破つて機は庭上に墜落し、機體は全部滅茶々々に破壞し盡せり

操縦者阿部中尉は發動機の下敷となりて面部右腕等を粉碎され、同乘者頓宮大尉は、後頭部を碎かれたる上に、上顎脫出して共に慘死を遂げたり詳細は次號に掲載すべし。（墜落の當日現場を視察して直ちに記す。城東生）

殉難者の略歴

□阿部中尉　名は新治宮城縣刈田郡宮村に生れ四十二年十一月兵學校を卒業し少尉候補生となり四十四年二月少尉に任ぜられ四月常磐に乘組を命ぜられ同年八月海軍砲術學校普通科に入り卒業後水雷學校に入り四十五年四月卒業軍艦富士に乘組大正元年十二月中尉に任じ同二年十二月大和に轉乘して占守島附近の測量及警備の任に當り同四年二月航空術研究委員を命ぜられ横須賀鎮守府に轉勤今日に及ぶ

□頓宮大尉　名は基雄岡山市六番町九士族頓宮喜隆氏の三男にて明治二十一年十月十三日を以て生る同縣立中學を卒業後四十一年一月海軍機關學校に入り四十三年四月卒業少尉候補生とな

り軍艦千歳に乘組を命ぜられ同年九月伊吹に轉じ更に八雲に移乘十二月嚴島に轉じ同月機關少尉に任じ四十四年二月正八位に叙せらる同年十一月横須賀水雷學校に入り四十五年三月待命となりしが大正元年一月横須賀水雷隊附となり十二月機關中尉に進み大正二年軍艦音羽乘組を命ぜられ同三年五月機關學校普通科に入り十二月機關大尉となり嚴島分隊長に任ぜられ日獨戰に出征し功により過般勳五等旭日章を授けらる因に氏には歌子（二四）と呼ぶ夫人有り。

◆露國の新爆彈投下機◆

露國の飛行機は彼のシコルスキーの大型飛行機の外、別に特長のある飛行機の發明も聞かなかつたが、今回爆彈投下機の極めて精巧な恐しい威力を有する物が發明されたと云ふ事が報道された。この投下機はシコルスキーに似た大飛行機イルヤ・ムロメツツと云ふ恐ろしく大きな飛行機の上に取付けてある物で、彼の寫眞學の應用に依つて、この飛行機が大速力で飛行中に四人の手で投下される物だと云ふ。即ちその爆彈の大きさは獨軍クルツプの四十二珊の砲彈と略同型の大きさで、その威力は最つと恐ろしい。その爆彈が一發敵壘の上に落ちると、天に注する計りの火炎が立昇りて、附近にゐた者は音響だけで皆耳が聾して了ふ。とに角この大型飛行機と大爆彈とは歐洲で大なる疑問となつてゐたものであると云ふ。

◆ツエペリンの上に結ぶ霜の量◆

最近のツエペリン飛行船は瓦斯囊が二十五室に分割されてゐて、形狀は葉卷型となり、搭積量は十二噸から十五噸で、此の内には乘込員、武器、爆彈等が含まれる。その最大瓦斯空力は千五百哩である。而して此等新飛行船の携へる爆彈の量は三噸から四噸である。而して飛行船の最も禁物とする物は、風、霧、霜等であつて、此等の天候の時には襲撃を躊躇する。故に今日迄天候が中途で險惡になつた爲め倫敦遠征を中止した事が屢々ある又歸路此等惡天候の爲めに海上に落ちた物もあつた。

扨て名々の飛行家が飛行機で霧の内で飛行すると、翼がすつかり濡れて了ふ事を知つてゐるが、これと同樣霜の非道い時飛行すると翼には霜が段々厚く積るのである。飛行機はとに角として飛行船に霜が積ると大變な事になる。超リ式の物は表面々積が九十平方呎あつて、一平呎の上に積る氷の重量は五十七封度半であるから極く薄く一吋の十六分一瓦霜が氷結したとしても、全面積に積つた氷の重量は十四噸に達する。假りに七噸の重量を積んで出發して來たとしても、其所へ十四噸の重量が俄かに增加したなら、何うしても墜落するより外はない故にツエツペリンはよく〳〵天候を調べた上でなければ出動しないこれツエツペリンの出動數が少いわけであると。然し追々暖氣に向つて來たから、このやうな心配はなしにツエツペリンはドン〳〵英國を襲ふであらう。

耐寒飛行試驗の爲め滿洲に遠征したる澤田中尉より編輯者に寄せられたる葉書

戰況電報一束

◆新式飛行船建造◆

（二月二十一日紐育發）

伯林來電――新聞紙の傳ふる所に據ればフリードリツヒスハーフエンにて毎週一隻乃至二隻のツエツペリンを製造しつゝあり。其形は近來益細く長くなり少なくも六門の機關銃を有し舵其他の操縱裝置は甚だ簡單となりたれども發動機は大型となれり昇降及方向轉換ともに非常に敏速となり又多量の煙を發して其所在を晦ます方法も發明されたり。

◆佛國飛行隊大活躍◆

（二十二日タイムス社發）

サロニカ來電――十六機より成る佛軍飛行隊は出動してストルムニツツア停車場に重爆彈百六十五個を投下し歸還せり飛行隊は毫も損傷を受けず

◆獨飛行船大爆破◆

（二十二日紐育發）

伯林來電――西部戰戰にて佛軍に射落されたるはツエツペリン・ヱルニの七十七號にて大震彈命中し火災を起して落下するや搭載し居りし爆彈爆發し乘組員二十二名全部負傷せり當時飛行船は風に逆行して速力早からざりしと云ふ開戰以來ツエツペリンの破壞したるもの之にて十五隻なりと

◆英飛行隊蘇士襲撃◆

（二十三日上海經由路透社發）

英國公報に曰く我飛行機隊は蘇西運河の東方なる敵の前進隊に對する航空偵察中一機は六百呎迄下降しエルハサマなる敵の動力供給所を百封度の爆彈を以て破壞したり。

◆空中地上共に活動◆

（倫敦二月二十二日發）

在佛英軍總司令官ヘイグ將軍の報告に曰く我二十六隻の飛行はドンに於ける軍用貯藏所を襲撃せり貯藏品并に鐵道に對して多大の損害を加へたりと信ぜらる飛行機は悉く無事歸來せり、又我砲兵は活動を示しウルーシユ并にイープル・コンミーヌ運河北方の塹壕を砲撃せりと。

◆佛軍空中に成功◆

（倫敦二月二十二日發）

巴里よりの報道に曰く二十一日夕發表の公報に據るに獨軍はジヴアンシー西北の我塹壕を猛烈に砲撃し我軍は活潑に應戰せり敵はリオン地方に於て七キロの正面に亘り激烈なる砲撃と幾多の瓦斯攻撃を行ひたる後其塹壕より躍出せんと試みたるも我軍の猛烈なる砲火の爲め追返されたり我軍はアル・コンヌにて若干の望樓を破壞せり

此日は筑空機の大活動を以て著しかりき即ち敵のフオツカー型飛行機一隻はアルトキルヒ附近に於て、アルバトロス型飛行機一隻はエピナールに於て、更に一隻の飛行機はビユール附近に於て打落され又四隻の佛軍飛行機はヴイニヤール地方に於て四隻の獨軍飛行機と戰ひ敵の二隻をして地上に降下するの餘儀なきに至らしめ他の二隻は遁走せり、若干隻の獨軍飛行機はフイーム・バル・ド・ヂユク及びレリイニイに爆彈を投下せるが十五隻の獨軍飛行機は佛軍飛行隊と戰はざるを得ざるに立至らしめ敵の一隻は打落され更に一隻は追撃を被れるが突如として獨軍の戰線に下降するを見受けたり佛軍飛行機十七隻はホブサンの飛行場並に貨物停車場に七十六個の重爆彈を投下し又二十八隻の佛軍飛行機はペニー・シユール・モゼルの軍用器製造に爆彈を投下せるが飛行機は悉く無事歸來せり又一隻の獨逸飛行船は自働車に據付けたる大砲の爲めブラパント・ル・ロアに打落されたり同船は發火性砲彈に打たれ火災を起して墜落せるものなりと。

◆獨飛行船の慘劇◆

（倫敦電報廿四日ロイテル發）

バルル・ル・ダツク（佛國ミユーズ縣）發電に曰く獨逸ツツ式飛行船エル七十七號は六千呎の上空に於て强風と戰ひつゝありしが佛軍砲兵隊は之を視るや否や直に導火線砲彈を發射したるに其一彈は首尾克く飛行船體の側面に命中し船體を貫き火は見る間に全船體に燃え移れり茲に於てか飛行船は災焰濛々たる裡に上空より徐々下降しつ着陸する間もなく船内に搭載せる全部の爆彈は一時に爆發せり斯くて佛兵は現場に駈け付けたるに船體は全く破壞され赤裸々たる船員十三名の死骸を發見せり而して第二のツ式飛行船は此慘狀を目擊すると共に船尾を他方面に轉じ去れりと。

◆佛機のメツツ攻撃◆

（倫敦電報廿五日ロイテル發）

佛國飛行機隊はメツツ停車場及瓦斯工場に大爆彈四十五個を投下したるが間もなく大火燃え上るを認めたり。

as to place the machine at his disposal, Mr. Niles displayed his up-side-down flights several times over Yōkaichi. The Sempū-go was not a machine specially constructed for use in up-side-down flights, but through the experience of Mr. Niles, it has been found that the machine would be all right to be used for up-side-down flights. Subsequently, Mr. Niles flew near the city of Wakayama to the unreserved admiration of the people there. A narrow field was used as the landing place at that time, and the noted aviator remarked that it was him first experience that he flew at such a place.

Flight over old Battle-Field

Flight Lieutenant Nakasawa visited Ryojun from Dairen on board a military aeroplane with Colonel Soda, on February 26. After flying over the famous old battle-field for a little while, the aviator safely returned to Dairen. With this flight, the programme of the experimental flights in Manchuria was brought to an end, and then aviators' party left there on their way home.

Another American Aviator Coming

It is reported that Mr. Art Smith, one of the most famous aviators in America, left San Francisco on March 2 for his trip to Japan. The public here is anxiously awaiting the arrival of the distinguished aviator with such expectation that he may demonstrate his skill in the mid-air by accomplishing more startling feats than Mr. Niles has done in this country.

Japanese Operatives to Russia

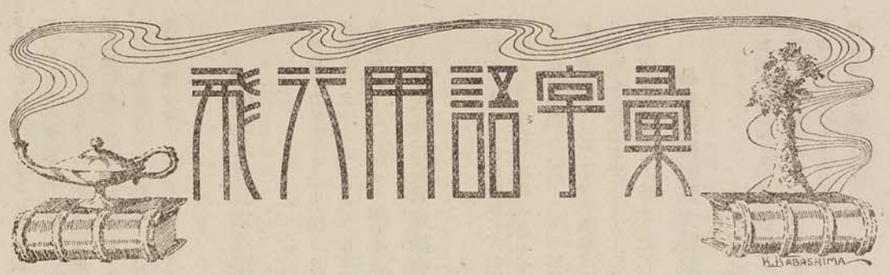
Mr. T. Iwagami and Mr. T. Kudō, Japanese operatives in the manufacture of aeroplanes, left Tokyo on February 26 for Russia to be employed by the aeroplane factory at Odessa.

∵ ∵ SUBSCRIPTION RATES: ∵ ∵

Foreign (including postage) 1.38 dollar per year. 12 Cents per month.

PUBLISHED MONTHLY BY THE KOKUMINHIKOKWAI,

No. 10, Yobancho, Kojimachi-Ku, Tokio, Japan.



Double-surfaced (of an aeroplane deck) (ダブル、サーフエースド)＝二枚の異なれる、織物の布に依つて上面下面共に張られてある物。其間に主柱及び肋骨が横はる。(Having the upper and lower surface made of two distinct layers of fabric, between which lie the spars and ribs of the plane.)

Elevator (エレベートア)＝調整し得る水平面。或は飛行機を垂直に指導し操縦する面。(The adjustable horizontal plane or planes for directing and controlling an aeroplane vertically.)

Empeunage (エンプネージ)＝浮揚力なき尾翼。(A non-lifting tail, g. v.)

Entering Edge (エンターリング、エッヂ)＝飛行機の彎曲面或は甲板面の前縁。(The front edge of an aerofoil or the deck of an aeroplane.)

Envelope (エンベロープ)＝氣球の瓦斯が充塡してある被包。(The covering of the gascontaining part of a balloon.)

Envergue (エンヴェルギユー)＝主翼の端と端との間の距離。翼長。(The distance from tip to tip of the main plane. The span.)

Envole (エンヴォール)＝飛行。(Flight.)

Equilibrator (イクイリブレートア)＝飛行機の尾部。(The tail of an aeroplane.)

Equilibrium (イクイリブリウム)＝飛行機に此語を用ひる場合には、安定と同意義に用ふ。氣球に用ふる場合には一定の高度を保つと云ふ意味に用ひらる。(In connection with aeroplane this word is used in the same sense as stability; for balloon it means the keeping at an uniform altitude.)

Equipoise (イクイポイズ)＝安定。兩端の調和が取れゐる。(Equilibrium, the two sides balanced.)

Fin (フイン)＝飛行機の後部の上方に縦に附けられたる垂直面。(A vertical plane set above the back of an aeroplane in a longitudial position.)

Fore-and-aft Control (フォア、アンド、アフト、コントロール)＝前後水平舵の聯結してある組織。(The system of interconnecting leading and rear elevators.)

Fusiform (フユージフォーム)＝紡錘の如き形狀。(Shaped like a spindle.)

Fuselage (フユーセルエージ)＝主翼と尾部或は水平舵とを連結させる外部裝置又は框。(The outrigger or framework connecting the main planes with the tail-piece or the elevator.)

Gaining Pitch (ゲイニンヅ、ピツチ)＝螺進機の刃面が中軸に對し後方より前部に亘つて角度が漸時增加するように製作されてある場合には其の螺進機は進節を有すると云ふ。流線狀の翼の深度と同理に於て、何等の振動無しに空氣を斜めに押す傾向を有す。(A propeller is said to have a gaining pitch when the angle of the blade to the axis at any section increases from front to back; intended to deflect the air without shock, on the same principle as the camber of an aerofoil.)

Gap (ギヤツプ)＝複葉或は三葉飛行機の上下翼間の縱の距離。多くは縱長に等しとさる。(The vertical distance between the decks of biplanes and multiplanes, usually equal in dimension to the chord.)

Gauchissement (ゴウシスマン)＝ライトに依つて採用されたる左右安定を保持する爲めに主翼兩端を撓屈させる法。此法を行ふには安定翼又は動翼を動すの要なし。(The method used by the wrights for warping the ends of the principal planes in order to preserve leteral equilibrium, in this way doing without balancing planes or ailerons.)

Girder (ギルダー)＝撓むのを防ぐやうに構成した物。堅牢で輕量であるやうに作り上ぐ。(A structual member intended to resist bending, and build up so as to combine strength and lightness.)

Glider (グライダー)＝推進力のない滑翔機或は翱翔する飛行機。(An aerodone, a gliding or soaring appliance which is not self-propelling.)

Gliding Angle (グライディンヅ、アングル)＝飛行機が發動機の力で進まぬ時に降下する時の、水平線と爲す角度。滑翔の長さと滑翔の長さとの比。(The Angle to the horizontal at which a flying machine descends when not propelled by an engine, The ratio of the height of glide to length of glide.)

Guy Wires (ガイ、ワイヤス)＝張線と同じ。(Same as "Stays," g. v.)

Gyroplane (ジロプラン)＝廻轉する翼を持つた飛行機。螺進飛行機。(A flying machine with revolving wings. A heticopter.)

Hanger (ハンガー)＝飛行機或は氣球を入れる小舍。(A shed for hausing aeroplanes or balloons.)

Head Resistance (ヘツド、レジスタンス)＝滑翔角度と飛行機(搭乘者其他をこめて)の重量との乘積。(The product of the gliding angle and the weight of an aeroplane (with pilot, etc.).)

或は又 $\frac{\text{滑翔高度}}{\text{滑翔距離}} \times \text{重量}$

$$\left(\frac{\text{height of glide}}{\text{length of glide}} \times \text{weight}\right)$$

國民飛行會入會者氏名

（自二月七日至三月十日）

東京ノ部

大倉喜七郎殿　丹　いね子殿　若松鐵四郎殿　尾原雄之助殿　伊崎良熙殿
深田芳子殿　林　嘉陽殿　速水次郎殿　朝倉希一殿　伯爵大隈重信殿
深田君子殿　草生政恒殿　岡部正樹殿　西村秀造殿　箕浦勝人殿
深田富士子殿　江口駒之助殿　二井房太郎殿　神田禮治殿　尾野實信殿
廣瀨清太郎殿　松本昌文殿　土方久徵殿　星野楢吉殿　高野漸殿
廣瀨類亮殿　工學博士小田川全之殿　宮島清次郎殿　米井源治郎殿　三宅覺太郎殿
八木橋重吉殿　小林照綱殿　本間爲次郎殿　木村甚三郎殿　園田京子殿
廣田千秋殿　男爵眞鍋斌殿　中川治三郎殿　田島信夫殿　園田孝安殿
上山滿之進殿　小山作之助殿　谷崎惣次郎殿　川地三郎殿　杉本桂造殿
丸尾敏雄殿　草間時光殿　直井直次郎殿　野岸安次郎殿　男爵上田有澤殿
鈴木和一殿　神部隆之助殿　篠崎兼吉殿　野岸あい子殿　薗部周吉殿
石上善次郎殿　丸茂茂三郎殿　別技ヒサ殿　岩崎穗一殿　仁木隆吉殿
宇部辨治殿　松浦秀年殿　大宮ムメ殿　小池鹿二郎殿　伯爵兒玉秀雄殿
內野吉輔殿　滋野房子殿　岡本幾太郎殿　佐藤正樹殿　作野甫殿
早川芳太郎殿　荒川敬殿　石原源八殿　佐藤輝男殿　光永善一殿
廣瀨巖殿　木村亮吉殿　田原文雄殿　井野口春清殿　渡邊勝三郎殿
塚本義胤殿　鈴木好殿　青木鯤治殿　森岡守成殿　小栗一雄殿
松永敏太郎殿　北川嘉助殿　原誠殿　山本助一殿　奧平俊藏殿
和田垣謙三殿　北川清一郎段　日比谷新次郎殿　植田謙吉殿　工學博士武田三郎殿
北川麻次郎殿　鹽田誠太郎殿　侯爵山內豐景殿　松井庫之助殿

THE
NATIONAL AVIATION MAGAZIN

VOL. I.　JAPAN, APRIL　No. 4.

Experimental Flights in Manchuria

Experimental flights in the cold weather conducted by a party of army aviators have been crowned with brilliant success. On February 25, a long distance flight was carried out between Hōten and Dairen, about 240, miles. The distance was divided into two sections; one from Hōten to Taisekkyo and the other from Taisekkyo to Dairen. The first section was covered by Lieutenant Iba, while Lieutenant Nakasawa flew the second section, and both aviators successfully carried

Mililary Aviation corps at Mukden.

out the plan, notwithstanding a strong wind then prevailing. The aeroplane used in the flight was of the Henry Farmann type equipped with a Curtis motor of 100h. p. which was recently manufactured by the Army Aviation Corps. As to the temperature in Manchuria, it has been found that the higher one ascends, the warmer it becomes. Moreover, the direction of wind is unchangeable, thus rendering flights comparatively easy. Benzine oil freezes at 15 to 19 deg. below zero on the land in Manchuria.

Mr. Niles and Semūp-go

Mr. Carles Niles returned to Yōkaichi on February 22 in the Sempū-go with Sub-Lieutenant Kumaki, retired, who is the owner of the machine. The following day, in reply to the good will of Sub-Lieutenant Kumaki who had been so generous

福井策三殿　中村幸之助殿

鈴木達治殿　前田松韻殿

修養團第二向上舍

東京飛行記者倶樂部

倉富了矣殿　阿部康藏殿

知覽健彦殿　海野登喜司殿

折橋慶治殿　國分邦彦殿

赤岩庄次郎殿　片桐荒城殿

○

尾上梅幸殿

松本幸四郎殿　澤村宗十郎殿

澤村宗之助殿

○

小森七郎殿

上村鋼一郎殿

高取安太郎殿　中川幸太郎殿

香取修平殿　犬飼源太郎殿

生島莊三殿　西村丹治郎殿

小野房若殿　萬代嘉平治殿

大畑源一郎殿　中村千代松殿

池田寅次郎殿　藤原元太郎殿

高柳覺太郎殿　吉原正隆殿

犬養毅殿　中西六三郎殿

關直彦殿　村山金平殿

小橋藻三衛殿　高鳥順作殿

高木益太郎殿　白石直治殿

中山梅次郎殿　牛田唯一殿

富安保太郎殿

○

仙波太郎殿

早川新太郎殿　小川平吉殿

鶴田禎次郎殿　吉植庄一郎殿

可兒悌二郎殿　森久保作藏殿

田中政明殿　秦豐助殿

榎秀岳殿　齋藤珪次殿

關谷連三殿　松田源治殿

望月長夫殿　江藤哲藏殿

柏原文太郎殿　山內範造殿

古島一雄殿　渡邊廣治殿

鹽川幸太殿　成田榮信殿

谷欽太郎殿　三土忠造殿

八木逸郎殿　上埜安太郎殿

堀豐彦殿　三輪市太郎殿

川口木七郎殿　渡邊昭殿

前川虎造殿

○

相島勘次郎殿

大堀孝殿

○

元田肇殿

清水市太郎殿　岡崎邦輔殿　臺灣　益田濟殿　清水半兵衛殿

葉住利藏殿　中倉萬次郎殿　男爵安東貞美殿　飯田德三郎殿

川上榮太郎殿　横山寅一郎殿　下村宏殿　福井縣　馬場齊吉殿

名村忠治殿　有田恕殿　吉野有武殿　小木斧次郎殿

細梅三郎殿　石川芳次郎殿

平田禎殿　靜岡縣　雨森菊太郎殿

○　飛奈米太郎殿

野尻岩次郎殿　兵庫縣　田邊壯吉殿　男爵土屋光春殿

西谷金藏殿　橫田孝史殿　松江春次殿　山之內赳殿

平井六右衞門殿　磯貝浩殿　黑川勇熊殿　岩手縣

田中定吉殿　大原義剛殿　多木正也殿　松下富次郎殿

植場平殿　市川文藏殿　藤井治三郎殿　坂本來治郎殿

兒玉好熊殿　護得久朝惟殿　福田常太郎殿　高松健吉郎殿

西村正則殿　奧田柳藏殿　岩井勘六殿　京都府　鈴木幸三郎殿

岩本平藏殿　關野善次郎殿　大久保和一郎殿　堀佐四平殿

河野庄太郎殿　江間俊一殿　中川惠郎殿　吉田良二殿

奧田榮之進殿　安東俊明殿　大野槌三郎殿　平野菊太郎殿

大島久滿次殿　長澤倉吉殿　熊本縣　後川文藏殿　澤田權左工門殿

加藤平四郎殿　小池仁郎殿　成松明秀殿　高木謙二郎殿　林崎奧松殿

土居貞彌殿　竹村欽次郎殿　岡崎武槌殿　山本源兵衞殿　松田善八殿

坂本志魯雄殿　半谷清壽殿　德島縣　江藤貞雄殿　佐々木兼松殿

高橋是清殿　清水隆德殿　牛圓重二郎殿　小畑岩次郎殿　高橋理四郎殿

小林源藏殿　大石熊吉殿　埼玉縣　小門藤太郎殿　畑山次郎殿

古谷久綱殿　降旗元太郎殿　榎本善兵衞殿　瀧本龜太郎殿　西池季澄殿

山本達雄殿　加藤小太郎殿　小田島源次郎殿　星野湖一郎殿　山本金太郎殿

男爵　杉浦清殿

小野孝治殿

廣島縣
神足勝孝殿　山口九十郎殿
高橋諒一殿　愛媛縣　中島爲喜殿
保田八十吉殿　田内榮三郎殿　後提院正六殿
軍艦比叡　大坂府　田井新一殿
宇野積藏殿　山崎忠次郎殿　中野浩忠殿
大橋てい子殿　武田彌重郎殿
三重縣　竹下辰四郎殿
仁平民三郎殿　太田光熙殿　長崎縣
海野幾之進殿　藤澤穆殿
神奈川縣　富山正三郎殿　稻原勝治殿
江幡梅太郎殿　野村房次郎殿
横山鹿次殿　大坂朝日新聞社　阪水四郎殿
廣瀨順太郎殿　上野理一殿　鳥居赫雄殿
山本泰司殿　上野精一殿　福岡縣
本間龍二殿　愛知縣　上野梅子殿　遠藤麟太郎殿
千葉縣　上野淳一殿　日野熊藏殿
永田金之助殿　大庭二郎殿　上野正子殿　土屋元作殿
松澤鹿藏殿　北海道　福永茂雄殿
小西勝一郎殿　辰井梅吉殿
朝鮮　原田棟一郎殿　水原清殿　野田欣藏殿
岡野養之助殿　大井晋平殿　山口縣
若森美樹殿　高原操殿　白川泰三殿　今村宗太郎殿
長谷川萬次郎殿　福原榮太郎殿
福島縣　村山增子殿
村山於藤殿

國民飛行會會規

第一章　名稱及目的

第一條　本會ハ國民飛行會ト稱シ其本部ヲ東京ニ置ク又必要ニ依リ地方ニ支部ヲ置クコトアルヘシ

第二條　本會ハ飛行趣味智識ヲ普及スルヲ以テ第一ノ目的トス第二期ノ事業ハ會員多數ノ意志ニ基キ必要ノ時期ニ於テ定メントス

第三條　本會ハ前條ノ目的ヲ遂スル爲メ飛行船、機ノ研究、講演、書籍出版並ニ雜誌「國民飛行」ノ刊行ヲ行フ

第二章　會員及會員ノ權利義務

第四條　本會ノ會員ハ男女ヲ問ハス一回限リ金貳圓ヲ納ムルヲ要ス但既ニ帝國飛行事業ニ貳圓以上ノ金品ヲ寄附シタル者ハ會費ヲ納メサルモ妨ケナシ

會員ニハ本會ノ會員章ヲ交附ス

第五條　本會ノ會員ハ會員章ノ實費(金十五錢)ヲ徵ス

會費ヲ納メサル會員ニハ會員章ノ交附ス

第六條　本會ノ會員ハ本會所有ノ飛行機ニ同乘スルノ權利ヲ有ス但シ操縱法及時間ノ之ヲ許ス時ニ限ル

本會ノ會員ハ機關雜誌「國民飛行」(月刊代價一部金拾五錢)ヲ一年乃至三年間個人若クハ數人申合セ講讀スルノ義務ヲ有シ一讀後ハ成ルヘク之ヲ學校及圖書館又ハ多人數集合ノ場所ニ寄贈スルモノトス

第七條　本會ノ會員ハ其會員章ヲ帽子又ハ襟部ニ勉メテ佩用スルヲ要ス

第三章

第八條　本會ハ左ノ役員ヲ置ク、

一、會長　一名　二、副會長　二名
三、理事　五十名以内　四、監事　三名
五、委員　若干名

第九條　本會ノ役員ハ名譽職トシテ其任期ハ三年トス但シ重任スルコトヲ得

第十條　會長ハ本會一切ノ事務ヲ總理シ副會長ハ會長ヲ補佐シ會長事故アルトキハ其代理ヲ爲ス

理事ハ會長ノ命ニ依リ會務執行ノ任ニ當ルモノトス

第十一條　監事ハ本會ノ會計ヲ監督ス

第十二條　委員ハ會長之ヲ囑託シ會務擴張ノ事ニ任ス

第四章　總會

第十三條　會長必要アリト認ムル時又ハ會員多數ノ請求アル時ハ總會ヲ開ク

第十四條　總會ノ議事ハ出席員過半數ニ依テ決ス可否同數ナルトキハ會長之ヲ決ス

第五章　會計

第十五條　本會ノ經費ハ會費其他一般寄附ノ金品並ニ之ヨリ生スル利益ヲ以テ支辨ス

第十六條　本會ノ收支計算期ハ毎年六月、十二月トシ之ヲ雜誌「國民飛行」ニ廣告ス

第十七條　本會經費支出規定ハ監事ノ承認ヲ得テ別ニ之ヲ定メ雜誌「國民飛行」ニ之ヲ廣告ス

附則

第十八條　特別ノ場合ヲ除クノ外當分ノ内金錢ノ寄附ヲ受ケス

國民飛行會經費支出規定

第一條　本會ノ經費ハ會費及其利子ヲ以テ之ニ充ツルモノトス

第二條　經費ノ支出科目概ネ左ノ如シ

一、航空機費　飛行機、飛行船ノ建造、購買、修理運搬等ニ要スル諸費
二、會員募集費　會員募集並ニ會費徵收ニ係ル諸費
三、會員章費　會員章製造並ニ送付費
四、會計係報酬

第三條　事務費、通信費、旅費其他雜費ハ機關雜誌ノ利益金ヨリ支出スルヲ本則トス但止ムヲ得サルトキハ監事ノ承認ヲ得テ會費ヨリ支出スル事ヲ得

第四條　旅費ハ會長ノ命ニ依リ旅行スルモノニ給ス其金額ハ汽車賃、船賃ハ二等額、宿泊料、車馬賃等ハ之ニ準スル實費額トス

第五條　會員募集費ハ其徵收シタル一割五分ヲ最上限トス但止ムヲ得サル場合ニ於テハ監事ノ承認ヲ得テ之ヲ增加スルコトヲ得

第六條　會費出金者ニ對シテハ受領証ヲ交付ス尙其姓名ハ機關雜誌ニ掲載ス

第七條　會計主任ハ左ノ帳簿等ヲ備ヘ收支金ノ整理ヲナスヘシ

一、現金出納簿　一、諸傳票、證書
一、整理簿　一、試算表
一、會員出金簿　一、會費受領証據

第八條　總テ金錢ノ收入及仕拂ハ傳票又ハ證書ニ依リ出納シ之ヲ帳簿ニ登記スルモノトス

國民飛行會趣意書

蒐空機が歐米各國に於て試驗の區域を離れて應用の期限に入りしは、近く二三年前に在りしが、今は忽ち戰爭の一大要具として其權威を戰場に擅に致し居り候

鐵風鉛雨假令ひ全歐土を鎔すも、一指誰れか能く大英國に染むるものあらんやとの傲語は、端無く一場の夢となり「ツエツペリン」飛行船の一度び英國を見舞し以來、倫敦市中、今尙ほ燈火を用ゆること能はず、人々安き心も無しと云ふ、遮莫あれ英獨兩軍の空中戰は海陸戰と共に今日以後漸く佳境に入らんとする狀勢に在るを以て、暫く玆に其結果を揣摩することを避くべしと雖も、我帝國の位置關係は英國に酷似す、他年一朝事あらんか敵の飛行船、機より受くる損害は、英國の今回のものと殆んど同一なりと考へざる可らす、加之全市、木造家屋より成る我邦に對しては、敵の飛行隊は無數の燒彈を投下して容易に數十ケ所に火災を起し得べし、昨夜は大阪市の大半が燒けた、今日は東京が火事なりとの奇變に逢はんか、未だ戰はざるに勇士の氣先づ餒へざるか、斯の如くにして軍の後方補給、尙能く繼續し得らるべきか、想ふて玆に到る毎に冷汗の背を濕ふすことを禁ぜず候

飛行機に關して我陸海兩軍の努力及進歩は吾人の多しとする所なれども、之を敵國獨逸が陸軍のみにても二千五百餘萬圓の大豫算を擁し、氣球中隊拾六個、飛行中隊十三個を備へ、官民合せて飛行機の數一千隻以上、飛行者の數一千五百名を下らざるものに比すれば、聊か後に瞞若たらざるを得ず候、而して開戰後は金力智力を盡して飛行船、機の建造改良に熱中すと云へば、目下の數は蓋し二倍以上に達し居るならむ、又其民間飛行倶樂部等の概況如何と云ふに、獨國に四十六個、義捐金七百餘萬圓、佛國に八十八個、醵金五百萬圓、英國に七十五個の協會あり、其他民設飛行學校、練習場、飛行製造所等多數ありて、政府當局者を推進督促し以て今日の盛況に到らしめたるものを看來りて、之を我邦の帝國飛行協會、只一個にして而も同胞の義捐金僅かに四五萬圓に過ぎずと云ふものに比すれば、又轉た慚愧の情に禁へず候、現に伯林市のみにても大資金を有する三個の飛行協會あり、紳士は何れかの協會員に非れば愛國者にあらずとして交際場裡に肩身自ら狹しと云ひ、嘗て「ツエツペリン」飛行船第二號が萊茵河畔に燒失するや、期せずして同情者の義捐金六百萬マルクの巨額に達したりと云ふに徵するも、獨軍今日の空中勢力は、之を國民勢力の賜なりと特筆することを憚らざるものに候

果して、我邦の政治外交及國防の緊張は、今日のものを以て滿足し得べきか、曰く否、帝國は既に世界の强國、獨逸を敵として立てり、歐洲の戰雲漸く收り國際間の新關係始めて定まるに於ては、帝國を驅つて大努力の絶頂に立たしむること無論に候、果して我同胞は公共事業に殉する義俠に於て、英佛、獨のそれに及ばざるものあるか、曰く否、私を捨てゝ公に奉じ義を見て爲さざること無きは大和民族の精華に候、然ば即ち何が故に民間飛行熱の彼に頗る旺盛にして、獨り我に甚だ冷淡なるや、曰く他無し、是れ蒐空機の趣味智識が未だ民間に普及せず空間勢力の占領が國防及文明上に如何なる關係を有するかが、未だ世間に徹底せざるが爲めに有之候、果して然らば我邦現下の最大急務は、空間勢力の趣味智識を社會の各階級に了解せしむるに在ることを確信致し候、乃ち吾人は此の信條に依り、暫く僭越の罪を大方に謝し、蹶然起つて斯會を創設し、飛行趣味智識普及の爲めに心身を犧牲にせんと決意したる所以にして亦全く

聖恩の萬分一に奉答せんと欲する微衷に外ならず候

一、大多數の會員を得ることは、斯道普及の第一要件なり、之が爲めには會費を少ふして入會を容易ならしめ、階級を設けず尊卑を分たず、會員齊しく同一の權利義務を有せしむ、是れ其趣味智識の注入は官民尊卑を論せず一切平等に必要なるが故に候

二、斯道普及の爲めには、之に關する講演を開き、書籍雜誌類を讀むことを必要とす、乃ち雜誌「國民飛行」の購讀を會員に要望せり、只夫れ讀むことが必要なり、數人申合せて一冊を購ひ輪次に之を讀まるるも亦可なり、但し一讀後は之を書架に積むこと無く、勉めて學校、圖書館、停車場、理髮所等の如き常に多人數集合の場所に、寄贈せらるることを希望せしは、速かに江湖に普及せしめんが爲なり、其義務を一年乃至三年と限定したるは、一般會員は蒐空界の趣味智識を一通り了解せらるれば澤山なると、永年間の負擔を强ゆるを欲せざるに外ならず、期限後と雖も其購讀を續け飛行界の時勢關係を知らるることは、希望すべきことにして讀者の利益も亦尠少ならざることを疑はす候

三、會費は飛行機建造の唯一資本に有之候昔時禪僧が零細の米錢を托鉢の中に集めて輪奐の大伽藍を築成せしものと其趣を同ふせんとす、而して其内數隻の飛行機を用ひ民間飛行家に依りて各地に飛翔し實物講演を行ひ斯道普及の目的に供す可し、抑も會費は會員忠愛心の發露なり、吾徒は其至誠を敬重し支出に對して極度の儉約を守ること勿論に候、其收支は雜誌「國民飛行」に廣告して會員の監督を乞はんとする所に候

四、右は第一期の目的にして、第二期の事業は、當期結果の如何に依り之を斟酌すべきは勿論、其内には歐洲の戰爭も收りて、吾人に實戰の新教訓を提供すべく、國際間の新關係は、國防及政治を如何に緊張すべきやの結果をも示すべきを以て、是の時に至り、會員多數の希望に聞き、當局者の要求を參酌して、之を決定するを穩健の順序と認めたるを以て、故らに之を他日の按定に讓れり、若し夫れ此時機に至れば、先輩帝國飛行協會に協議し合同事に任ずるも可なり、或は專門を定め各々其受持に努力するも亦妨げず、要は唯時の宜しきに從はんのみに候

國民飛行會役員名

國民飛行會長　岡外史
同副會長　草間時福

國民飛行會理事（錢順）

法學博士　山田三良
和崎恭彌
矢野恒太
日比谷平左衞門
江木千之
大倉粂馬
森村開作
白石元治郎
鎌田榮吉
鹽田武夫
草間時福
男爵　名和長憲
桐島像一
法學博士　松波仁一郎
星野錫
和田豐治
原富太郎
石田一郎
山根正次
今村繁三
林民雄
高田釜吉
柴田源左衞門
手島精一
大橋新太郎
久能司
前川太兵衞
山科禮藏
兒島八二郎
倉知鐵吉
川村竹治
西園寺八郎
野崎廣太
男爵　中島久萬吉
野中勝明
鈴木梅四郎
兼常猪三
杉原榮三郎
伊豆凡夫
福井菊三郎
中上川三郎治
渡邊勝三郎
堤定次郎
藤山雷太
法學博士　田中穗積
安田伊左衞門
理學博士　田中館愛橘
長岡外史
大倉喜七郎
長岡外吏
國民飛行會監事（錢順）
安田善三郎
原六郎
馬越恭平
國民飛行會々計主任
陸軍三等主計正　別技嘉次郎

國民飛行會入會及送金手續

一　入會方法

イ　直接又ハ書面ニテ事務所（東京市麹町區四番町十番地）ニ申込マレタシ但住所氏名年月日及雜誌購讀期限ヲ附記セラルルコト

ロ　紹介人又ハ廣告シタル新聞社ニ申込マルル事但此場合ニ在リテハ紹介人又ハ新聞社ニ於テイ同樣ノ手續ヲ行フ

二　會費及雜誌代金拂込方法

御本人ヨリセラルルモノ

イ　直接事務所ニ拂込マルルコト

ロ　郵便爲替ニ依リ事務所ニ送付セラルルコト

ハ　振替貯金口座（東京三二〇四二）ニ拂込マルル事

ニ　申込マレタル新聞社ニ拂込マルルコト

本會ヨリ集金スルモノ

イ　本會ノ印章及會計主任ノ認印（別技）アル受領證持參ノ集金人ニ渡サルルコト

ロ　紹介人ヲ經テ入會セラル、方ハ紹介者（イ號受領證引換ニ）ニ仕拂ハルルコト

會費ハ一回限リ金貳圓、雜誌代ハ前金ニシテ左ノ通リトス

一ケ月分　十錢
一ケ年分　一圓七十錢
二ケ年分　三圓三十五錢
三ケ年分　五圓

雜誌代金ハ彼我相互ノ手數ヲ省ク爲メ可成一ケ年以上一時ニ拂込マレタキコト

東京市麹町區四番町拾番地
國民飛行會假事務所

『國民飛行』（毎月一回一日發行）

大正五年三月廿三日印刷納本
大正五年四月一日發行
（第壹卷第四號）

編輯人　東京府豐多摩郡澁谷町字下澁谷六百拾四番地　渡部英一
發行人　東京市麹町區飯田町二丁目三十三番地　柴田英三
印刷人　東京市麹町區飯田町二丁目三十四番地　押谷三
印刷所　東京市麹町區飯田町二丁目三十三番地　長松會社　兵林館印刷工場
發行所　東京市麹町區四番町拾番地　國民飛行會　電話番町五二一九番　振替貯金口座東京三二〇四二

不許複製

大賣捌所（錢順）
日本橋區本石町　至誠堂
京橋區銀座三丁目　東海堂
京橋區元數寄屋町　北隆館
神田區神保町　東京堂
京橋區北紺屋町　良明堂

本誌定價表

部數	前金	郵便料金	合計
一冊	金拾六錢	金壹錢	金拾七錢
六冊分	金九拾錢	金五錢	金九拾五錢
十二冊分	壹圓八拾錢	金拾錢	金壹圓九拾錢

國民飛行會會員の雜誌購讀代金は次表に依る

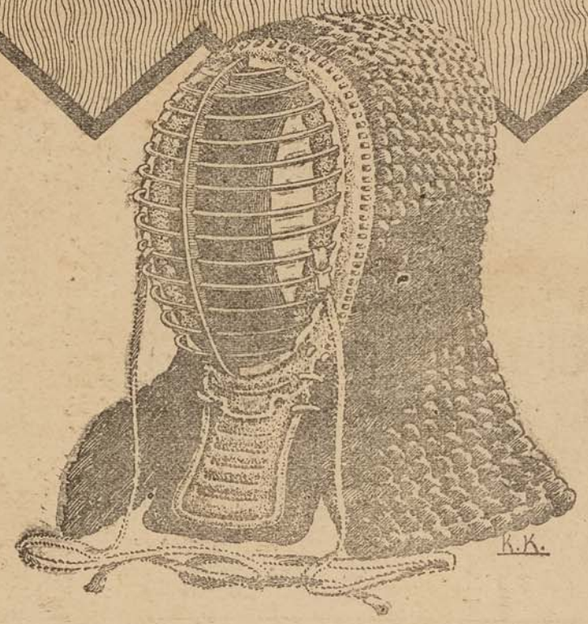
本誌廣告料表

等級	一頁	半頁
特等	金五拾圓	
壹等	金參拾圓	
貳等	金貳拾圓	
參等	金拾五圓	金拾圓

◎年定め又は四回以上連載の分に對しては特に割引仕り候
◎參等以外の半頁廣告は御斷り申候

大正五年一月十七日第三種郵便物認可
大正五年四月一日發行（毎月一回發行）

出版部營業課目　兵書出版、參謀本部地圖、各種印刷



器品部營業課目　銃劍術防具、射擊材料

銃劍術專用防具
軍刀術專用防具
銃劍軍刀兼用防具
撃劍防具各種
柔術及撃劍稽古着
◎目錄御入用の向は御一報次第送附可仕候

東京市麹町區飯田町二丁目
電話番町六二一番　八三一番　九五三番乙　振替東京四九三六番

株式會社六林館